「講談社　青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社　青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫

日本の名作

二十四の瞳	壺井栄
次郎物語(上)(下)	下村湖人
怪人二十面相	江戸川乱歩
八犬伝	滝沢馬琴 福田清人／訳
坊っちゃん	夏目漱石 福田清人／編
吾輩は猫である(上)(下)	夏目漱石
杜子春・トロッコ・魔術	芥川龍之介
走れメロス	太宰治
注文の多い料理店	宮沢賢治
風の又三郎	宮沢賢治
銀河鉄道の夜	宮沢賢治
よだかの星	宮沢賢治
むかしむかしの鬼物語	小沢章友／文
平家物語	高野正巳／訳
源氏物語	紫式部 高木卓／訳
心にのこる日本の詩	嶋岡晨／編

日本の創作

龍の子太郎	松谷みよ子
ふたりのイーダ	松谷みよ子
ふしぎなおばあちゃん×12	柏葉幸子
霧のむこうのふしぎな町	柏葉幸子
地下室からのふしぎな旅	柏葉幸子
天井うらのふしぎな友だち	柏葉幸子
りんご畑の特別列車	柏葉幸子
キャプテンはつらいぜ	後藤竜二
キャプテン、らくにいこうぜ	後藤竜二
キャプテンがんばる	後藤竜二
宇宙人のしゅくだい	小松左京
アイシテル物語(1)～(5)	かしわ哲
はじまりの泉	かしわ哲
ノノック王の涙	かしわ哲
忘れられない約束	かしわ哲
あじさい寮物語(1)～(3)	遠藤みえ子
いちご(1)～(5)	倉橋燿子
青い天使(1)～(9)	倉橋燿子
バイバイスクール学校の七不思議事件	はやみねかおる
そして五人がいなくなる	はやみねかおる

亡霊は夜歩く	はやみねかおる
消える総生島	はやみねかおる
魔女の隠れ里	はやみねかおる
踊る夜光怪人	はやみねかおる
機巧館のかぞえ唄	はやみねかおる
ギヤマン壺の謎	はやみねかおる
徳利長屋の怪	はやみねかおる
パスワードは、ひ・み・つ	松原秀行
パスワードのおくりもの	松原秀行
パスワードに気をつけて	松原秀行
パスワード謎旅行	松原秀行
パスワードとホームズ4世	松原秀行
続・パスワードとホームズ4世	松原秀行
パスワード謎ブック	松原秀行
パスワードvs.紅カモメ	松原秀行
パスワードで恋をして	松原秀行
密着！縄文4000年ツアー	さがらあつこ
ねらわれた街	あさのあつこ
スーパーキッド・Dr.リーチ	令丈ヒロ子
ドルオーテ	斉藤洋
街が謎の緑に染まる	雅孝司
ゲーム・ジャック危機一髪！	ひろたみを

あなたのポケットに名作を！

コロボックル物語

佐藤さとる／作　村上勉／絵

- だれも知らない小さな国
- 豆つぶほどの小さないぬ
- 星からおちた小さな人
- ふしぎな目をした男の子
- コロボックル童話集
- 小さな国のつづきの話



モモちゃんとアカネちゃんの本

松谷みよ子／作

- ちいさいモモちゃん　菊池貞雄／絵
- モモちゃんとプー　菊池貞雄／絵
- モモちゃんとアカネちゃん　菊池貞雄／絵
- ちいさいアカネちゃん　菊池貞雄／絵
- アカネちゃんとお客さんのパパ　いせひでこ／絵
- アカネちゃんのなみだの海　いせひでこ／絵

クレヨン王国シリーズ

福永令三／作　三木由記子／絵

- クレヨン王国の十二か月
- クレヨン王国の花ウサギ
- クレヨン王国いちご村
- クレヨン王国のパトロール隊長
- クレヨン王国の白いなぎさ
- クレヨン王国七つの森
- クレヨン王国なみだ物語
- クレヨン王国月のたまご(1)～(8)
- クレヨン王国からきたおよめさん
- クレヨン王国まほうの夏
- クレヨン王国春の小川
- クレヨン王国の赤トンボ
- クレヨン王国新十二か月の旅
- クレヨン王国黒の銀行
- クレヨン王国森のクリスマス物語
- クレヨン王国水色の魔界
- クレヨン王国王さまのへんな足
- クレヨン王国109番めのドア(1)(2)
- クレヨン王国デパート特別食堂
- クレヨン王国幽霊村へ三泊四日
- クレヨン王国シルバー王妃花の旅
- クレヨン王国超特急24色ゆめ列車
- クレヨン王国ロペとキャベツの物語
- クレヨン王国とんでもない虹
- クレヨン王国12妖怪の結婚式
- クレヨン王国カメレオン別荘村
- クレヨン王国茶色の学校(1)(2)
- クレヨン王国タンポポ平17橋
- クレヨン王国三日月のルンルン(1)(2)
- クレヨン王国しっぽ売りの妖精



講談社 青い鳥文庫　21-5

ムーミンパパの思い出

トーベ=ヤンソン

小野寺百合子 訳

1982年5月10日　第1刷発行
2001年1月29日　第25刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112-8001

電話　出版部　(03)5395-3536
　　　販売部　(03)5395-3625
　　　製作部　(03)5395-3615

N.D.C. 993　268p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

ISBN4-06-147048-5　(児二)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。)

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局
「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ＝ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以後「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。

＊訳者紹介

小野寺百合子（おのでらゆりこ）

1906年，東京に生まれる。東京女高師付属高女専攻科卒業。夫とともにながく北欧諸国に滞在。「ムーミンパパ海へいく」，リンドグレーン作「エーミールと60ぴきのざりがに」など北欧児童文学の翻訳多数。1998年4月没。

を、知らず知らずのうちにムーミンに伝えたことになります。
ムーミンの、あの独特のやさしさは、自分が自分らしく生きることと、他人が他人らしく生きられることとの双方に、同じように思いやりを示さずにはいられない気持ちから生まれているものです。それは、自分らしく生きることの感動を知らずして生まれてくるものではないでしょう。ムーミンがパパから受けついだ最高のものがここにあるのではないでしょうか。この親にしてこの子あり、の感を深くします。
しかしムーミンは、やさしさの点で、パパを越えていると思います。個性をのばして生きようとすればするほど、生きる感動を深くする、という次元にとどまってはいないからです。その感動を知るムーミンは、他人もまたそのような感動にいたることを願わずにいられません。このように、ムーミンは、自他ともに愛することによって、さらにいっそう深い感動にいたることを、ムーミン童話のいたるところでわたしたちに示してくれています。それは、作品を離れて解釈するならば、明らかに、生きとし生けるものが自分らしく生きようとしていることに感動せずにはいられない、作者ヤンソンさんの人柄の現れでもあります。
このような主人公のムーミン童話を、ヤンソンさんは、なぜ書く気になったのでしょうか。それについては、またの機会に考えたいと思います。
（一九八二・四・七）

年輪を重ねた現在のパパが示すこれらの教訓を、ムーミンが自分のものにしていることは、ムーミン童話を読むだけでもはっきりと理解できることです。しかし、ムーミンは、パパがことばで諭す教訓よりも、もっと魅力あるものを、青少年期の冒険家パパの生きる姿勢から感じ取っているように思えてなりません。パパは、冒険を夢みてしゃにむに体当たりしていくとき、生きることの感動を全身で感じています。それがムーミンにとって感動でないはずがありましょうか。例えば、パパが孤児院を脱走したのは、なにからなにまできめられたとおりにしなければならない生活から逃げたかったからです。パパのこの気持ちは、ムーミンの心にまっすぐ入っていくものでしょう。脱走した後にやってくるものへの期待もまた、パパだけのものではないでしょう。一人になって、パパが刻々と生気を帯びてくることもまた同じでしょう。暗くて恐ろしいものを知ります。朝日を浴びるくもの巣やぬれた木の葉、風の香り、鳥の声というように、大自然の美しい営みの一つ一つを、目で耳で鼻で手で感受する喜びを知ります。さらに、夢を実現させたいがために、興味と関心が強くなり、緊張もします。想像力もたくましくなり、実行力もついて、いざ冒険というとき、胸の高鳴りは最高潮に達しています。これらは、パパがパパらしくなっていく過程です。不可能を可能にしていく人生です。いきいきと躍動している人生でもあります。ムーミンパパは、自分らしく生きようとすることが、どんなに大きな感動をもたらすか

洪水を起こさせての船出、世にも恐ろしいモランの魔手からヘムレンを救う英雄的活躍、かみきり魔ニブリングや放電魔ニョロニョロたちとの出会い、大あらしの大航海、巨竜との対決、未知の王国での冒険、自由人村の建設、空を飛び、水上を走り、海底へ潜水する船の冒険、おばけとの同居、大あらしの海でムーミンママを救助と、息つくまもないくらい冒険が続きます。

冒険家になりたかったパパにとっては、悔いのない青少年期だったようです。作品では、これらの冒険を、現在では一家の柱となっているパパが、回想記として一区切り書き上げては、ムーミンたちに語って聞かせる形式をとっています。その現在の時点にもどっているとき、パパは、冒険体験から得た、いくつかの教訓めいたことを、確信をもって語っています。「ほんものの冒険家として生きるのだよ。それをけっして忘れてはならないよ。」というのもその一つです。しかしこれは、ほかのところで、自身の冒険を「無鉄砲」ともいっていますから、けっして、パパのような冒険家になれ、という意味にはとれないと思います。冒険家の心意気を忘れないように、という意味でしょう。さらに、回想記の末尾では、子どもたちが若者らしいすぐれたムーミンの一員になるために、冒険にみせた自分の経験・勇気・知恵・徳・ばかさかげんを学び取ってほしい、ともいっています。さらに、パパは冒険のあと正しい観察力や良識を持つにいたった、との記述もみられます。

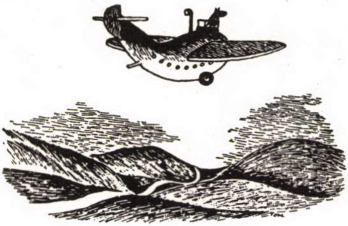
解説…ムーミン童話の四つめのなぞ

高橋静男
（フィンランド文学研究家）

本書は、ムーミンシリーズの中で、もっともサスペンスに満ちた作品ではないでしょうか。全編、青少年期のムーミンパパのはらんに富む冒険の連続ですし、スナフキンやスニフやミイたちの親が登場したり、ムーミンパパとムーミンママが初めて会ったときのことなど、これまで秘密であったことがつぎつぎに明らかにされていきます。

また、本書の注目すべき点は、ムーミン童話の人気を支えているムーミンの、あの独特のやさしさの根源が、ムーミンパパから受けつがれていることを暗示していることではないでしょうか。あのやさしさの出自ともいうべきものがあるとすれば、いろいろな意味で異色であるこの作品が、シリーズの一作と呼ばれるにふさわしい理由ともなりましょう。いったい、息子ムーミンが、父親ムーミンパパから受けついだものはなんだったのでしょう。

本書の大部分を占めているムーミンパパの青少年期の回想は、捨て子として孤児院に収容されたときからはじまっています。その後は、孤児院脱走、天涯孤独の荒野の彷徨、巨竜を欺いて大



そうして、きりふかいあけがた、みんなは庭にせいぞろいをしました。東の空は、日の出をまってはれてきました。太陽はいま、あがろうとするところです。数分のうちには、夜はおわり、なにもかもが、またはじめからはじまるのです。

あたらしい門のとびらがひらかれます。不可能を可能にすることもできます。あたらしい日がはじまるのです。そして、もし人がそれにはんたいするのでなければ、どんなことでもおこりうるのです。

トディが、こんなにいっぱいベランダでのまれたことは、いままでにありませんでした。

スニフのパパとママが、ボタンのコレクションの種類わけをはじめて、その場で半分をスニフにやりますと、ミムラ夫人はおちつかなくなって、子どもをみんな、戸だなの中にかくしました。

フレドリクソンが、コップを高くあげて、大きな声でいいました。

「おしずかに。あした……。」

「あした。」

と、ムーミンパパは青年のように目をきらきらさせて、くりかえしました。

フレドリクソンは、つづけました。

「あした、また、冒険をつづけます。わたしたちは、海のオーケストラ号でとぶんです。みんな、そろってですよ。パパたちも、ママたちも、子どもたちも。」

「あしたじゃなくて、こんやだい。」

と、ムーミントロールがさけびました。

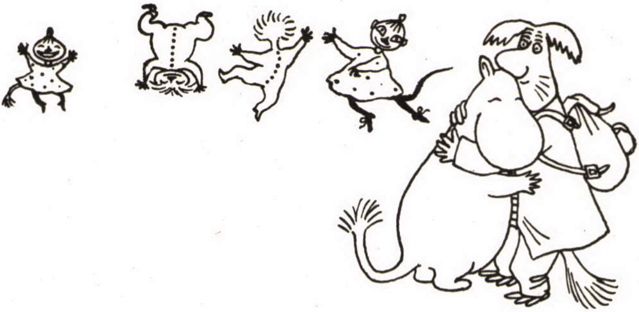


ヨクサルは、火のきえたパイプをくわえて、たっていました。ミムラ夫人は感激のあまりないていました。ミムラのむすめと、三十四人のミムラっ子たちと、それにちびのミイ（この子はちっとも大きくなっていませんでした）もたっていました。

なんとも書きあらわしようのない夜でした。

山のような質問と、よびあいと、だきあいと、話しあいがつづきました。ラム





「いるとも。親たちがいく人かだ。だけど、あいつらはちっとばかりはずかしがりやなんでね。」

こういって、フレドリクソンはわらいました。

「だれの親たち？」

スニフとスナフキンが、さけびました。

「きみたちのだよ、あたりまえさ。かれらはすこしはずかしがりやで、はいってこようとしないんだ。」

これをきいて、スニフとスナフキンは雨の中へとびだしていきました。そこにはふたりのパパたちママたちが、さむさにふるえてたっていました。こんなに長いこと、ごぶさたしていたのを、気にしていたのです。ロッドユールは、ソーストユールの手をひいていました。そしてふたりとも、ボタンのコレクションをいれた、大きなかばんをもっていましたっけ。

「ここを見つけるのにゃ、すこしばかり時間がかかったぜ。やあやあ。」
　ムーミンパパは、有頂天になってさけびました。
「きみは、まるで年をとっていないね。おお、なんてうれしいんだ。おお、なんてうれしいんだ。」
　そのとき、小さな力のない声が、きこえてきました。
「こんな運命の晩には、わすれられたほねが、海岸でいつもよりもよけいにガラガラと鳴っているよ！」
　こういって、フレドリクソンのリュックサックから、おばけがそのすがたをあらわして、にたにたわらいながら、はいだしてきました。
「まあ、ようこそ。ラムトディをめしあがりますか。」
と、ムーミンママがいいました。
「ありがとう、わたしに一ぱい。おばけに一ぱい。それから外にいるれんじゅうにも、何ばいかを、あげてください。」
と、フレドリクソンがいいました。
「何人もいるのかね。」
と、ムーミンパパはたずねました。

「それからロッドユールだ。ぼくのたったひとりしかないパパなのに、いなくなっちゃったの。あの人のボタンのコレクションのことや、ソースユールの話を、ちっともしないじゃない。」

ベランダの上は、しいんとしました。

ちょうどそのとき、ほんとうにふしぎなことに、この物語にはぜったい必要な瞬間なのですが、戸をノックしたものがありました。みじかく、つよく、三回のノック。

ムーミンパパは、いすからとびあがってどなりました。

「だれだ。」

すると、ひくい声が答えました。

「あけてくれ、外は雨でさむいんだ。」

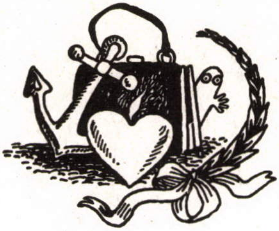
ムーミンパパは、戸を大きくあけたとたんに、

「フレドリクソンじゃないか。」

とさけびました。

ベランダへはいってきたフレドリクソンは、ぶるっと雨のしずくをふるいおとしていいました。

「たぶんね。」
「だけどね、それからあとはどうなったの。」
と、スニフがどなりました。
「ああ、それからがね……。」
と、ムーミンパパはいって、家も家族も、庭もムーミン谷も、そのほか青春時代につながるものすべてを大きくだきかかえて、つつみこむような身ぶりをしました。
「みなさん、そろそろ夕がたになりますよ。」
と、ムーミンママがおずおずいいました。
きゅうにふいてきた風が、ベランダをガタガタいわせました。雨もふりこみました。
「こんな晩に海にいたら……。」
と、ムーミンパパは、気がぬけたようにいいました。
「でも、ぼくのパパはどうしたのさ。ヨクサルのことだよ。あの人はどうなったの。それにママだってさ。」
と、スナフキンがいいました。するとスニフもいいだしました。



エピローグ

ムーミンパパは、思い出の記を書いていたペンを、ベランダのテーブルの上においていて、ものもいわずに家族たちを見わたしました。

「おめでとう。」

と、ムーミンママは感激していいました。

「おめでとう、パパ。さあ、パパは有名になるよ。」

と、ムーミントロールがいいました。

「なにをいうんだ。」

パパはそういうなり、いすからとびあがりました。

「みんながこの本を読んだら、パパは有名な人だと信じることだろうな。」

と、ムーミントロールはいいましたが、じじつ、そう思いこんでいたのです。

著者は、耳をうごかし、うれしそうにいいました。

くなっていきました。わたしが書いておきたかったのは、ほんとうは、そういうものだったのですよ。

これらのことがおこったのは、みんなとんでもなく遠いむかしのことです。けれども、こうしていまあらためて思い出をよみがえらせていると、そんなことがもういちど、まったくべつな形でおこるような気がしてきます。

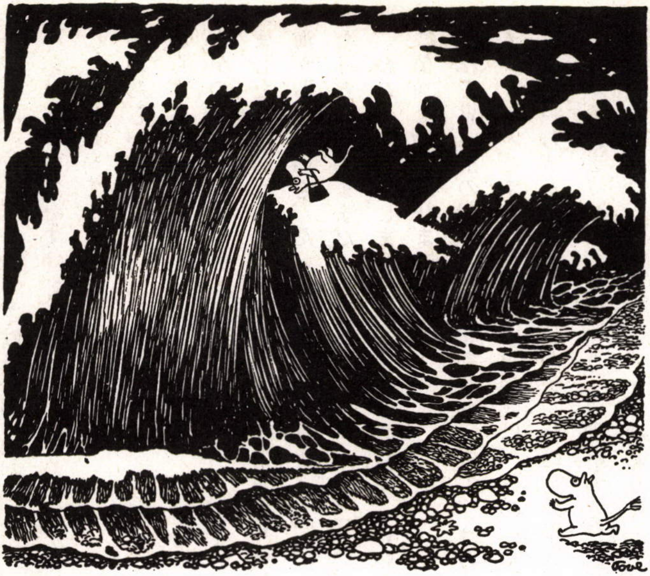
わたしはここで、思い出の記のペンをおきますが、冒険のすばらしい時代がこれでおしまいだとは、どうしても信じられないのです。それでは、つまりませんものね。

勇敢なムーミンたちには、めいめいでわたしの経験、わたしの勇気、わたしの知恵、わたしの徳を、できることならわたしのばかさかげんもいっしょに、学びとってもらいたいものです。こういう人物の経験から学ぼうとつとめることが、いちばんいいのです。さもないと、わかものらしいすぐれたムーミンになるには、いちどははらんにとんだくるしい体験で、じぶんをきたえなければならないことでしょう。

これで、思い出の記はおわりますが、つぎにたいせつなエピローグがつづきます。

ページをめくってください！

かの女は、たちあがってさけびました。
「ハンドバッグをたすけて。ハンドバッグをたすけて。」
「じぶんでもってるじゃないか。」
と、わたしが注意すると、
「あら、あったわ。うれしい……。」
と、かの女はいって、大きな黒いハンドバッグをあけて中をかきまわして、なにかをさがしはじめました。そのうちに、やっとコンパクトをとりだしましたが、かなしそうにいいました。
「海がおしろいを、だいなしにしたようよ。」
「だけど、そのままだってきみはきれいだよ。」
と、わたしは保証しました。するとかの女は、いいようもない目つきでわたしを見あげて、まっかになったではありませんか。
これで思い出の記をおわらせてもらいます。はらんのおおかったわたしの青春の、これは大きなまがりかどですものね。思い出の記は、このへんでおしまいにさせてください。ムーミンのうちでも、いちばんかわいらしいのが、わたしの生活の中にはいってきたこのへんで。
これからあとは、かの女のやさしい理解ある目に見まもられて、わたしの道楽は、正しい観察力や良識にかわっていきました。そのかわりに一方では、無鉄砲で自由な勇気は、わたしからな



超自然の力でもって、わたしは足をしっかりと、砂地にふんばりました。そうやって、浜べへむかってはっていくあいだじゅう、うえきった波は、わたしのしっぽをつかもうとしました。わたしはよろめいたり、もがいたり、たたかったりして、やっと浜べにこのうつくしい荷物をおくことができました。ざんこくでらんぼうな波のとどかない、安全な浜べにです。

おお、それはヘムレンさんをたすけたのとは、大ちがいでした。わたしのたすけたのは、わたしとそっくりの、ひとりのムーミン——わたしよりずっとうつくしい、かわいい女のムーミンだったのです。

ようにほえながら岸にむかっておそってきて、それからつめをのばしてわたしの頭よりたかくのぼっていき、そうして砂浜へくだけおちるのでした。それからやみの中へ音をたててひいていき、また、もどってくるのでした。

このありさまを思いだすと、わたしはどうにもたまらなくなるのです。

海が、ムーミンママをわたしたちの島へなげてよこしたかっきりその夜、くらさやさむさ——それはムーミンのいちばんのにがてなのです——をものともせず、わたしを海岸におりていかせたものは、いったい、なんだったのでしょうね。ああ、自由とはなんとすばらしいものでしょう。

ママは、一まいの板きれにつかまって、波に流されただよってきたのでしたが、入り江にまりのようにういているかと思うと、つぎの波で、また海へひきもどされるのでした。

わたしは、水の中へとびだしていって、声をかぎりにどなりました。

「ぼくがたすけにきたぞ。」

そのときママは、またこっちへもどってきて、板きれをはなし、足を上にむけて、浮きつしずみつ流されていました。

まばたきするよりはやく、まっ黒な水のかべが、こちらに近づいてくるのが見えました。わたしはその遭難者をきっちりとつかみましたが、その瞬間、わきたつ波の中にまきこまれてたおれました。

と、わたしはぼんやりといいました。

「風力8かな。それ以上じゃあるまいよ！」

と、フレドリクソンはいいすてて、絵本の波に見いりました。

「ぼく、外へでて、ちょっと天気を見てくるよ。」

と、わたしはつぶやいて、風しもの戸をあけてふらふらとでていきました。一瞬、わたしはじっと立ちどまって耳をすましました。

まわりのくらやみは、おどしつけるようにくだける波の音で、いっぱいでした。わたしは海にむかって息をすいこみ、それから耳をうしろのほうにくっつけて、風かみのほうへむかいました。あらしがうなり声をあげておそいかかってきたので、わたしは目をつぶりました。こんな秋の夜には、とかくいまわしいものがでてきがちです。わたしはそんなものを見たくなかったのです。考えるのもいやでした……。

ぜんぜんなんにも考えないでいるときがあるものですが、このときのわたしはそうでした。ただわたしは知っていたのです。波がくだけている海岸へ、わたしはおりていかなければならないということを。それは魔法の感覚ともいうべきもので、その後のわたしの一生のうちでも、たびたびそういうことがあって、そのたびにすばらしい結果を生んだものでした。

月が夜の雲間からでると、ぬれた砂は金のように光りました。波は、一列にならんだ白い竜の

と、子どもたちはさけびました。

「そうそう、そうだったわね。パトロールのおまわりさん、ツイッグスが、そっとそばへしのびよりました。むこうのほうで光ったのは、ピストルだったのでしょうか。氷のような冷静な決心で、ツイッグスは、ふくしゅうの正義心にこりかたまった、歩みをすすめました。そして、一度たちどまってから、またまえへしのんでいき……。」

わたしは、ミムラの話にぼんやりとききいっていました。それは、もう何度もきいたものでした。

「いいお話だなあ！」

と、おばけがいいました。おばけははりさしにししゅうをしているところでしたが（黒いフランネルにほねの十字でした）、かた目はとけいを見ていました。

ロッドユールは、ストーブの火のまえにすわり、ソースユールの手をにぎっていました。ヨクサルはトランプうらないをしていましたし、フレドリクソンははらばいになって、「大航海」の絵本をながめていました。なんの心配もない、いごこちのよい家庭的なふんいきでした。それなのに、それを見ていればいるほど、わたしは気がおちつかなくなって、ふしぎないらだちを足に感じました。

ひっきりなしに、くらいまどガラスは、波のしぶきにあらわれ、ガタガタ鳴りました。

「こんな晩に海にいようもんなら……。」

を、だれがなみだなしで話すことができましょうか。

いちばんこまったことは、そんなかれらのくらしかたが、わたしにもうつってしまったことでした。わたしは、タイルストーブのそばにみんなといるのが、たのしくさえなりました。そうなればなるほど、うみわしのように自由にいさましくとびまわるのが、おぼつかなくなったのです。愛する読者のみなさん、わたしの気持ちがわかってくれますか。わたしははじめのうちは、たとえとじこめられていても、外のことに気をくばっていたのでしたが、しまいにはなんにも考えなくなってしまいました。あらしはなおやまず、雨もふりつづいていました。

わたしがこれから話そうとするこの夜は、とくにひどい天気でした。屋根はガタガタと鳴り、南西の風はときどきえんとつのけむりをふきもどし、雨はベランダの上に小さなかけ足をしてふりこみました。(わたしはブリッジをベランダに改造して、手すりには、まつぼっくりをほりました。)

「ママ、大きい声で本を読んでくれない?」

と、ミムラの子どもたちが、ベッドの中からたずねました。

「そうね。どこまでだったかしら。」

と、ミムラ夫人はいいました。

「パトロールのおまわりさん――ツイッグスが――そっと――そばへ――しのびよりました。」

そのうちに、大あらしがやってきました。ミムラのうちはふきとばされ、むすめたちは外でねたためにかぜをひくし、ロッドユールのコーヒーかんには、雨がふきこみました。上等のタイルストーブをもった、ちゃんとした家に住んでいたのは、わたしだけでした。

こういうときは、どうしたらいいものですかね。いうまでもなく、まもなくみんなは、わたしの家に住むようになったのです。

ところで、操舵室の中に家族がふえてみると、わたしはよけいに孤独を感じるようになりました。

友だちが村をでて結婚したり、または王室づきの発明家になったりするのが、どんなに危険なことか、わたしにはうまく説明できません。しかし、こんなふうだと、自由の村の冒険友だちも、さびしくなって、世界地図の上のどんなところへだって、かってに去っていくかもしれませんよね――。

――ところが、とつぜんかれらは、もうどんなことにも無関心になってしまったのです。ただ天気があたたかければいいんで、雨をいやがりました。大きな問題を、すきまもないほどかかえていながら、そのくせ口にだすのは、小さなつまらないことばかりです。おまけに、きゅうにものごとがきまるのをおそれて、わざとぎゃくをいったりします。もとは、船をあやつって海を走りまわったかれらが、いまはせとものをのせるたなをつくったりしています。ああ、こんなこと

こういってパパは、ノートをひらいて読みだしたのです。

秋になって、大つぶの雨がふりだし、きりが王さまの島をつつんだきり、はれませんでした。わたしは、海のオーケストラ号のあのすばらしい試験飛行と潜水は、わたしたちが世界へでていく大旅行のほんのはじめにすぎないと信じきっていました。けれども、そうではなくて、あれが絶頂——あとのつづかないクライマックスだったのです。

ロッドユールの結婚式がおわり、フレドリクソンがうちへかえってくると、かれは発明品の改良にとりかかりました。やりなおしをしてみたり、つくりたしてみたり、つけてみたりはずしてみたり、みがいたりぬったりで、どこまでもきりがありません。しまいには海のオーケストラ号は、客間のようなものになってしまいました。

ときにはフレドリクソンは、王さまや、あたらしい自由の村の人たちといっしょに、あそびにもいきました。でも、夕飯どきにはいつもうちへかえってきました。

わたしは、なおもあこがれをもっていました。わたしをまっているはずの大きな世界へのあこがれに、まだこだわっていたのです。しかし、雨はだんだんひどくなるし、同時に、下部のかじとか、照明とか、クランク箱のふたとか、そのほかいろいろと整備しなければならないものや、かえたほうがいいことが、なにかしらありました。

と、ムーミンママがまちうけ顔にいいました。

「きょう、思い出の記が完成した。さいごの一語を書いたのは、六時四十五分だった。それがさいごだという意味は――そう、おまえたちがかってにとったらいいよ。」

と、パパはふといい声でいいました。

「おじさん、ニョロニョロといっしょにした、わるいくらしというのについては、なんにも書いてないの。」

と、スニフがききました。

「ないよ。なにしろ、これは教科書になるんだからね。わかるだろ。」

と、ムーミンパパはいいました。

「それだからか。」

と、スニフがいいました。

「しいっ、しいっ、しいっ。ところで、もうそろそろ、あたしがあらわれるんではない？」

こういってムーミンママは、顔をあからめました。

ムーミンパパは、コップのお酒をたっぷり三口のんでからいいました。

「まさにそのとおりさ。よくきくんだよ、子どもたち。いちばんおしまいのところはな、わしがどういうふうにしてママを見つけたか、それをのべているんだよ。」

石がはめてありました。
「この石は、はずせるのかしら。」
と、ソースユールがききました。
「はずせるとも。結婚プレゼントの中には、きりはなかったかね。」
と、ロッドユールがいきおいよくいいました。
ちょうどそのとき、海岸でおそろしい声がしました。その声はこういっていました。
「やい、ここであったが百年めだぞ。ここでおれは、朝のコーヒーをまってまってまちくたびれたわい。おまえらのうちだれひとりとして、年よりのエドワードのことを思いだしてくれるほど、しんせつな気持ちのあるものはいないんだな。」

ムーミンパパが、ロッドユールの結婚式のところを読んだ日から、二、三日たってから、パパの家族たちはそろってベランダにすわっていました。
九月のすえのあらしのきそうな夕がたでした。ムーミンママは、みんなのために、シロップパンとラムトディを用意しました。家族はみんな、大きなお祝いごとのときにしかきない晴れ着をきて、めかしこんでいました。
「どうぞ。」

そっと、フレドリクソンがききました。
「きみは、教育あそびはすきかい。」
「とてもすきだよ。」
と、ニブリングはいいました。
わたしはぺったりとすわりこんだまま、なんといっていいかわかりませんでした。
「どうか、つつみをあけてくれ！」
と、ロッドユールがどなりました。
ニブリングがもったいぶってひもをかみきると、ニブリング女王におめかしをしたヘムレンおばさんの実物大の写真がでてきました。
「おばさんの鼻がまだついてる。ああ、よかった。うれしいなあ。」
と、ロッドユールがさけびました。
「あなた、がくぶちをごらんなさいな。」
と、ソースユールがいいました。
みんながくぶちを見て、「あっ。」とさけびました。それは、スペイン純金でできていて、トパーズとかんらん石でつくったばらの花が、すみずみについていました。
写真をかこんでぐるりと小さなダイヤがならんでいました。うしろがわには、ふつうのトルコ

て、心からうれしく感じております。それに、ロッドユールが結婚の決心をしたときいて、感激のあまり、なみだがあふれでました。

愛する子どもたち！　わたしはあなたがたにお礼のいいようがないのですよ。まず第一に、わたしがモランにたべられるところを、あなたがたはたすけてくれました。つぎには、すばらしいニブリングたちに、わたしを紹介してくれました。

ありのままのことをいうのが義務だと思いますからいいますが、わたしは、ニブリングたちとほんとうにたのしくくらしているんですよ。だいじな結婚披露宴にいくためにさえ、うちがはなれられないほどたのしいのです。わたしたちは一日じゅう、教育あそびをしています。そして、健康な冬のくるのをたのしみにしているところなんです。

あなたがたをあんまりがっかりさせないために、わたしは高価な結婚プレゼントをおおくりいたします。これがすえ長くロッドユールのコーヒーかんをかざるよう、祈りつつ。

感謝をこめて　ヘムレンおば

六千九百九十九ひきのニブリングから、よろしくとのことです。

丘の上は、しいんとなりました。

みんなは、がまんできずにぴょこぴょことびあがりました。
「いそいで、いそいで。」
と、王さまはどなりました。
やっと、ニブリングはしわくちゃの手紙をとりだして説明しました。
「ヘムレンおばさんが、ぼくに書きかたを教えてくれましたんです。ぼくは、字をほとんどぜんぶおぼえました。ただ、UVXYZÅÄÖだけはだめでした。これは、おばさんが読んで、ぼくが書きとったものです。おばさんは、こういっています。」
ニブリングは息をついてから、たどたどしく読みはじめました。

愛する子どもたちへ

たいへん残念であり、またすまないと思います。また、わたしがつとめをはたさないのはほんとうにもうしわけないことです。そのおわびのつもりで、この手紙を書きつづります。

わたしはどうしても、あなたがたの結婚式に出席できませんの。この失礼をおゆるしください。

ほんとの話、わたしはあなたがたがわたしをなつかしんでくださるのだとうぬぼれ

と、王さまはもうじっとしてはいられなくなって、玉座をはなれて海岸へおりてきて、ききました。
「あれは、ぼくたちの古なじみのニブリングなんです。それに、あれはうでに、とっても大きなつつみをかかえているじゃありませんか。」
と、わたしはいいました。
「じゃ、つまりおばさんは、たべられてしまったのだな。」
と、フレドリクソンがいいました。
王さまは霧笛を鳴らしてさけびました。
「しずかにせい、しずかに、しずかに。ニブリングのために道をあけろ。あれは大使閣下だぞ。」
群集はわきへよけて、花よめ花むことニブリングのために道をあけました。三人ははずかしそうにわたしたちのほうへ歩いてきて、地面につつみをおきました。つつみのすみはちょっとばかりかじられていましたが、そのほかはちゃんとしていました。
「それで?」
と、王さまはいいました。
「ヘムレンおばさんからよろしくって……。」
こうニブリングはいって、むちゃくちゃに晴れ着のポケットをさがしました。

「まあ、あきれた。なんておかしなこと。」
と、ミムラのむすめはあきれるし、
「あたしたち、もうじき死んじゃうのよ。」
と、ちびのミイはいいました。
ちょうどそのとき、群集のあいだに、ざわめきがおこりました。貨物船が近づいてきたのです。
ヘムル自由楽団は、いそいで賛美歌「われらおろかな国民をまもれ」を奏しはじめ、新婚スワン船は、港からこぎだしました。
ミムラの子どものうち何人かは、あんまりさわいで海におちました。霧笛が鳴り、ヨクサルはおちつきをうしなってにげだしました。
そのときはじめて、わたしたちは貨物船がからっぽなのを発見して、これは七千のニブリングが、のれなかったせいだと考えました。浜べには、安心と落胆のまざりあった声があがりました。
小さなニブリングがたった一ぴき、いそいで浜へこぎかえる新婚スワン船に、とびうつりました。
「どうしたんだ、ニブリングがたった一ぴきとは！」

ロッドユールとソースユールは、スワン形の新婚船にのりこみました。
みんなはヘムレンおばさんのうわさでいらいらして、おちつけませんでした。おばさんのあの性質が、国じゅうにひろまっていたからです。そのうえ、ニブリングが地面をほって、地下に国づくりをしないか、森をたべつくしはしないかと、それも心配でした。このことを、のんびりとボタンの交換をしている新婚のふたりに話す勇気のあるものは、だれもありませんでした。
「ヘムレンおばさんを、りんか、やに糸かなんかでおどかして、おっぱらうことができるんじゃない？」
と、おばけがいいました。おばけはすわりこんで、ソースユールにあげるポットカバーに、がいこつをししゅうしているところでした。
「だめだね、それはだめだね。」
と、わたしはくらい気持ちでいいました。ヨクサルは、こう予言しました。
「おばさんは、きっとまた、教育あそびをはじめるつもりでくるぜ。冬になったら、ぼくらの冬眠をじゃまして、むりやりにスキーをさせるにきまっているな。」
「冬眠ってなあに。」
と、ミムラのむすめがきくので、フレドリクソンが答えました。
「雨や雪のふる季節に、ねむってやすむことだよ。」

「でもねえ、きみたちはどうしてもヘムレンおばさんを、招待しなければならないかい。それにニブリングたちも?」

「ごめん、でも、案内がいかなかったら、あの人たちきっと、さびしがるだろうと思ってさ。」

と、ロッドユールはいいました。

「いや——おばさんか、おばさんか。」

と、わたしはどなりました。

ロッドユールは、しょうじきにいいました。

「わかってくれ、ほんとうはぼく、おばさんが、そうたいしてなつかしいわけじゃないんだ。だけども、ごめん、ぼく、気がとがめているんだ。あの人をたべてしまうものがあれば、ありがたいといいのったのは、ぼくだったものね。」

「ふん、なるほど。わけはあるんだな。」

と、フレドリクソンはいいました。

貨物船がつく時刻には、桟橋も丘も海岸も、王国の人たちでいっぱいでした。王さまは、いちばん高い丘の上の玉座についていて、あとはヘムル自由楽団に合図をあたえればいいだけに、用意がととのっていました。

「だけど、おまえたち、わしの話のこしをおらないでおくれ。とにかくこれは思い出の記であって、親類しらべではないんだから。」
「パパは、さきをつづけていいんだろ。」
と、ムーミントロールがきくと、スニフとスナフキンが答えました。
「いいともさ。」
「ありがとう！」
と、ムーミンパパはかるくいって、話をつづけました。

一日じゅう、ロッドユールとソースユールは、いろんな結婚祝いをもらいました。とうとう、コーヒーかんはいっぱいになり、ボタンだの石だの巻き貝だの、戸だなの取っ手だの、そのほか、かぞえるのがいやになったほどたくさんのものが、山とつまれました。
ロッドユールはその上にすわって、ソースユールの手をとり、よろこびにわれをわすれていいました。
「結婚するって、なんてたのしいことだろう。」
「まったくね。」
と、フレドリクソンはいってから、つづけました。

マは、りっぱなボタンのコレクションをつくった、しあわせな人だったのよ。」
と、ムーミンママはやさしくいいました。
　スニフはムーミンパパをきつくにらんでから、つぶやきました。
「そうかなあ。」
　そこで、パパが説明しました。
「すごいボタンのコレクションだったよ。そのほかに、石や巻き貝やガラス真珠や、ちょうどきみがほしがるようなものもさ。たいしたものだったよ。」
　スニフは、思いにしずみました。
　すると、スナフキンがいいました。
「ママっていえば、あのミムラってどんな人だったの。ぼくにもママだったんでしょ。」
　ムーミンパパはいいました。
「あたりまえさ。おまけに、とってもいい人だったよ。」
「そうすると、ちびのミイはぼくの親類になるんだね。」
と、スナフキンはふしぎそうにいいました。
「うん、たしかにそうだね。」
　こういってから、ムーミンパパはつづけました。

「せっかくパパがわかいときの話を読んでくれているのに。」
と、ムーミントロールがうらめしそうにいうと、スニフは思いがけないほどいばっていいました。
「ぼくのパパのわかいときのことだよ。ロッドユールのことは、もうじゅうぶんにきいたよ。だけど、ソースユールのことは、いままでひとこともきいたことがないじゃないか……。」
「あの子のことはわすれていたんだ。いまはじめて登場させるんだ……。」
と、ムーミンパパは、ばつがわるそうにいいました。
「ぼくのママのことをわすれたんだって。」
と、スニフがさけびました。
寝室へつうじる戸があいて、ムーミンママがのぞきこみました。
「まだみんなおきてるの？　だれかが『ママ！』とどなったと思ったけど――。」
「ぼくだよ。」
と、スニフはいって、ベッドからとびだしました。
「ちょっと考えてみてよ。こうしてパパ、パパと、ぼくのパパのことはさんざんきかされた。そしたらきゅうに、なんのまえぶれもなく、ママもあることを知らされたんです。」
「だけどね、ママがあるのはあたりまえでしょ。あたしの知ってるところでは、あんたのマ

ソースユールは小さな声でこういって、おじぎをしました。
王さまは、すぐに文句をつけました。
「だがな、わしは午後までまてといったじゃないか。それじゃ、盛大な披露宴はしてやれないぞ。」
「ごめんなさい。でもわたしたちは、もうこれ以上まてなかったのです。たがいにこんなにも愛しあっているのですもの。」
と、ロッドユールがいいました。
「これはこれは。」
と、ミムラはあわてて、桟橋へとびおりていって、いいました。
「おめでとう。なんと愛らしいソースユールだこと。わかいおふたりさん、おめでとう！　あんたたちはほんとに結婚なさったのね。」
「いま結婚したところよ。」
と、ちびのミイはいいました。

ここでスニフがきゅうにたちあがって、「ストップ。」といったので、ムーミンパパの朗読はこしをおられました。



「うんうん、それはたしかなんじゃ。鼻が半かけの、おこりんぼうのおばさんだそうだ。わしはびっくりごとはだいすきだが、すきなのは人をびっくりさせることでのう。」
と、王さまはいいました。
そのあいだに船は、岸に近づきました。桟橋のはしに、ロッドユールがソースユールをつれて、たってまっていました。海のオーケストラ号がつくと、フレドリクソンは、そこにたってわたしたちをふしぎそうに見ていたけらいたちにむかって、ロープをなげながらいいました。
「それで……。」
「ごめん、ぼく結婚したよ。」
と、ロッドユールがいいました。
「あたしとよ。」

とおこりんぼうのおばさんを、わしの王国へいれるわけにはまいらぬからな。」
「だれが結婚するんですって?」
ミムラは、がまんができないできききました。
「いまいったろ。ロッドユールじゃよ。」
と、王さまは答えました。
「そんなはずは、ないがなあ。」
といったのは、フレドリクソンでした。
「そうじゃ、そうじゃ、そうじゃよ。いますぐ結婚するんじゃや。ソースユールとな。」
王さまは、いらいらして答えました。
「ふたりはひと目ですきになってしまい、ボタンの交換をしたり、散歩したりしているうち、じゃまもはいらんもので、あほうになりっぱなしよ。それでいまふたりは、おばさんと——おばさんはたべられちまったらしいのだが——七千びきのニブリングに電報をうって、結婚式にみんなを招待したわけなんじゃや。もしやつらにこの国じゅうをほりかえさせないですむものなら、わしはわしの王冠だってたべてみせるよ。——だれかわしに、ぶどう酒一ぱいくれんか。」
わたしは、王さまにコップをわたしながら、あわててききました。
「ふたりが、ヘムレンおばさんを招待するなんてことが、ありうるでしょうか。」

なければいいが……。」
フレドリクソンは、そういってフルスピードにしました。
「どうなさったのですか。」
わたしたちが、小船のわきでブレーキをかけてとまったとき、ミムラはさけびました。
王さまは、どなりました。
「どうしたって？　どうもこうもないさ。くるっているんじゃ。おまえらはすぐさま、うちへかえらにゃいかんぞ。」
「わすれられたほねが、やっとふくしゅうをやらかすのだね。」
おばけは、期待するようにたずねました。
「なにもかもみんなきめたのは、おまえらの仲間のロッドユールじゃ。」
と、王さまはふうふういいながら、船へあがってきました。
「さあ、ボートのしまつをだれかしろ。わしは、じぶんでおまえらのあとをおいかけてきたんじゃ。なにしろ、わしのけらいどもはぜんぜん信用するわけにいかんのでな。」
「なにもかもきめたのがロッドユールですって？」
と、ヨクサルがさけぶと、王さまはいいました。
「うん、たしかにロッドユールじゃ。わしは結婚式が大すきだ。しかし、七千びきのニブリング

第8章



ロッドユールの結婚式のようすをのべ、劇的なムーミンママとの出会いにもふれて、さいごに、わたしの思い出の記の意味深長なむすびのことばを書きます。



海岸から十海里のところで、SOSの信号をかかげている小船が、目にはいりました。わたしは、おどろいていいました。

「あれは王さまだ。こんなに朝早く、わが国で革命がおこるなんてことがあるだろうか。」（王さまのけらいたちが、そんなことするはずはなかったのですが。）

「革命だって？　ぼくのおいっ子になにかおこら

ながもうねむくてねむくて、ぐったりしていましたっけ。



りむいてどなりました。
「あすの朝、コーヒーをのみにいくからな。そのときは、うんとこくいれてくれよな。」
そのときふいに、またあたらしいことがおこりました。海底ぜんたいが光りだしたのです。
「こんどはまた、あたしたち、もえちまうわ。」
と、ちびのミイがいいました。
何百万、何千万というさかなたちが、四方八方からおよいできて、それがみんな、あかりをつけていたのです。シャンデリア・懐中電灯・ランプ・ろうそく・電球・アセチレン灯など、さまざまなあかりでした。両耳に小さい電球をつけているのもいました。みんなはうれしそうに、感謝のおどりをおどりました。
それまで陰気だった海は、にじのようにかがやきだしました。海底は青々としたしばふのようで、その上にむらさきや赤や黄色のいそぎんちゃくの花がさきみだれ、うみへびたちは、よろこびのあまり、さかだちをしていました。
わたしたちのかえり道は、がいせんそっくりでした。海の中を大きく弧をえがきながら、船は縦横に走りまわりました。まどの外をとおりすぎる光が、海のあかりか星のあかりかわからないくらいでした。
朝になって、わたしたちはやっと、王さまの島めざしてかえってきました。そのときは、みん

「子どもたち、おじさんにキスしておあげ。」
と、ミムラは感動してなきだしましたが、竜のエドワードはいいました。
「なんだって……。子どもたちをだしちゃいかんぞ。おれの耳の中にはいこむのがせきのやまだからな。おまえらはどうも、だんだんわるくなるな。いまにたべるねうちもなくなるんじゃないか。おれはおまえらをさがしだすのに、足指のさきをもうすこしですりへらしちゃうところだったぞ。それなのにおまえらは、またおれをごまかして、すりぬけようというのだろう。」
「きみは、うみいぬをふみころしてくれたんだよ。」
と、ヨクサルがさけびました。
「なんだって。」
竜のエドワードは、とびあがりました。
「おれはまた、だれかをふみころしてしまったのか。だけど、わざとしたんじゃないぞ、ほんとのところ。いまは葬式をだす金もないんだ。」
それからエドワードは、きゅうにおこりだしてどなりました。
「だいいち、おまえらがおいぼれいぬをおれの足もとにじゃれつかせるからいけないんだ。おまえらがわるいんだぞ。」
そういうと竜のエドワードは、ふきげんに海の中を歩いていきましたが、しばらくすると、ふ

たが百年め。海の底ならかくれおおせるとでも思っているんだろうが、そうはいかんぞ！　おれさまにあいさつなしでにげるとは、けしからんじゃないか。」

「これはいったい、だれなのよ。」

と、ミムラがいいました。

「三回であててごらん。」

ヨクサルが、にたにたしながらいいました。

フレドリクソンは、あかりをつけました。すると竜のエドワードが、水の中に頭をつっこんで、まどからのぞきこんでいるのでした。

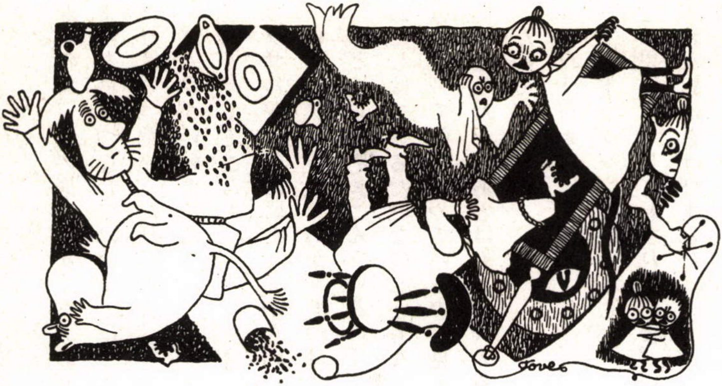
わたしはできるだけなにごともなかったような顔をして、竜の顔を見ました。うみいぬがばらばらになってただよっているのが見えました。しっぽのきれはしや、ひげの一部は、まだ見わけがつきましたが、あとはもうジャムみたいになっていました。竜のエドワードがふみつぶしてしまったのです。

「エドワードか？　ありがとう。」

と、フレドリクソンがいいました。

「この恩はけっしてわすれないよ。いよいよというときに、たすけてくれたんだものね。」

と、わたしはさけびました。



だし、オートミールや、メリケン粉や、米やおおむぎが、みんなごっちゃにこぼれだしました。ミムラの子どもたちの長ぐつや、おばけのあみかけのくつしたや、ヨクサルのたばこのかんもひっくりかえって、もうめちゃめちゃです。

くらい海から、しっぽの毛がさかだつような、おそろしいほえ声がきこえました。

そのあとは、ひっそりしました。ぶきみなしずけさです。

「あたし、とぶのはすきだけれど、もぐるのはしょうじきのところきらいだわ。子どもたちは何人のこっているだろうね。おねえさん、かぞえてみておくれ。」

と、ミムラ夫人がいいました。

しかし、ミムラのむすめがかぞえだすかださないうちに、ものすごい声がきこえてきました。

「やい、ここにいたのはおまえらなのか。ここであっ

もしれません。くらがりの中では、あとは空想するばかりでしたから、こわさがまたいっそうましたのです。

フレドリクソンは、エンジンをいれましたが、あわてたせいか、かじをとりちがえました。うきあがるところを、海のオーケストラ号は、ぐんぐん海底にしずんでいきました。

それから船は、いもむしのような足をだして、海底の砂の上をはいだしました。まどの外を、海草がゆれながらすぎていきます。まっくらなしずけさの中から、灰色のかげのような頭がでてきました。目は黄色くて、二本のきみわるい光のたばが、サーチライトのように舷側をさぐっていました。

「さあ、みんな、毛布の下へもぐりなさい。いいというまで、でてきてはだめよ。」

と、ミムラ夫人がさけびました。

船尾のほうで、ガリガリというおそろしい音がしました。うみいぬが船の潜水ひれをたべはじめたのです。

だしぬけに海じゅうがひっかきまわされて、海のオーケストラ号はもちあげられ、ひっくりかえりました。海草は、みだれた髪のように、海の底におしつけられました。海の水は、ふろのせんをぬいたようないきおいで、ふきあがりました。

わたしたちは、あっちへこっちへとほうりだされました。戸だなの戸があいて食器がころがり

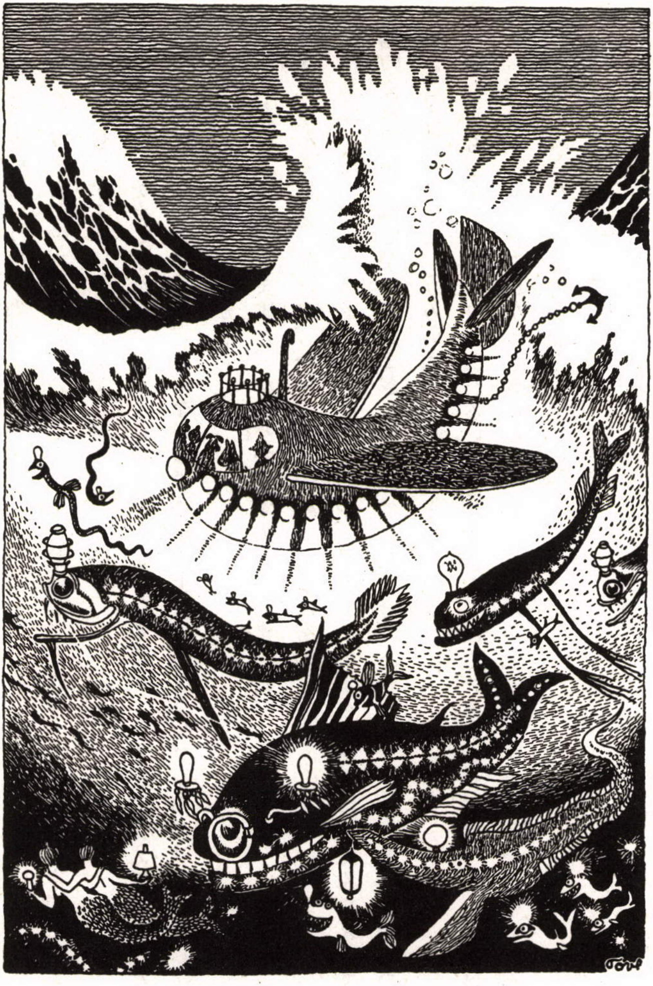
「それじゃ、本を読んでくれる？」
と、子どもたちはさけびました。
「読むのならいいわ。このまえはどこまでだったかしら。」
と、ミムラ夫人はいいました。
子どもたちは声をそろえて、読みはじめました。
「これは――一つ目のボッブの――むごたらしい――しわざだと――パトロールのおまわりさんの――ツイッグスが――いいました――そうして――ひがいしゃの耳から――三寸くぎを――ひっこぬきました――それは……。」
「わかったわ、わかったわ。さあ、すこしいそいで読みましょうね。」
と、ミムラ夫人はいいました。
三段とびの音は、ずっと近づいてきました。海のオーケストラ号はおちつきなくゆれだし、聴音機はおこったねこのような音をたて、わたしは首すじの毛がさかだつのを感じました。そして、
「フレドリクソン、ランプをけせ。」
とどなりました。
まっくらになる直前に、左舷のほうに、ちらとうみいぬが見えました。なんともいえないおそろしい生きものでした。ものすごい怪物だということがわかったので、なおさらこわかったのか

「運命の夜が、墓場をそのベールでつつみ、黒いかげが運命のさけびをあげてるんだ。」
「しっしっ、なにかきこえてくる……。」
と、フレドリクソンがいいました。
　わたしたちは、耳をすましました。遠くから、かすかにズシンズシンと脈をうつような音、いや足音のような音がきこえてきました。だれかが大またでゆっくりと、三段とびをしているようでした。あっというまに、さかなたちはみんなすがたをけしてしまいました。
「たべられてしまうわ。」
と、ちびのミイがいいました。
「子どもたちをねかせなくちゃ。さあみんな、ベッドにはいりなさい。」
と、ミムラは子どもたちにいいました。
　子どもたちは輪になって、ひとりひとり、まえの子のせなかのボタンをはずしだしました。
「こんやは、おまえたちで数をかぞえるのですよ。あたしはちょっと気がちっていますからね。」
と、ママがいいました。



と、ミムラのむすめが、緊張に目をかがやかしてささやきました。
「あたしのおばさんで、石油ストーブに火をつけるのがこわくて、できない人がいたわ。そのおばさんたら、はじめて火をつけたときに爆発しちゃって、ストーブもろともふきとばされたのよ。」
「あたしたちも、あかりをつけましょうよ。」
と、ちびのミイがいいました。
　さかなたちは、もっと近よってきて、あついかべのように海のオーケストラ号をとりかこんで、船のあかりを見つめました。
「あいつらは、口がきけないの。」
と、わたしがきくと、フレドリクソンが、無線聴音機のスイッチをいれました。しばらく雑音がしていましたが、そのうちにいく千ものなげくような声がきこえてきました。
「うみいぬだ、うみいぬだ。だんだん近づいてくるぞ、だんだんとだ。あかりをけせ、あかりをけせ。……たべられてしまうぞ。……かわいそうなくじらさん、おまえさんはいったい何ワットもってるんだい。」
「くらくしなけりゃいけないのなら、くらくしようよ。」
　わたしのおばけは、わが意を得たりとばかりにいいました。

うみいぬ、うみいぬ、うみいぬ……。
みなさん、ちょっとこのうみいぬということばを、警報のようにゆっくりと、小声でいってみてください。そら、ぶきみにきこえるでしょう？
くらやみの中に、かぞえきれないほど小さなかげのようなものが、かすかに見えてきました。それはうみへびや、さかなたちで、みんな一つずつ鼻の上に小さなランプをのっけていました。
「どうしてランプをつけないのかしら。」
と、ミムラ夫人がふしぎがりますと、かの女のむすめがいいました。
「電池がきれたんでしょ。だけど、ママ、うみいぬってなにもの。」
さかなたちは、海のオーケストラ号のそばまでやってきて、めずらしそうに、だんだんしずんでいく船のまわりを、輪になっておよぎまわるのでした。そのあいだも、ずっとあのおびえたささやきがきこえていました。うみいぬ、うみいぬ……。
「こいつはどうもおかしいぞ。ぼくはわるい予感がするな。ぼくの鼻の感じでは、あいつらはどうやらランプをつけるのをこわがってるらしい。じぶんの頭の上のランプに、あかりをつけるのを、だれかにとめられているのかな……。」
こういったのは、ヨクサルでした。
「それをとめているのは、うみいぬかもしれないわね。」



それからかれは、海のオーケストラ号を、まっすぐに海中へ突入させました。あたりは、緑色のすきとおった光であふれ、まどの外をあぶくのかたまりがすぎるのが見えました。

「あたいたち、しずんじゃうよ。」

と、ちびのミイがいいました。

わたしは鼻をまどガラスにおしつけて、海の中をのぞきました。海のオーケストラ号は、船の外がわにあかりをつけました。あかりはくらい水中に、たよりない、よわい光をなげました。

わたしは、からだがふるえるのを感じました。どっちを見てもくらい緑色だけで、永遠の夜と空虚の中をわたしたちはただよっているのでした。フレドリクソンがエンジンをとめると、船はすべるようにして、いよいよふかくしずんでいきました。だれもものをいうものはありません。しょうじきいって、ちょっとこわくなったのです。

しかし、フレドリクソンの耳は、さもうれしそうに、ぴんとたっていました。そのときわたしは、かれがいままでとちがった船長帽をかぶっているのに気がつきました。ぼうしには小さな銀色のひれのマークが二つついていました。

もの音ひとつしないまったくのしずけさの中から、やがてかすかな音がきこえてきて、それがだんだんにつよまりました。何千ものおびえた声が、なんどもなんどもおなじ一つのことばをくりかえしているのでした。たった一つのことばです。

と、ヨクサルがさけびました。

空をとぶという、あのなんともいえない気持ちを、どう書きあらわしたらよいものか、わたしにはわかりません。わたしは、じぶんの知らない運命によってさずけられた、わたしのからだのかたちにすっかりまんぞくしているのですが、しょうじきいって、このからだは空をとぶにはむいていません。ところが、まったくとつぜん、このからだがつばめのようにかるく、すらりとしたような気がして、世の中になにひとつくったくがなくなり、（——ぼくはいなずまのようにはやくうごけるんだ。だれにだってまけはしないぞ。）という気持ちになりました。地上をはいまわりながら、わたしたちをおどろいて見あげている人々を、空から見おろすのは、なんともいえずいい気持ちでした。まったくすばらしい瞬間でした。しかし、残念なことに、みじかすぎました。

海のオーケストラ号は、ゆるやかな弧をえがいて、地面にむかって高度をさげ、王国の海岸近くの海に、白い波頭をたててすべりおりていきました。

「ねえ、フレドリクソン、もっととぼうよ。」

と、わたしはいいました。

フレドリクソンは、わたしのほうに目をむけましたが、わたしを見たのではありませんでした。かれの目玉は青くすみ、そのすがたは、わたしたちにはとても手のとどかない、ふしぎな勝利の光につつまれているように見えたのです。

あの「おどろいたろう、えへん」というくりかえしのある歌です。ミムラは感激のあまり、なきだしました。

フレドリクソンは、ぼうしをまぶかにかぶって、船にあがっていきました。そのあとに、王室づきあたらしい自由の村の人たちがつづきました。そのあいだも、ばらと日本真珠の雨がふりつづきました。船の中は、あっというまにミムラの子どもたちだらけになりました。

ロッドユールは、とつぜん「ごめん！」というなり、船をかけおりると、

「だめだ、ぼくには、そんな勇気はない。空をとぶなんて。また気持ちがわるくなるにきまってる。」

とさけんだまま、たちまち群集の中にかけこんで、見えなくなりました。

それと同時に、船は、ガタガタ、ブルンブルンと音をたてはじめました。ドアがしめられ、ねじできちんととめられて、海のオーケストラ号は、しばらくためらうように台の上で前後にゆれていましたが、つぎの瞬間、ガタンとまえにとびだしました。おかげでわたしは、ひっくりかえってしまいましたっけ。

気をとりなおして、まどの外をながめたときは、わたしたちはもう、びっくり公園の木のこずえの上をすべるようにとんでいるのでした。

「とんでるぞ、とんでるぞ。」

まえらが、あなの中でむだに時をすごしたり、ものをかじったり、根をほったり、しごとにいそがしがったり、むだ話をしたりするあいだにも、よくよく考えてみることじゃ。

おまえら、不幸なできそこないの、しかも愛すべきわしの国民諸君！　わしはおまえらに大きな期待をかけているのだぞ。われわれの丘だらけのこの国が、すこしでもさかえるように、おまえらもやってみるがよい。それがむりなら、せめて、本日の英雄にばんざいをとなえてやるがよいぞ。」

そこで国民は、地面がぐらぐらゆれるほどに、「ばんざい！」をさけびました。

ヘムル自由楽団が「王室式典ワルツ」を奏しました。ばらや日本真珠の雨がふりそそぐ中を、フレドリクソンがすすみでて、ひもをひきました。なんとすばらしい瞬間だったでしょう。

海のオーケストラ号のまくがすべりおちました。

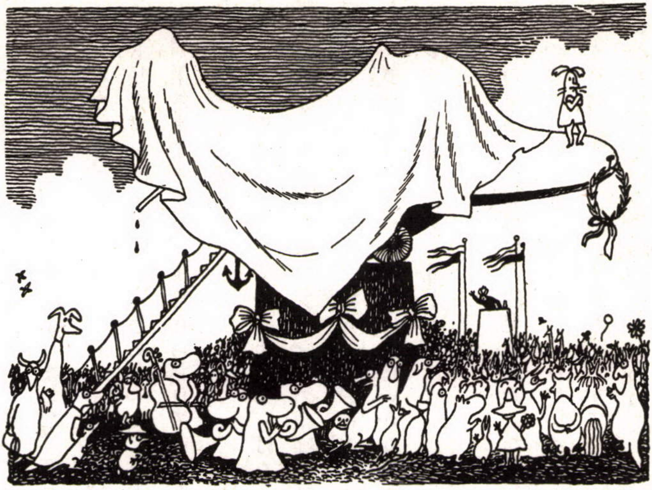
それはわたしたちがのりくんでいたもとの船とは、にてもにつかないものでした。はねのはえた金属製の船で、まるでなじみのないきみょうな機械だったではありませんか。

わたしはすっかりゆううつになってしまいました。でも、そのときとつぜんに、わたしはこの改造された船とよろこんで握手することのできるものを見たのです。紺色に光っている船名でした。それはもととおなじ海のオーケストラ号だったのです。

ヘムル自由楽団は、こんどは「王者の賛歌」にうつりました。あなたがたも知っていますね、

オートミールを流しこむなんて！」
と、ミムラ夫人はうれしそうにいいました。
「おくさん、気にしないでよろしい。」
フレドリクソンは、ちょっとかたい調子でいいました。
「はじめてよいのか、それともまだか。」
王さまが、またききました。
「陛下、どうかいつでもおはじめください。」
と、わたしがいいました。
霧笛が鳴りわたったかと思うと、ちょっとまをおいて、ヘムル自由楽団が入場してきて、王さまは国民一同の歓呼の中を玉座にのぼりました。王さまはみんながしずかになるのをまって、演説をはじめました。
「わしのばかなおいぼれ国民たちよ、この機会にわしは諸君に、意味の深いことばをおくろう。フレドリクソン――あの王室づきびっくり発明家のフレドリクソンを見よ。かれの最大のびっくり発明品の除幕式が、きょうここでおこなわれるのじゃ。このものは、陸に、海に、空中に、活躍することになろう。
大胆な計画にもとづいてできあがったこのしごとについて、とっくりと考えてみるがよい。お

弟や妹たちは、思い思いに、深いおじぎをしたり、ひざをまげるあいさつをしたり、あるいはただぽかんと見つめているものもいました。
フレドリクソンは、なんどもまくをくぐって、はいったりでたりして、なにもかも手おちはないかどうか、たしかめていましたが、
「どうも、排気管がおかしいぞ。」
とつぶやいてから、ヨクサルにたのみました。
「ヨクサル、船にはいって、大きいほうの排気ファンをまわしてみてくれないか。」
しばらくすると、大きい排気ファンがうごきだしましたが、管からはオートミールが流れでてきて、フレドリクソンの耳の上にぽたぽたとおちました。
「こいつはおかしい。オートミールとは。」
と、フレドリクソンはあわてましたが、ミムラの子どもたちは、大よろこびしてさわぎました。
「ごめん、ぼく、朝飯ののこりをどびんにあけちまったんです。排気管にはいれなかったけど。」
と、ロッドユールはなきだしそうな顔をしました。
「どうしたんだ。わしは祝詞をはじめてもよいのか、それとも、まだかな。」
と、王さまがききました。
「それは、あたしの末むすめのミイのしわざだわ。なんて個性のある子なんでしょ、排気管に



わたしのおばけはこういいながら、はりがガチガチ鳴るほどのスピードであみものをつづけました。
「まあ、なんてことをいうのさ。」
と、子どもたちをのこらずつれてきていたミムラがいいました。それから、上のむすめを見つけていいました。
「おや、あたしのむすめじゃないか。こんちは。おまえ、いちばん下の妹にもうあったかい。」
「あら、ママ、また子どもを産んだの。弟や妹たちに、おねえさんは王さまのあたらしい村のおひめさまになって、空とぶ船で月めぐりの旅にでるんだって話してちょうだいな。」
と、ミムラのむすめはいいました。

わたしは心臓をどきどきさせながら、きいてみました。

フレドリクソンは、首を横にふりました。その瞬間、わたしはもういちど、冒険家にもどったのです。心がうきうきしてきて、じぶんをいかにも力づよい、男らしいものに感じたのでした。フレドリクソンは、発明ができあがったことを、だれよりもさきにわたしにいいにきてくれたのです。王さまでさえも、まだ知らされていなかったのに！

わたしはどなりました。

「はやく、はやく。さあ、でかけようよ。ばらの花なんか、だれかにやっちまおう。家もやっちまおう。ねえ、フレドリクソン、ぼくの頭は、計画と期待ではちきれそうだよ。」

「それはいいけれど、まず、除幕式と試験飛行をやらなければいけないんだ。あの王さまをごまかして、式典をすっぽぬかすわけにはいかないからね。」

と、フレドリクソンはいいました。

その日の午後、試験飛行の出発式がおこなわれました。改造された船は、王さまの玉座のまえの台にのせられて、赤い布でおおわれていました。

「黒いまくのほうが、おごそかな感じがでたのにねえ。ま夜中のきりのような、灰色のベールでもいいかもしれない、恐怖の色だものね。」

かのときはたべているか、ねているか、ひなたぼっこをしているか、ミムラとわらったり木のぼりをしているかです。それ以外のかれにお目にかかったことはありません。さいしょのうちは、石がきの上にのぼったりもしましたが、それが禁止されていないと知ると、すぐにやめてしまいました。それでもヨクサルは、けっこうゆかいなのだといっていました。

ときどきわたしは、ニョロニョロたちが沖をとおるのを見ましたが、そのあとは、一日じゅうゆううつになってしまいました。

この時代に、わたしのじっとしていられない性質がそだったのだと思います。おかげで、あとになってから、なにごともおこらないきちんとした生活が、きゅうにいやになってにげだすことになるのです。

そのうちに、やっと事件がおこりました。

フレドリクソンが、じぶんで操舵室のドアの外にたったのでした。かれは船長帽をかぶっていましたが、きょうのぼうしには金色のつばさのマークが、二つ光っていました。

わたしは階段を一足とびに、とびおりていって、ききました。

「こんにちは、フレドリクソン。とべることになったの。」

フレドリクソンは耳をうごかして、うなずきました。

「だれかにもう、そのことを話した？」

のすみにビロードのばらをうえたり、ロッドユールや王さまとボタンあそびをするほどに、堕落したのです。

事件がちっともおこりません。わたしのおばけは、タイルストーブに近いへやのすみにすわって、えりまきやくつしたをあんでいました。神経質なおばけの気をおちつかせるのには、あみものはいいしごとにちがいありませんよね。

おばけもはじめのうちは、国民たちをほんしきにおどかすことに成功したので大よろこびでしたが、そのうちに、みんながおどかされるのをたのしんでいるのに気がついて、やめてしまったのでした。

ミムラのむすめは、人をだますのがいよいようまくなってきて、わたしもなんどかだまされました。一度なんか、竜のエドワードが王さまをふみつぶしてしまったといううわさを、ばらまいたものです。

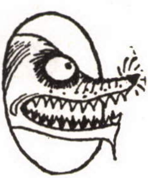
わたしは残念ながら、人のいうことをすぐ信じる性分です。だから、あとになってものわらいになったと知ると、とてもはらがたちます。わたしが大げさなことをいうときは、じぶんでほんとうにそうだと思いこんでいるときだけですよ。

竜のエドワードは、ときどきやってきては、海岸の水につかって、いつものくせでわたしたちをどなりつけました。すると、いつでもヨクサルが、どなりかえしてやるんです。ヨクサルはほ

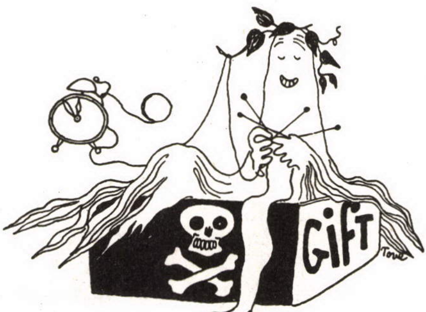
第　7　章



改造された海のオーケストラ号のはなばなしい除幕式と、試験的に深海にもぐったときのことをのべます。



夏至の夜も、あっというまにすぎました。ちょうどそのころ、ミムラの末むすめが生まれて、ミイと名づけられました。（ミイというのは「いちばん小さいもの」という意味です。）花がさいて、実がなりました。りんごのようなおいしい実は、さっそくたべられてしまいました。わたしは、なんにもしないで日をすごすという危険な状態におちこんでいき、ときには操舵室


GIFT
Tove

と、わたしはいいました。
「地獄のいぬどもにかけて――。」
と、おばけは青くなっていいかけましたが、気をおちつけていいなおしました。
「それはまあ、ごしんせつにありがとう。」
わたしはさとうの箱に、おばけのベッドをつくってやると、それを黒くぬって、ふちには気のきいた十字の白骨もようをつけました。茶わんには「毒あり」と書きつけました。ロッドユールはそれを見て、大よろこびでした。
「こりゃ住みごこちがよさそうだ。ま夜中にちょっとガタガタ音をたててもいいかな？　ぼく、そういう習慣になっているのでね。」
と、おばけはいいました。
「いいとも、だけど五分間だけだよ。それから、海泡石の電車はこわすなよ。すごく高いものなんだから。」
「よし、五分だね。だけど、夏至の夜はべつだぜ。」
と、おばけはいいました。

　おばけが興味をみせました。
「さいほう用の糸をつかうのさ。ちょっとふとめの、まあ20番までのかな。それをまどの外にとりつけて、糸をまつやにでこする。するとおそろしいさけび声がでるんだ。」
　こうフレドリクソンが説明してやると、
「おれの悪魔の目にくるいがなければ、きみはなかなかおもしろい人だね。」
と、おばけはいうなり、フレドリクソンの足もとにまるくなりました。
「がいこつもつくってくれる？　トタン板といったね。それならもってるよ。だけど、それをどうつかうんだい？」
　それから夜あけまで、フレドリクソンはそこにすわったまま、人をどうやっておどかすかを説明したり、砂にいろいろの図面を書いたりしました。どうやら、かれにはこの子どもっぽいしごとが、気にいったふうでした。
　朝になるとフレドリクソンは、びっくり公園にもどっていきました。
　おばけのほうは、投票によって王立あたらしい村の一員になって、恐怖のおばけという称号をさずけられました。
「ねえ、おばけくん、ぼくの家に住む気はないかい？　ぼく、ひとりぼっちなんでね。そりゃ、ぼくはこわがりやじゃないけど、夜になると、とにかくちょっとさびしいからね……。」

「うちすてられたがいこつの列が、氷のような青い月光の中をふらついてるぞ。」
「ねえ、おばけくん、きみはどうもすこしまちがっているぜ。まあきけよ。きみがどこかほかのところへいっておどかすってやくそくするなら、ぼくがきみに、あたらしいおどかしかたを教えてやるよ。どうだい。」
と、フレドリクソンはやさしくいいました。
「この人は、おどかすのがすごくじょうずなんだから。ねえ、おばけさん、あんたにゃ想像がつかないかもしれないけど、フレドリクソンはりんをつかったり、トタンをつかったりして効果をだすのよ。だから、竜のエドワードを、死ぬほどおどかすことだってできるわよ。」
と、ミムラのむすめがいいました。
「王さまだって、おどかせるんだぜ。」
と、わたしがいいました。
　おばけはフレドリクソンを見ましたが、まだ決心がつかないふうでした。
「手製の霧笛などはどうかね。糸と、まつやにでこしらえた、おばけむきのしかけの手はどうだい。」
と、フレドリクソンがいいました。
「知らないなあ。どうやるんだい。」

ヨクサルがこんなことをいうので、わたしはかれのすねをけってから、ていねいにいいました。

「よみの国の亡者さん。よくぞいらっしゃいました。ごきげんいかが？　魔法の島の浜べで、おばけが青ざめた顔でにたにたわらうんでしょ……。」

「おれのまねをするやつがあるか。それはおれしかいえないことなんだぞ。」

と、おばけはおこっていいました。

「おまえさん、ぼくたちをしずかにねかしてくれないか？　だれかほかのれんじゅうを、おどしたらどうだい。」

こう、フレドリクソンがいいました。

「おまえらは、おれにもうなれっこになったんだな。竜のエドワードでさえ、もうこわがらないんだ。」

と、おばけがふきげんそうにいいました。

「ぼくはこわかった。まだこわい。」

と、ロッドユールがいいました。

「それはどうもありがとう。」

おばけはこういってから、いそいでつけくわえました。

「なるほど、あいつは運命ということばがすきなようだな。」
と、ヨクサルがいいました。
「こんどはわらっちゃだめだぞ。なにごともまじめにとらないから、こういうひどいめにあうのだ。」
と、わたしはきびしくいいわたしました。
フレドリクソンにも、このおばけとの会見にはきてもらおうと思って、わたしはロッドユールを使いにやりました。もちろん、じぶんでいってもよかったのですが、わたしはまだ、フレドリクソンがいったことばが、わすれられなかったのです。
「できあがるまで見ちゃだめだ。まだだよ。ちょっといまはいそがしいのでね。」
やさしくはあるが、人をつきはなすようなあの声です。
おばけは十二時きっかりに、ひきさくようなよび声を三どあげながら、あらわれました。
「きたぞう。」
と、まねのできない独特のいいかたで、おばけは話しはじめました。
「おまえら、やがて死ぬものども、さあ、ふるえるがよい。わすれられた白骨のうらみだぞ。」
「おいおい、なんでおまえさんは、いつもおなじ古くさいほねのことばかり、うるさくいうんだい。そりゃ、だれのほねのことさ？　おまえさん、なぜ、じぶんでかたづけないんだね。」

わたしは長いこと、王室づきと書こうか、自由と書こうかとまよいましたが、けっきょく、両方とも書くことにしました。うまいぐあいに字くばりができましたから。

おばけは、油紙の上に赤インキでへんじを書いてよこしました。（油紙と思ったのは、フレドリクソンの古い雨がっぱだったことが、あとでわかりました。それを、ミムラのパンきりナイフで、ドアにとめてあったのです。）

わたしのかわいいおばけのへんじは、こうでした。

運命のときは近づいた。金曜日でもよいが、時刻は、死に神のいぬのほえ声があれ地をわたってきこえてくる、うしみつどきだ。おまえら、むしけらども、大地には、目に見えないもののおもおもしい足音がひびきわたるぞ。大地の中に鼻づらでもかくすがよい。おまえらの運命は、もう墓場のへいに、血で書いてあるぞ。鉄のくさりは、おれがその気になったら、かってにもっていくからな。

おばけ　別名おそろしいものより

もらえないって、なげいているよ。」
「ばかばかしい。」
と、わたしはいいました。しかしヨクサルは、つづけました。
「それにフレドリクソンもおこっているぜ。きみのおばけが海のオーケストラ号じゅうに、いたずら書きをしたり、ばねをおったりしたんだとさ。」
「それじゃ、なんとか手をうたなくっちゃ。ようし、すぐやるよ。」
こういってわたしは、いそいで告示を書いて操舵室のドアにうちつけました。それはつぎのようなものでした。

親愛なるおばけさま！
わけがあって、つぎの金曜日の日の入りまえにお目にかかりたい。
ご不満はみんなうけたまわります。

王室づきあたらしい自由の村

なお、鉄のくさりはおもちにならぬよう！

気のどくなおばけが、かすかなけむりとなってきえるまえに、ヨクサルがわらいだしました。おばけにも、それはきこえたと思います。こんなわけで、その晩はぶちこわしになってしまったのでした。

しかし、あたらしい村の人たちは、おばけからしかえしをうけることになりました。その後の一週間は、まったくひどいものでした。夜になっても、だれも、ねむることができません。おばけはどこからか、鉄のくさりを見つけてきて、それを朝の四時までガラガラ鳴らしたり、ふくろうやハイエナの鳴き声のまねをしたり、ひきずるような足音をさせたりしました。そうかと思うと、コツコツとドアをたたいたり、あるいは家具をへやの中でおどらせて、こわしたりしたのです。

村人たちはいっせいに、わたしに文句をいいだしました。

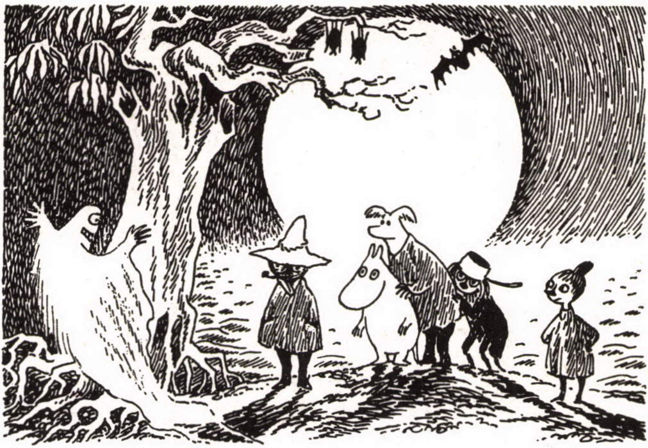
「きみのおばけをけしてくれよ。夜もねむれやしない。」

と、ヨクサルがいいました。

「そうはいかないよ。一度おばけをよびだしたら、いっしょにくらすよりほかはないのだ。」

と、わたしはまじめくさっていいました。するとヨクサルは、わたしを非難しました。

「ロッドユールがないているぜ。おばけがロッドユールのあきかんに、がいこつの絵をかいて、その下に毒物と書いたんだ。こうなっては、もうだれもかんによりつかないから、およめさんも



　おばけはやってきました。ほんとうにやってきたのです。このまえとおなじように、すきとおっていて影はなく、すぐにあのわすれられた白骨のことや、よみの国の亡者のことを話しだしました。

　ロッドユールはきゃっといって、頭を砂の中にかくしました。ミムラのむすめは、まっすぐにおばけのところにすすみでて、手をさしだしました。

「こんにちは、ほんもののおばけにあえるなんて、うれしいわ。スープをひとついかが。」

　まったく、ミムラってむすめは、なにをしでかすかわかったものではありません。

　わたしのおばけは、もちろん気をわるくしました。すっかり調子がくるって、小さくちぢんでしまったのです。

たのでなく、感心したのでしょうよ。わたしは目的をはたしたのです。名誉を回復し、じぶんの顔をたてたのです。

だけど、読者のみなさん、十二時の鐘がなるまで、わたしがどんなに不安な気持ちでいたか、考えてみてください。おばけははたしてまた、やってくるかしら？　みんなほんとうにこわがるでしょうか。また、おばけがくしゃみをしたり、ばかげたことをいったりして、効果をだいなしにしやしないでしょうか。どんなことをしてでも、まわりのものたちにつよい印象をあたえたいというのが、わたしの性分なんです。尊敬でもいいし、同情でもいいし、恐怖でもいい。とにかく、人にわたしというものを印象づけることです。この性分は、たぶん、人から無視されがちだった、わたしの子ども時代の影響でしょうね。

とにかく十二時が近づくと、わたしは岩の上によじのぼって、鼻を月のほうにむけ、魔法をかけるかっこうで前足をふりまわし、ほねのずいまでとおるようなぶきみなさけびをあげました。つまり、おばけをよびだしたのです。

あたらしい村のみんなは、緊張と期待で、じぶんたちまで魔法にかけられたかのように、じっとすわっていました。ただヨクサルの、はっきりと批判的な目玉には、ちょっぴりとうたがいの色がありました。いまでもわたしは、ヨクサルにあれだけ深い感銘をあたえることができたのを、まんぞくに思っています。

「ああそうか。おばけの話をしようというのか。」
と、ヨクサルがいいました。するとミムラのむすめが、口をだしました。
「あたし、おばけのお話ならだいすき。ママは夜になるとよくこわい話をして、あたしたちをおどかそうとするわ。ところが話をしているうちにじぶんでこわくなってきて、あたしたちがママをおちつかせるのに、ひと晩じゅうおもりをしなけりゃならないことがあるのよ。あたしのおじさんは、もっとひどかったわ。一回なんか……。」
わたしはおこって、ミムラのむすめをさえぎりました。
「これはまじめな話なんだぞ。お話のおばけなんか、ちゃんちゃらおかしいや。ぼくがきみたちに見せるおばけは、ほんものだぜ。ぼくが発明して、魔法でつれてくるやつさ。どうだ、すごいだろ。」
わたしは大いばりで、みんなを見まわしました。ミムラのむすめは、前足をうちあわせましたが、ロッドユールは目になみだをうかべて小声でたのみました。
「おねがいだから、やめてくれ。ねえ、やめてくれよ。」
「きみのことを考えて、小さなおばけにしておくよ。」
と、わたしはなぐさめました。
ヨクサルはたべるのをやめて、びっくりしたようにわたしを見ていました。いや、びっくりし

十三日の金曜日のま夜中ちょっとまえに、わたしはあたらしい村のれんじゅうを、のこらず操舵室の下の浜べにあつめました。うつくしいしずかな夜でした。わたしは、かんたんな食事を砂浜の上にひろげました。スープとかたパンと王さまのりんご酒でした。（りんご酒は、つじつじにおいてある大きなたるから、だれでもかってにくんできてもよいことになっていました。）さらはみんな黒うるしでぬって、まん中にがい骨のしるしをつけておきました。

「赤ペンキだったら、ぼくがあげたのになあ。黄色でも青でもあるよ。ごめん、だけど、そっちの色のほうがたのしくなかったのかい……。」

と、ロッドユールがいいました。

「たのしいことをしようというんじゃないんだ。今夜は、すごくこわいことがおこるんだぞ。みんな、かくごしてろよ。」

と、わたしは、いわくありげにいいました。

「こいつはさかなのスープみたいだけれども、うぐいかね？」

と、ヨクサルがききました。わたしはむっつりしていいました。

「にんじんだい。まあ、いまのうちにたべておきたまえ。きみたちは、おばけなんてたいしたものじゃないと思っているだろうけどね。」

「このような夜は、浜べにさらされた白骨は、ガラガラと鳴るんだ。」
「だれの白骨なの。」
と、わたしはききました。
「わすれられた白骨さ。魔法の島では、おばけが青ざめた顔でにたにたわらうよ。気をつけるがいいぞ、いずれ死ぬ身をもっているおまえさ。おれは十三日の金曜日のま夜中にまたあらわれるからな。」
こういうと、おばけはまたくるくるとほどけて、半開きのドアから流れでていきました。でぎわにわたしのほうをおそろしい顔でにらみつけましたが、とたんに大きな音をさせて頭をかもいにぶっつけ、
「あ、いたい。」
とさけびました。そして階段をころげおちて、月夜の外にでると、ハイエナのような声で三回大きくうめきましたが、もうわたしを、こわがらせることはできませんでした。
わたしは、おばけがとけて、きりのかたまりになり、海のほうにきえていくのを見ると、大声でわらいだしてしまいました。
「――さあ、これであたらしい村のれんじゅうを、びっくりさせるものができたぞ。だれもやる勇気のないようなおそろしいことが、わたしには平気でできたのだ。」

ドアが、ほそめにあいたかと思うと、ほそい白いけむりがへやに流れてきて、じゅうたんの上でくるくるとまるまりました。その白い玉のまん中に、青い目がぱちくりしているのが、ベッドの下にかくれていたわたしにも、はっきり見えました。

これはほんもののおばけだぞと、わたしはじぶんにいいきかせました。（とにかく階段をのぼってくる音をきいているよりも、こうやって見ているほうが、ずっとこわくありませんでした。）へやの中は、おばけの話のおきまりで、ものすごくさむくなりました。へやのすみずみからつめたい風がふいてきて、とつぜんおばけが「ハクション！」と、くしゃみをしました。

読者のみなさん。あなたがただったらどうか知りませんが、わたしはそのとたんに、おばけにたいする尊敬の気持ちがすっかりけしとんでしまったので、ベッドの下からはいだしていいました。

「かぜをひいたの？」

「まあね。よみの国の亡者だって、こんなさびしいくらい夜にはなくんだよ。」

と、おばけはおこったように答えました。

「なにかお役にたつことがありますか。」

こういってわたしがきくと、おばけはそれには答えないでいうのでした。

「あなた、こんなくらいところにすわっていらっしゃるの。」
と、そのときムーミンママが、台所から顔をのぞかせていいました。ママはちょうど、サンドイッチをつくったところでした。
「わしはどうも、わかいときの精神的危機を書いた部分が、ばかげているような気がしてきたよ。」
「第六章のはじめのほうのことですか。」
と、ムーミンママがききました。パパはなにかぶつぶついいましたが、ムーミンママはつづけました。
「あたしは、あそこは本の中でも、いちばんいいところのひとつだと思いますよ。あなたがあまりいばってないところがでていて、かえってあなたがいきいきとしていますわ。子どもたちには、まだむずかしくってわからないのです。さ、夜食のサンドイッチをもってきてあげましたよ。」
　こういってムーミンママは、階段をあがっていきました。階段はあのときとおなじように、ミシミシッと九回鳴りました。だけれど、当時のよりずっとよくなっています。
　パパはくらがりの中で、サンドイッチをたべました。それからまた、ムーミントロールとスナフキンとスニフに話のつづきをきかせるために、二階へあがっていきました。

「ヨクサルのりんごの木には、りんごなったの。」
と、スナフキンがききましたが、パパは、
「いや。」
と答えただけで、ノートをバタンととじてしまいました。
「ねえパパ、おばけの話はとてもよく書けているよ。ほんとうだよ。ぼくたちみんな、おばけのところはすごいサスペンスがあると思うよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
しかしパパは、客間におりていってつくえの上にずっとぶらさがっている気圧計を見やりました。そこはもう操舵室ではなく、客間になっていたのです。フレドリクソンはムーミンパパのたてたばかりの家を見たとき、
「おやおや、よくできたね。」
と、やさしくいってくれたのですが、ほかのれんじゅうは、家の高さが高くなったことさえ気がつかなかったものでした。
――たしかに感情的なことを書いた部分は、すこしみじかくしたほうがいいかもしれんな。たしかに人が読んでもちっとも感動しないで、ばかげたものに思うのかもしれないな。もしかすると、この思い出の記ぜんたいが、ばかげているかもしれん……。

「いま、わしの思い出の記を読んでやっているところなんだぞ。」
「おばけの話ならおもしろいや。」
と、ムーミントロールがいいました。かれは横になって、かけぶとんを耳のところまでひきあげながら、いいました。
「おばけのところはそのままでいいけど、あのかなしい気持ちの話はよけいですよ。長すぎて、たいくつだったもの。」
「長すぎるって？」
と、パパは気をわるくしました。
「長すぎるというのは、どういうことだい？　思い出の記には、かなしい気持ちだって、書かなければいけないさ。どんな思い出の記にだって、はいっているんだぞ。わしはあのときに、人生の危機をひとつとおりこしたんだ。」
「なにをひとつだって。」
と、スニフがいいました。
「ひどいものだった。あぶないとこだったなあ！　あんまりつらかったもので、じぶんが二階をあげたことさえ気がつかなかったほどさ。」
と、ムーミンパパはぷんぷんしながらいいました。

ふきあげてきて、わたしの首すじをなでました。

いまになって考えてみても、ほんとうにこわかったのだとは思いません。わたしはただ、あらゆることに用心がだいじだと、考えたにすぎないと思いますよ。ですからわたしは、すぐさまベッドの下にもぐりこんで、じっとまっていました。やがて階段が、ミシッと鳴りました。ミシッ、ミシッとまた鳴りました。

わたしは階段が九段あることを、はっきりと知っていました。というのは、この階段は、らせん階段なので、つくるのがたいそうむずかしかったからです。わたしは九回、ミシッ、ミシッという音をかぞえました。それからまた、しいんとしました。もう、ドアのうしろにきたぞ、と、わたしは思いました。

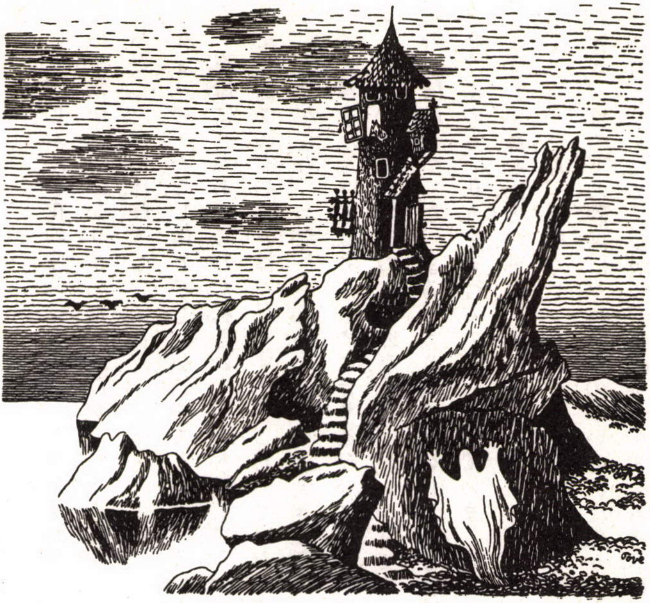
ここでムーミンパパは、読むのをやめて、わざと間をおきました。

「おいスニフ。ランプをあかるくしてくれ。あのおばけのでた夜のことを読むと、いまでも前足がひやあせでぬれてしまうんだ。」

「え、なにかいった。」

と、スニフは目をさましていいました。

ムーミンパパは、スニフをにらんでいいました。



毛のよだつものだったのです。それはすきとおったもので、そのからだをとおして、石ころがはっきり見えました。おまけに影がありません。しかも、なにかうすくて白いカーテン地のようなものにつつまれているのですから、おばけであることは、うたがいがありません。

　わたしはあわてました。下のドアはしめたかしら？　きっとおばけは、すうっととおりぬけるでしょう。どこににげたらいいのかしら。

　玄関のドアがギーと鳴りました。つめたい風が階段の下から

のです。
わたしは、じぶんを夜のやみにたとえ、ため息をつきながら海を見つめているうちに、かえっていくらか気がらくになりました。とにかくじぶんがかわいそうでたまらなくなったのです。これは、おどろくべき体験でした。
そんなふうで、わたしはわびしい気持ちでしたが、それでも操舵室の中で、フレドリクソンの道具や、海岸にうちあげられた板きれなどを利用して、操舵室のこまかい手いれをはじめたのです。わたしはこの家の高さは、ひくすぎると思っていたのでした。
かなしいながらも、わたしの成長にとっては大きな意味のある、一週間がすぎていきました。わたしはくぎをたたいては考え、のこぎりをひいては考えましたが、一度も頭の中でカチッという音はしませんでした。このことの意味は、おわかりですね。
木曜の夜は満月でした。まるっきり音のないしずかな夜でした。王さまのけらいたちは、ばんざいをさけぶのも、花火をあげるのも、あきていました。わたしは二階にあがる階段をつくりあげてしまうと、鼻を両方の前足のあいだにつっこんで、まどぎわにすわっていました。そのしずかなことといったら、毛むくじゃらのがの羽をすりあわす音が、きこえるばかりでした。
そのとき、目の下の砂浜に、白いものがいるのに気がつきました。ちょっと見たところ、ニョロニョロのようでした。しかし、そのものがすべるように近づいてくるのを見ると、それは身の

と、わたしはかなしそうにいいました。
「なにを話そうというのだ。」
わたしは、しばらくだまってからいいました。
「ねえ、フレドリクソン。自由人の冒険家はなにをやればいいんだろう？　教えてくれないか。」
「やりたいことをやるのさ。」
と、フレドリクソンは答えましたが、それから、
「なにかほかにも用があるのかい。ちょっとぼく、いそがしいんでね。」
といったきり、したしげに耳をふって、うすくらがりの中にきえていったかと思うと、じきにまた、くぎをうつ音がきこえてきました。

しようがないから、わたしは家にかえりました。頭の中にはいろんな考えがうずをまいていましたが、どれもこれも残念なことに、役にたたないものばかりでした。

じぶんのことを考えるのがこんなにいやになったのは、まったくはじめてでした。わたしは、気がめいってきました。そのあともわたしは、だれかがわたし以上のことをやったとき、ちょいちょいこのようなゆううつな状態におちいったものです。

しかし、ある意味ではこのあたらしい感じも、たいへん興味ぶかいものであることに、気がついてきました。とにかくこういうことは、じぶんが頭がいいせいだということが、わかってきた

わたしがロッドユールのかんのそばをとおったとき、中できりもなくひとりごとをいっているのがきこえました。わたしにききとれたのはあるボタンのことでした——それはまるいけれども、見る角度によって楕円に見えるとかなんとかいっているのでした。ヨクサルは木の上でねていました。ミムラのむすめは、どこかをとびまわっているふうでした。ママにじぶんがどんなにひとりだちできるか、見せびらかそうというのでしょう。

なにもかもつまらないという感じをふかめながら、わたしはびっくり公園にやってきました。滝の水はとまり、あかりはきえて、メリーゴーラウンドは大きな茶色の布をかぶせられてねむっていました。王さまの玉座にもカバーがかけられていました。霧笛は玉座の下にころがっているし、地面はキャラメルのつつみ紙だらけでした。

そのときわたしは、ふと、金づちの音をききつけました。

「フレドリクソン！」

と、わたしはよんでみました。しかしフレドリクソンは、金づちをたたきつづけているだけです。そこでわたしが霧笛をとって鳴らすと、やがてうすくらがりの中からフレドリクソンが耳をつきだしていいました。

「できあがるまでは見せられないんだ。まだまだ。」

「ぼく、きみの発明を見にきたんじゃない。話をしにきただけだよ。」

日になるのをまちわびているんだ。どうやらぼくは、じぶんの才能についてほらをふきすぎたらしい……。）

わたしはしばらくのあいだ、ゆううつになって、身近にうちよせる波を見つめていました。心の目に、フレドリクソンが見えてきました。それはこつこつとなにかをつくりつづけ、あたらしい発明にむちゅうになって、わたしのことなどすっかりわすれてしまっているかれでした。

いっそ、ニョロニョロに生まれればよかったなあ。わたしはこんなことさえ考えました。もしわたしが、ニョロニョロたちのように未来がなく、ただきまようばかりの運命の星の下に生まれていたら、だれだってわたしになにかを期待することはなかったでしょうよ。わたしだって、どうせたどりつけない水平線にむかって、ただよっていればよかったのです。それなら、なにもしゃべることもないし、いっしょうけんめいになって、なにかをする必要もなかったでしょうね。

このようなかなしいありさまが、夕がたまでつづきました。わたしはひとりでいるのがたまらなくなって、陸のほうへ歩いていきました。丘という丘では、あいかわらず王さまのけらいたちが、役にもたたない石がきづくりをつづけたり、ピクニックのお弁当をたのしんだりしていました。またあちこちではたき火をして、手づくりの花火をあげては、いつもとおなじように王さまばんざいをさけんでいました。

は前足をたたきましたっけ。
　ところがほんとうのところは、わたしはつぎの金曜日の夜中になにをやらかすか、まだぜんぜん思いついていなかったのです。

　わたしたちは、とにかくぜったいにひとりだちでくらすことにしました。
　ヨクサルは、ミムラの家の近くのりんごの木にひっこしました。ミムラのむすめはひとりだちの気分をあじわうため、まいばん、べつの場所でねるのだと宣言しました。ロッドユールはあいかわらず、あきかんぐらしをつづけました。
　わたしは操舵室をひきつぎましたが、ちょっとおセンチになりました。操舵室は、海岸にひとつだけそそりたっている岩の上におかれました。いかにも海岸にうちあげられた船の残骸を思いだすような場所でした。わたしはいまでも、フレドリクソンの古ぼけた道具箱をながめてたっていたときのことを、はっきり思いだします。この道具箱は、王室づきの発明家にはにあわないというので、近衛兵のヘムルがのこしていったものだったのです。
　わたしは考えました。
（こんどこそ、フレドリクソンの発明におとらない、すばらしいものを思いつかなければいけないぞ。それをぼくのあたらしい村の人たちに、どうやって印象づけたらよいか。みんなは、金曜

いとか、なにをいつまでにやれとか、うるさいことをいうものはいないんだ。……すべて、なるがままにまかせるというわけさ。」
「じゃあ、なるがままにするわけ?」
と、ロッドユールがききました。
「あたりまえさ。すべてをほったらかしておくんだ。オレンジの木が大きくなれば花がさく。ときどきあたらしいヨクサルが生まれてきて、そのオレンジをたべて、花のかおりをすいこむ。そうして太陽がみんなの上をてらすってわけさ。」
こう、ヨクサルはゆめ見るようにいいました。
「ちがう、そんなの、あたらしい村づくりじゃない。」
と、わたしはさけびました。
「あたらしい村づくりというのは、自由な人間のあつまりだよ。だれもやろうとしないような、冒険的で、ちょっぴりぶきみなことをやろうという人間のあつまりなんだ。」
「なんですって?」
ミムラのむすめは、興味をそそられたようでした。
「見ててごらん。こんどの金曜日のま夜中だぜ。おったまげるから。」
こうわたしが、いわくありげにいうと、ロッドユールはばんざいとさけぶし、ミムラのむすめ

「あのね。」
と、ミムラのむすめが口をきりました。
「あたしママに、あたらしい村づくり屋ってなあにってきいたの。そうしたら、ひとりぼっちでいるのがいやで、できるだけよりあつまってくらすことだっていってたわ。それからおたがいにけんかをはじめるんだって――けんかするあいてがあったほうが、おもしろいからよ。だから気をつけなさいって、ママはいってたわ。」
ほかのみんなは、不服そうにだまっていました。
「それじゃぼくたち、これからけんかしなけりゃいけないの？　ぼく、けんかがきらいなんだけどなあ。ごめんね、だって、けんかってかなしいんだもの。」
と、ロッドユールが心配そうにいいました。
「まるきりちがうよ。あたらしい村づくりというのは、平和にしずかにくらすことなんだ。おたがいに、できるだけ遠くはなれて住むんだぜ。」
と、ヨクサルはいってから、またつづけました。
「ときには、かわったこともおきるだろうけれどさ、そのあとはまた平和になって、しずけさがもどるんだ。たとえば、りんごの木に住むことだってできるだろ。歌があり、日光があり、朝はねぼうをするんだ。わかるね？　やれ、これはだいじなことだとか、あれをやらなければいけな

ママはびっくりしていいました。

「なにをいっているのよ、ママ。こんどあうときは、あたしもう世界一大きいミムラになってるわ。さあ、すぐでかけましょうよ。」

と、ミムラのむすめはいいました。

「よくよく考えてみると、あたらしい村づくりのほうがいいかもしれないな。」

と、わたしは小さい声でいいました。

「それもいいわね。ママ、あたしはほんとうはあたらしい村づくり屋なのよ。では、うちからひっこすわよ。」

と、ミムラのむすめは、うれしそうにいいました。

親愛なるみなさん。みなさんのためにいっておきますが、ミムラにはくれぐれも気をつけなさいよ。ミムラは、なんにでもすぐ興味をもつくせに、こちらがミムラにちっとも興味をもっていないことには、気がつかないんですからね。

　というわけで、わたしは心ならずもミムラのむすめとロッドユールとヨクサルといっしょに、あたらしい村づくりをはじめることになったのです。わたしたちはフレドリクソンがのこしていった操舵室にあつまりました。

がってとられてしまいました。
「そりゃ、そうでしょうよ。」
と、ミムラのむすめはうれしそうにいうと、さけびました。
「ママ、どこにいるの、またどっかへいってしまった？」
「こんにちは！」
ミムラが葉っぱの下から顔をだしてあいさつして、それからむすめにむかっていいました。
「子どもたちを、何人あらってくれたの。」
「半分だけよ。あとはのこしておくわ。だってこのムーミンが、わたしに世界をさすらう旅についてきてくれというんですもの。砂漠のあらしか、こまどりのようなさびしい旅なんですって。」
と、むすめがいいました。
「ちがう、ちがう、ちがうってば。」
わたしは、おどろいていいました。
「ぼくがいおうとしたのは、ぜんぜんちがうことなんだぜ。」
「そうそう、うみわしだったわ。」
と、ミムラのむすめはいいなおしました。
「おやおや、それではおまえは、晩ごはんにはかえってこないわね。」



「こんにちは。にがむしを、かみつぶしたような顔をしているじゃないの。」

「ぼくはもう冒険家はやめた。こんどはあたらしい村づくりをするんだ。」

と、わたしはしずんだ声でいいだしました。

「あら、そう。それであたらしい村づくりってなんなの。」

と、ミムラのむすめがたずねました。

「ぼくも知らないんだ。きっと、とんでもなくばかげたことじゃないかな。いっそニョロニョロといっしょになって、世界をさすらうほうがましだよ。砂漠のあらしか、うみわしみたいに、ひとりぼっちでさ。」

「だったら、あたしもついていくわ。」

ミムラのむすめはこういって、ポンプをおすのをやめました。

「きみとフレドリクソンじゃ、ちがうからな。」

と、わたしはいいましたが、このことばはまるでまち

こして、海のオーケストラ号はもっていってしまいました。船は近衛兵たちが、車にのせて公園まではこんだのです。そこで船はひみつのベールにくるまれてしまい、まわりには八重に石がきがきずかれました。けらいたちが大よろこびで石がきづくりをしたことはいうまでもありません。

その場所には道具類が、荷車で何台もはこびこまれました。何トンという歯車や、何十キロメートルのはり金もあつめられました。

フレドリクソンは王さまとのやくそくで、毎週火曜日と木曜日には、けらいたちをおどろかせたり、たのしませたりするものを発明するしごとにかかりきることになったのです。そのほかの日には、空とぶ船づくりを気ままに手がけてもよいことになっていました。そういうことは、わたしはあとになってきいたのですから、はじめのうちはとりのこされた感じがしたのでした。

そこでわたしは、また王さまの人物をうたがうようになって、王さまを尊敬することができなくなりました。そのうえわたしには、あたらしい村づくりというふしぎなことばがどういう意味なのか、さっぱりわかりませんでした。しようがないので、わたしはなぐさめてもらおうと思って、ミムラの家にでかけていきました。

ミムラのむすめは、ちょうどいどのポンプで妹や弟たちをあらってやっているところでした。むすめはいいました。

るね。そうだろ。」
　わたしはそっときいてみましたが、フレドリクソンはうわのそらで、むにゃむにゃいっただけでした。
「発明には時間がかかるんだろ？　そうだよね。」
　わたしはつづけましたが、それでもまだフレドリクソンが答えないので、わたしはやけになってどなってしまいました。
「おなじところに住みついていたのでは、冒険家になれるもんか。あんたは冒険家になりたいんだろ、どうなの。」
　すると、フレドリクソンは答えました。
「いや、ぼくは発明家になりたいんだ。空とぶ船を発明したいのさ。」
「じゃ、ぼくはいったいどうなるの。」
　と、わたしはいいましたが、
「きみはほかのれんじゅうと、あたらしい村づくりをしたらいいんじゃないのか。」
　と、フレドリクソンはやさしくいうなり、いってしまいました。
　おなじ日の午後、フレドリクソンはびっくり公園にひっこしました。海岸には操舵室だけをの

フレトリクソンユウノウナルハツメイカナルヨシキイタ」ノウリヨクヲオウノタメニヤクタタセルコトヲキホウスル」シキユウ

「ごめん、あの王さま、あまり書きとりがうまくないね。」

と、ロッドユールがいいました。ロッドユールは字の読みかたを、あのかんの中でおぼえたのです。（もちろん、かんがまだ青かったときのことですが、そこにはマックスウェル家庭用コーヒー高級品一ポンド……とかなんとか書いてあったのです。）

「電報ではちょんちょんのついた字は二字にかぞえるから、けんやくをするのさ。これはなかなかりっぱなウナ電だ。」

と、フレドリクソンが説明しました。

フレドリクソンは気圧計の箱のうしろからブラシをさがしだしてきて、へやじゅうに毛がまいあがったほど、はげしく耳にブラシをかけました。

「おじさんのもらった電報に、ちょんちょんをいれてみてもいいかしら。」

と、ロッドユールがききました。

フレドリクソンはきいていませんでした。なにかぶつぶついいながら、こんどはズボンにブラシをかけだしました。

「ねえ、きみが王さまのために発明にかかるとなると、ぼくたちは、もう旅をつづけられなくな

「そんなのうそよ。」
こういってミムラのむすめは、いっこうにへいちゃらで、コーヒーのおかわりをしました。
わたしたちは、ニブリングのしっぽに、あてさきの紙きれをむすびつけてから、その鼻にかわるがわるキスをしてやりました。そのとき、だれの鼻もかじらなかったのは、ニブリングにしては、じょうできでした。
「ママによろしく。貨物船をかじっちゃだめだよ。」
と、フレドリクソンがいいました。
「かじらないとも。」
ニブリングはうれしそうな顔をしてやくそくし、ミムラのむすめといっしょにでかけていきました。かの女は、ニブリングがぶじに船にのるまで、見とどけるやくめだったのです。
フレドリクソンは、操舵室のつくえに世界地図をひろげました。
そのとき、ドアをだれかがノックして、ひびきわたるような大きな声でどなりました。
「電報、フレドリクソンさんあての至急電報です。」
ドアの外には、王室づき近衛兵の大きなへムルがたっていました。船長のぼうしをかぶってまじめな顔をしたフレドリクソンは、おちつきはらって、電報を読みだしました。電報には、つぎのように書いてありました。

「おまえはまだ小さすぎるよ。それに、おまえはママのところへおくりかえされるんだ。三十分したら、貨物船がでるからね。」
と、フレドリクソンがやさしくいいました。
「そう。」
と、ニブリングはおちつきはらっていって、またミルクをブクブクやりつづけました。
　するとミムラのむすめがいいました。
「だけど、あたしはおとなになるまで、みんなといっしょにいるわよ。ねえ、フレドリクソンのおじさん、なにかミムラが大きくなるようなもの発明できないかしら？」
「ちびのミムラでけっこうだよ。」
と、わたしはいいました。
「ママもそういってるわ。あたし、貝の中から生まれたのよ。そうして、ママがあたしを、きんぎょばちの中で見つけたときには、あたし、みじんこぐらいの大きさしかなかったのよ。」
「またぼくたちを、だますんだろ。」
と、わたしはいいました。
「生まれるときはおかあさんから生まれることぐらい、ぼくだって知ってらあ。りんごの中のたねとおなじことさ。それに、ミムラを船にのせちゃいけないんだ。えんぎがわるいんだもの。」

第 6 章



わたしが、あたらしい村をつくることと、危機をうまくきりぬけることと、恐怖の島のおばけを、おびきだすことをのべます。



フレドリクソンが至急電報をうけとったあの朝のことを、わたしはいつまでもわすれることはありますまい。その日は、はじめはおだやかな、気持のよい朝でした。わたしたちは、海のオーケストラ号の操舵室で、コーヒーをのんでいました。

「ぼくも、コーヒーがほしいな。」

コップの中のミルクをブクブクさせながら、ニブリングがいうと、

「なにしろ、シャンパンなんてもらったためしがないね。だから、まぜぼうはきっと、台所のひきだしのいちばんおくにでもあるんだろ。けむりの輪は、ときがたつうちにきえてしまったよ。」

と、ムーミンパパは考えぶかそうにいいました。

「そんなら、かざりつきのねじまきは？」

「そうだなあ。きみの誕生日がわかってるといいんだが、きみのパパは、日記をつけていなかったんで――。」

「でも、名付け日はありますよ。おねがい。」

と、スニフがいいました。

「よし、きみの名付け日には、なぞなぞのプレゼントをやろうよ。ところで、さあ、みんな、しずかに。さきを読むから。」

と、ムーミンパパはいいました。

「じゃあ、パパはぼくよりも、あの人がすきだったの。」
と、スナフキンがきくと、ムーミンパパはいいました。
「だけど、おまえはまだ生まれてなかったじゃないか。」
スナフキンは鼻をならして、ぼうしを耳のところまでひきおろすと、まどの外をじっとながめていました。
ムーミンパパは、そんなかれを見ていましたが、たちあがってすみの戸だなのところへいくと、いちばん上のたなを長いことかきまわしていました。それから、ぴかぴかした長いさめの歯をもってかえってくると、パパはいいました。
「きみにこれをあげよう。きみのパパは、これが気にいってたんだよ。」
スナフキンは、さめの歯をながめていいました。
「すごい歯だなあ。ぼく、ベッドの上にかざろう。ところで、おうしがパパをばらのしげみにはねとばしたとき、けがはしなかった？」
「いや、ヨクサルときたら、ねこみたいにからだがやわらかだった。おまけに、おうしのつのには、わたがつめてあったんだ。」
するとスニフもききました。
「ほかの賞品はどうしたの。電車は客間の鏡の下にあるけれど、ほかのものは……。」

「おい、賞品はもらわないのか。」
と、わたしがいうと、フレドリクソンもいいました。
「きみのたまごのことだよ。一ダースぐらいあったじゃないか。」
するとニブリングは、はずかしそうにいいました。
「みんなたべちまったよ。だって、きみたちをまっているあいだ、なにもすることがなかったんだもの。」
ニブリングにはどんな賞品があたったのか、またニブリングがうけとらなかったとしたら、だれが賞品をとったか、わたしはいろいろと考えてみました。たぶんその賞品は、つぎの百年のお祭りのときまで、王さまがとっておくのかもしれませんね。

ムーミンパパは、ページをめくって「第六章」を読みかけました。
「ちょっとまって。ぼくのパパは、あのミムラがすきだったの?」
と、スナフキンがいいました。
「すきだったともさ。わしのおぼえているかぎりでは、ふたりはいつもいっしょにかけまわったり、声をあわせてわらったりしていたよ。」
と、ムーミンパパが答えました。

といって、ヨクサルはすっかり感心しました。

うまの背には、ロッドユールがみょうな顔をして、のっていました。

「どうしたの。おもしろくないのかい。」

ときくと、ロッドユールは、小声でつぶやきました。

「うん、とてもたのしいよ。だけど、ぐるぐるまわるんで、気持ちがわるくなるのだけがおしいな。」

「いったい、なんどのったんだい。」

と、わたしはききました。

「おぼえていないよ、長いこと、長いことのったんだもの。ごめんね。またまわらなけりゃ。ぼくがメリーゴーラウンドにのるのは、これっきりかもしれないもの。それ、またまわりだした。」

「そろそろかえる時間だ。王さまはどこだろう。」

と、フレドリクソンがいいました。

でも、王さまはすべり台に熱中していたので、わたしたちは、そっとそこをぬけだしました。ヨクサルだけはのこりました。かれはミムラといっしょに、朝日がのぼるまで、ぶらんこにのっているつもりだといっていました。

野原のはしでは、ニブリングがこけの中にあなをほって、その中にもぐりこんでねていました。

鼻をかんでやったり、なくのをなだめたり……、モランならみんな知っているわ。あんた、そのわかい人、だからあたしは、いつだってたのしいわよ。」
「それに、おくさんの弟さんもごりっぱで……。」
と、わたしはひかえめにつづけました。
「弟ですって？」
と、ミムラがいいました。
「はい、おくさんのおじょうさんのおじさんのことですよ。ほれ、あの赤ひげの中でやすんでいるかたです。」
（さいわい、わたしは例のひげの中のねずみの話はしませんでした。）
するとミムラはおなかをかかえてわらいました。
「まあ、なんというむすめでしょう。あんたはだまされたんだわ。わたしの知ってるかぎり、むすめにはおじさんなんかいませんよ。さようなら。わたしはこれから、メリーゴーラウンドにのりますからね。」
そういうと、ミムラは大きなひざに、のせられるだけの子どもたちをのせて、ぶちのうまがひいている赤い馬車にのりこみました。
「たいしたミムラだねえ。」

「そうですよ。」
と、ミムラは答えて、けたたわらいながらいいました。
「まあまあ、おなかいっぱいたべちゃったよ。あんたはへんな賞品ばかりもらって、お気のどくね。」
「へんなですって。空想家にとっては、役にたたない賞品ほどいいものはないんですよ。これほどの名誉がありますか。」
わたしはこういってから、ていねいにつけくわえました。
「もちろん、おくさんとこのおじょうさんが、一等賞でしたけどね。」
「わが家のほこりね。」
と、ミムラもじまんそうにいいました。
「それではおくさん、もうおじょうさんのことをなげいてはおられませんね。」
と、わたしがきくと、
「なげいているかって？」
と、ミムラは意外だという顔をしました。
「どうしてですの？　わたしはなげいたりするひまなんてありませんよ。子どもが十九人もあれば、おせんたくしたり、ねかしつけたり、着物を着せたりぬがせたり、ごはんをたべさせたり、

うようにさえなったのですよ。
「あたしはどうなるの。」
と、ミムラのむすめがいいました。999番をあてたのは、かの女だったのです。
「ミムラっ子！　おまえには、わしの鼻にキスをすることをゆるす。」
こう王さまは、ま顔でいいました。
ミムラのむすめは、王さまのひざにはいあがって、この年とった王さまの鼻にキスしました。
国民はそろって、「ばんざい。」「ばんざあい。」とさけぶと、賞品をたべだしました。
ほんとうに盛大な園遊会でした。
くらくなってくると、びっくり公園のいたるところに、色とりどりのちょうちんがつけられました。ダンスもはじまり、よろこびのあまり、とうとういざこざまでおこってしまいました。王さまは風船をくばったり、りんご酒の大だるをあけたりしました。あちこちでは、たき火もはじまり、けらいたちがスープをつくったり、ソーセージをやいたりしていました。
みんなと歩きまわっているうちに、わたしは大きなミムラを見かけました。かの女はまるで、まるいものをくみあわせてつくったみたいなかっこうでした。わたしはミムラのまえまでいって、おじぎをしてききました。
「失礼ですが、もしや、ミムラさんではいらっしゃいませんか。」



ました。67番は鉄砲玉のかざりのついたシャンパンのまぜぼうでした。ほかの賞品は、さめの歯と、たばこのけむりのびんづめと、オルゴール用のかざりねじまきでした。

　みなさん、わたしがどんなにうれしかったかわかりますか。愛する読者のみなさん、わかってくださいますか。

　この王さまがあまり王さまらしくないということで、わたしは、じつは不平だったのです。ところが、そういうことはもうゆるす気持ちになって、きゅうになかなかいい王さまだと、思

の。ところが第三には、空想でもってさがすものが見つかるような場所をえらんだのじゃ。その賞品は、なんの役にもたたんものばかりだわい。

さあ、つける薬がないというばかものたち。いちばん空想的な場所をさがしたのはだれじゃ。石の下とか、小川の中とか、木のてっぺんとか、花のつぼみの中とか、じぶんのポケットとか、あり塚の中なんかをさがしたのはだれだな？ 67番、14番、890番、999番、223番、それに27番のたまごをもっているのはだれじゃな。」

「ぼくです。」

と、わたしはさけびましたが、ありったけ大きな声をだしたので、じぶんでもびっくりしてはずかしくなりました。そのあとでだれかが小さな声で、999番といいました。

王さまはいいました。

「さあ、いい子のムーミンくん、まえへでなさい。ほれ、ここに空想家にあげるなんの役にもたたん賞品があるよ。どうじゃ、気にいったかね。」

「はい、とても気にいりました、陛下。」

と、わたしは大きく息をすって、わたしのもらったへんな賞品をながめました。27番がおそらく、いちばんりっぱなものでしたろう。それは客間のかざりものであって、さんごでできたあしの上に、海泡石の電車の模型がのっかっており、二両めの前デッキには安全ピンいれがついてい

「これをどうぞ。たいせつにつかえよ。」
王さまはこういって、りっぱな回転のこぎりをわたしました。これはフレドリクソンが、まえからほしがっていたものでした。つぎつぎと賞品の番号が読みあげられました。みんなは長い列をつくって、わらったり、おしゃべりしたりしながら、玉座の下にあつまりました。だれもがなんかかんかもらいましたが、わたしだけは、なんにももらいませんでした。
ヨクサルとロッドユールとは、じぶんたちがもらった賞品を一列にならべて、それにくいつこうとしていました。賞品はだいたいチョコレートや、ヘムルの形をしたひがしや、わたがしでした。ところが、フレドリクソンのひざの上には、おもしろくもない大工道具などの実用品が、どっさりつみあげられていました。
さいごに、王さまは玉座の上にたちあがって、さけびました。
「国民のみんな！　頭がへんで、けんかっぱやくて、ちえのたりない、けらいのしゅう。おまえらは、いまおまえらにいちばんにあったものをもらったはずじゃ。それ以上のものをもらうねうちは、おまえらにはないぞ。
わしが百さいのあいだにためたちえで、わしはたまごを三種類の場所にかくした。第一は、あちこち走りまわっているうちには見つかるような場所で、賞品はたべられるものばかりじゃ。第二は、おちついて順序よく考えながらさがすと見つかるような場所で、この賞品は実用的なも

わたしはしっぽでささげつつをしながら、つくり声でいいました。
「国王陛下、遠い海岸からやってきた避難民に、お祝いをのべる機会をおあたえください。ただいまはふかい感激をおぼえているのでございます。」
王さまはびっくりしたように、わたしをじろじろ見ていたかと思うと、げらげらわらいだしていいました。
「乾杯、おまえたちもずぶぬれになったかね。おうしはなんといったかね。だれも、シロップのおけにつまずいてころばなかったとは、いわせないよ。おお、王さまって、なんてゆかいなものなんだ。」
それから、王さまはわたしたちにあきてしまって、また霧笛を鳴らしました。
「おい、忠良な国民たち。メリーゴーラウンドをとめろ。みんなこっちへこい。これから賞品を授与する。」
メリーゴーラウンドとぶらんこがとまって、みんな、たまごを手にもって走ってきました。王さまはさけびました。
「701番！　701番はだれがもっているか。」
「わたしです。」
と、フレドリクソンがいいました。

と、いかにもからだにあわないまえかけをした大きなヘムルが、ききました。（わたしがいつもいってるとおり、ヘムルは趣味がわるいんです。）ヘムルはわたしたちに、コップ一ぱいずつをわたすと、まじめな顔でいいました。

「さあ、王さまにお祝いをいっていらっしゃい。きょうは百さいのお誕生日ですからね。」

わたしはジュースのコップをにぎりしめて、ふくざつな気持ちで王さまの玉座を見あげました。そこにはしわくちゃの王さまがすわっていましたが、すこしもわたしににてはいませんでした。わたしはがっかりしたでしょうか、ほっとしたでしょうか。

玉座を見あげる瞬間は、ほんとに厳粛でおもおもしいものです。トロールはだれにでも、なにか見あげるものが必要なんです。（そりゃもちろん、見さげるものも必要ですがね。）その見あげるものとは、尊敬することができて、しかも高貴な感じを受けるものでなければだめです。しかし、ああ、わたしの見た王さまは、王冠をあみだにかぶり、ひざをたたいたり、玉座がゆれるほど、足をふみならしたりする王さまだったのです。

玉座の下には霧笛がおいてあって、王さまが国民のだれかとさかずきをかわしたいと思うたびに、これをふきならすのでした。わたしがひどくがっかりしたのは、いうまでもありません。

霧笛がやっとなりやむと、フレドリクソンがいいました。

「一世紀のお誕生日、おめでとうございます。」

と、フレドリクソンがいいました。
わたしたちは緑の野原にでてきました。野原には、王さまの国民がうようよいて、すべり台であそんだり、どなったり、うたったり、爆竹をなげあったり、わたがしをたべたりしていました。まん中に三角のはたをなびかせた大きなまるい家があって、音楽をかなでながらまわっていました。中には、銀のくつわをつけた白いうまがたくさんいました。
「あれは、なんていうもの。」
わたしはすっかり感心してききました。
「メリーゴーラウンドだよ。ほら、図を書いてやったじゃないか。断面図をさ。おぼえていないのか。」
と、フレドリクソンがいいました。
「だけど、あれはぜんぜんこれとちがっていたよ。これにはうまや、銀や、はたや、音楽があるんじゃないの。」
と、わたしは抗議しました。
「歯車だってあるんだよ。」
と、フレドリクソンはいいました。
「みなさん、ジュースはいかがです。」

たが、それは、かたないとすぐいやになるからでした。しかし、たまごをさがすのはおもしろいことでした。

ニブリングはたまごをいちばんたくさん見つけましたが、賞品がくばられるまでは、たまごはたべないでとっておくものだとかれにわからせるのは、なかなかやっかいでしたっけ。フレドリクソンが二ばんで、わたしはそのつぎでした。ヨクサルはさがすのをめんどうくさがるし、ロッドユールは、なんの秩序もなく、うろうろとさがすだけで、このふたりはおなじくびりでした。

さいごに、木と木のあいだに長い色ひもが、花むすびにしてあるのを見つけました。大きなたてふだには、つぎのように書いてありました。

これからがほんとうにおもしろいのだよ！

たのしそうなさけび声や、花火の音や、音楽がきこえてきました。庭の中はお祭りのさいちゅうでした。

ニブリングは、心配そうにいいました。

「ぼくはここでまってるよ。どうもあの中はさわがしすぎるもの。」

「いいよ。でも、まいごになっちゃだめだぜ。」

すごいうなり声をあげて、角をさげて（さいわい角にはわたがつめてありましたが）おそってきたときのおそろしさは、みなさんの想像にまかせましょう。ヨクサルは大きな弧をえがいて、ばらのしげみになげとばされてしまいました。

そのさきに、かちほこったような、こんなたてふだがあったことは、いうまでもありません。

思いがけなかったろう！

こんどはわたしも、王さまのじょうだんがわかるような気がしてきました。

みんなはだんだん、びっくりすることになれてきました。迷路のような王さまの庭をおくへすすんでいくにつれて、葉のおいしげったほらあなや、いろんなひみつのかくれ場所や、滝つぼや、人工の火のもえる岩のさけめなどをとおりこしました。

しかし、王さまが国民のために考えついたものは、おとしあなや、爆薬や、はがねのばねのついた怪物だけではありませんでした。ほらあなをのぞいてみると、鳥の巣があって、その中には、色をぬったたまごや、金色のたまごがはいっていました。しかも、たまごには一つ一つうつくしい色で、数字が書いてあるんです。わたしが見つけたのは、67と14と890と223と27の数字がついたたまごでした。これが福引きの番号だったのです。もともとわたしはかけごとがきらいでし


Tove

わたしはすっかりいやになってしまいました。王さまのやりかたががまんならなかったのです。

「へんな園遊会だな。」

と、フレドリクソンがつぶやきましたが、ヨクサルのいいぶんはこうでした。

「これはおもしろい。たしかに王さまは、おもしろい人にちがいないな。まじめくさったところがぜんぜんないや。」

わたしはヨクサルをにらみつけてやりたくなりましたが、ぐっとこらえました。

そのうちに、運河が縦横にはしっていて、いたるところに、橋がかかっている場所にきました。橋はみんな、おんぼろだったり、ボール紙をはりあわせた見せかけだけだったり、ときには、くさった木の丸木橋を、バランスをとって、やっとこさわたらなければならなかったり、古ぼけたひもやなわのきれっぱしでできたつり橋をわたらせられることもありました。べつになにごともおこりませんでしたけれど、一度だけニブリングが、どろの中にさかだちになり、それで元気をとりもどしたふうでしたっけ。

とつぜんヨクサルが、

「へへえん。こんどはだまされないぞ。」

とさけぶなり、ぬいぐるみのおうしをめがけて走っていって、鼻をつねりました。おうしがもの

厳にかかわるよ。ことに百さいにもなっている王さまとしてはね。王さまというものは、けらいたちの尊敬を受けるようなことをしなければまずいのだがな。威厳をたもたなくちゃねえ。」

やがてわたしたちは、人工の湖のそばにでました。こわごわ湖をながめると、王さまのはたをはためかした小さなきれいなボートが、岸につないであって、水の上まで、しだれた木がえだをのばしていました。

「これを信じていいのかなあ。」

ヨクサルはこんなひとりごとをいいながら、ボートにのりこみました。ボートはまっかでしたが、船べりだけ青くぬってありました。

わたしたちが湖の中ほどまでこぎだしたとき、王さまの新手のおどかしにぶつかりました。だしぬけにボートのそばから噴水がふきだして、みんなはずぶぬれになったのです。ロッドユールは、きゃっとさけびました。それから岸につくまでに、わたしたちは、四回も水をあびせられました。

岸にはこんなふだがぶらさがっていました。

ずぶぬれになったろう!

くもは足を風車のようにふりまわして、目をぐりぐりさせました。（目には柄がついているのでした。）フレドリクソンはおもしろがっていいました。
「つくりものだ、足ははがねのらせんだ。よくできてるなあ。」
「ごめん、だけど、こんなわるふざけなんか、ぼくにはちっともおもしろくないさ！　こわいのは、ほんとうにおそろしいものだけでたくさん。」
と、ロッドユールがいいました。
「外国人のやることさ。」
と、フレドリクソンは、かたをすぼめました。
わたしはとてもショックをうけました。このくものせいというよりは、いかにも王さまらしくないこんなやりかたに、がっかりしたのです。
つぎのまがりかどに、ふだがさがっていて、いかにもうれしそうな字が書いてありました。

こわかったろう！

わたしはぐらぐらした気持ちで、考えました。
「王さまともあろうものが、どうしてこんな子どもっぽいことをやるんだろう。こんなのは、威

と、ロッドユールがききました。
「いないどころのさわぎじゃないわよ。お客さんの五十パーセントはゆくえ不明になってしまうの。どうしてだかわからないけどさ。あたし、さきへいくわ。さようなら。」
と、ミムラのむすめは小さな声でいいました。

わたしたちは、気をつけながら、あとからついていきました。道はおいしげったやぶのあいだをとおっていました。長い緑の葉のトンネルは、ぶきみで、うすぐらく……。
「ストップ！」
と、フレドリクソンが耳をぴんとたててどなりました。深いわれめが、道を横ぎっていたのです。われめの中からは――おおいやだ。話すのもおそろしい――なにか毛むくじゃらのものが、足をぶるぶるふるわせながら、こちらを見つめているのでした。大ぐもでした。
「しっしっ、こいつ、おこっているかどうか、ためしてみようかな。」
と、ヨクサルは小さな声でいって、小石をなげつけました。



王さまの園遊会

大歓迎！（入場無料）
今回は、王さまの百さいのお誕生日にちなみ、
とくに大がかりなびっくり大会をひらきます。
〈注意〉なにがおこってもおどろかないこと。

「なにがおこるんだろう。」
と、ニブリングがききました。
「わかるもんですか。しかし、とてもおもしろいわよ。」
と、ミムラのむすめがいいました。
　わたしたちは、庭をはいっていきました。庭はあれるにまかせて、草や木がしげりほうだいでした。
「ごめん、ここには猛獣はいないだろうね。」

さんはじぶんの赤ひげにくるまるのよ。ひげの半分をかけぶとんにして、あと半分をしきぶとんにするの。昼間はひげの中に、小さい白ねずみを二ひき住まわせてるわ。あんまりかわいいんで、家賃はただなんだって。」
「ごめん。だけど、まただましているんだろ。」
と、ロッドユールがいいました。
「あたしの弟や妹たちも、信じていてよ。十四、五人いるけど、みんなそう思っているわ。あたしがいちばん年上で、いちばん頭がいいの。さあついたわ。ママには、あなたたちがあたしをだましてつれてきたんだ、っていってね。」
「ママは、どんな顔をしているね？」
と、ヨクサルがきくと、
「まるい顔をしているわ。なんでもかんでもまるいの。きっと中身もまるいんだわ。」
と、ミムラのむすめはいいました。
わたしたちは、とくべつに高い石がきの前にたっていました。門には花かざりがしてあって、その上に、つぎのように書いた掲示板がでていました。

「ねえきみ、どうしてこんなに石がきがたくさんつくってあるんだい。だれかをとじこめるため？　それともじぶんをしめだすため？」

こういって、ヨクサルがきくと、ミムラのむすめは、

「あら、とくべつの意味があるわけじゃないわよ。あたしたち、石がきをつくるのがたのしみなの。石がきをつくるときは、お弁当をもっていって、まるでピクニックみたいでしょ。あたしのおじさんなんか、十七キロもつくったわ。あんたたち、おじさんにあったら、きっとびっくりするわ。」

といって、さもたのしそうにわらいました。

「おじさんはありとあらゆる文字や単語を、前からもうしろからも研究して、ぜったいにわかるまで、石がきのまわりをぐるぐるまわるの。長くてふくざつなことばになると、何時間もかかることがあるわ。」

「たとえば、ガルゴロジムドントローグね。」

と、ヨクサルはいいました。

「それなら、アンテイフイリフレースコンスムチオンはどうだい。」

と、わたしはいいました。

「まあ、そんなに長いのだったら、おじさんはそのそばで夜番をしなくちゃ。夜になると、おじ

と、ミムラのむすめはいいました。
「ほんとうもほんとう。王さまは独裁者で、しかも、いまいちばんえらい王さまよ。きょうは王さまのお誕生日で、百さいになるのよ。」
「ぼくににている?」
と、わたしは小声でききました。
「いいえ、ちっとも。どうしてあんたににてなきゃいけないの。」
と、ミムラのむすめは、あきれたようにききました。わたしは、なにかぶつぶつ口の中でいって、顔を赤くしました。もちろんこれは、ちょっとせっかちすぎたのです。それというのは、わたしはちょっと王さまになったような気持ちでいたからです。
それにしても、とにかく王さまにあうことができるはずでした。ばあいによっては、王さまと話ができるかもしれません。
王さまというものは、まったくとくべつなものですね。えらくて、高いところにいて、近づくことができないんです。ふつうわたしは、人のことなんか感心しませんさ。（フレドリクソンだけは例外かもしれません。）しかし王さまというのは、じぶんをべつに小さくしなくとも、尊敬することができるあいてなんです。これはすてきなことではありませんか。
ミムラのむすめは、丘をこえ、石がきをとびこえて、走っていきました。

フレドリクソンは、あっけにとられてききました。
「すこしたのしくしようと思っただけ。あんまりつまらないんだもの。」
そういうとミムラのむすめは、またなきだしました。
「この子をつれて、その園遊会にいってみようじゃないか。」
と、ヨクサルがいいだしました。
「だけど、ミムラがおこらないかしら。」
こうわたしがいうと、
「おこるもんですか。」
といって、ミムラのむすめはもう大よろこびでした。
「だって、ママは外国人が大すきだし、わたしがわるい子だったのも、もうわすれてしまったにちがいないもの。ママってば、なんでもすぐわすれるんだから。」
小さなミムラのむすめは、毛のショールを首からとると、もう外へとびだしてさけびました。
「さあ、大いそぎよ。王さまはもうとっくに、びっくり大会をはじめているはずだもの。」
「王さまだと？　ほんとうの王さまかい。」
わたしはおなかから、力がぬけるような感じがしました。
「ほんとうのかって？」

「発疹チフスか、コレラかもしれないって、ママがいってたわ。」
と、ミムラのむすめは、顔をくもらせました。
「あ、あ、あ、あ。」
「発疹はないね。いたいかね。」
と、フレドリクソンはききました。
「ものすごく。いまにわたしののど、ふさがってしまうわ。そうしたら、息をすることも、たべることも、話すこともできなくなるわ。」
と、ミムラのむすめがいいました。
「さあ、ねなさい。」
と、フレドリクソンはびっくりしていいました。
「すぐに、きみのママをつれてきてあげるからね。」
「おねがいだから、やめて!」
と、むすめがいいました。
「ほんとうは、だましただけなの。わたし、病気なんかじゃないわ。あたしがあんまりわるい子だったので、ママまでかんにんできなくなって、園遊会につれていってくれなかったの。」
「だましたんだって? なんでまた。」



　ロッドユールがいきおいこんできくと、ミムラのむすめはなきだしてしまいました。
「わたし、のどがいたいの。ママのいうには、ジフテリアだって。」
「ドアをおあけよ。きみののどを見てやろう。こわがることはないんだよ。」
　こう、フレドリクソンが、やさしくいうと、ミムラのむすめはドアをあけました。むすめは毛のショールを首にまいて、目を赤くはらしていました。
「さあ、見てあげよう。口をあけて、ああといってごらん。」

わたしはとてもがっかりしました。ほかのれんじゅうもそうだったろうと思います。

ところが、わたしたちがある小さな家の横をとおりかかったとき、中からくしをかきならす音が、はっきりときこえてきました。その家は、ほかの家よりもまたいちだんとみすぼらしく見えました。そこでわたしたちは、四回も戸をたたいたのですが、だれもあけてくれませんでした。

「もしもし、だれかいませんか。」

こういってフレドリクソンがよぶと、中から小さな声が答えました。

「はあい、だれもいませんよ。」

「おかしいね。そんなら、中でへんじをしているのはだれです。」

と、わたしがいいますと、声が答えました。

「ミムラのむすめよ。だけど、早く早くあっちへいっちまってよ。ママがかえってくるまでは、だれにもドアをあけるわけにはいかないのよ。」

「それじゃ、ママはどこにいるんだ。」

と、フレドリクソンがききました。

「ママは園遊会にいっているの。」

と、小さな声はかなしそうにいいました。

「きみは、どうしてつれていってもらえなかったんだい？　小さすぎるの。」

しかし、竜のエドワードの決心がついたころには、わたしたちは、とっくに、そのあぶない場所をはなれていたのです。もうすこしで、わたしたちのゆめも希望もきえさって、まくぎれとなるところでしたっけ。

やっとのことでわたしたちは、見しらぬ島のおくふかくにはいってきたのですが、そこらは、どちらをむいても草におおわれたまるい丘があるだけでした。そこはどうやら、まるい丘の国だったようです。その青々した丘の上には、ひくい石がきがあぜ道のように縦横にのびていました。これはたいへんなしごとだったにちがいありません。

しかし、ところどころにたっている家は、たいてい草ぶきで、ムーミンから見れば、とてもみすぼらしいものでした。

「どうして、こんなに石がきをつくったんだろう。だれかをとじこめているのか、それともじぶんをしめだしているのかな。だいいち、住民はみんなどこへいってしまったのだろう。」

と、ヨクサルがふしぎがりました。

まったく、あたりはしいんとしていて、人のけはいなんか、まるで感じませんでした。こういうときは、わたしたちがあったあらしのことなどをききたがって、人々がわんさとおしかけてきて、感心したり同情したりしながら、話をきくものなんですが、人っ子ひとり、すがたを見せないのです。

「おまえたちは、また、おれをだますんだな。このふとんには、きっと岩がつめこんであるんだろ。え？」

そういいながら、エドワードは雲を岸にひきあげて、うたがいぶかそうに、鼻づらでかぎまわしました。

「エドワード、すわってごらんよ。やわらかくて気持ちがいいぜ。」

と、フレドリクソンがいいました。

「おまえは、あのときもそういったぞ。やわらかくて気持ちがいいってな。それでほんとうはどうだった？　ぎざぎざのがちがちの石だらけのごつごつのでこぼこさ……。」

そういいながらも竜のエドワードは、雲にこしをかけました。とたんに、なにか考えこむように、だまってしまいました。

「どうですか。」

と、わたしたちは、のぞみをかけてききました。

「ううむ。」

と、気むずかしい声でうなってから、エドワードはいいました。

「どうやら、かたいというほどのものではなさそうだな。おれは、もうしばらくここにすわってみてから、おまえたちをやっつけるかどうか、きめることにする。」

まったことでしょうよ。
いずれにしても、このときは、いよいよさいごというときに、わたしにいい考えがうかんだのでした。みなさんのごぞんじのとおり、例のカチッという音をきいたとたんに、考えがまとまったのです。
わたしは、勇気をふるって、このあれくるう山にたちむかっていき、おちつきはらっていったのでした。
「おじさん、こんにちは。またあえてよかったね。ところで、おじさんの足はまだいたむの。」
「そんなことを、よくもこのおれにきく勇気があるな。このみじんこやろうめ。もちろん、足はまだいたむさ。それにおしりもな。みんな、おまえたちのせいだぞ。」
と、竜のエドワードがどなりました。
わたしは、いっそう気持ちをおちつけていいました。
「それだったら、おじさん、ぼくたちのもってきたおみやげが、なおさらお気にめすでしょうよ。ほんもののかもの毛でつくった、竜のねぶくろですよ。かたいものの上に、どすんとすわってしまった竜のために、とくべつにこしらえた品ですよ。」
「ねぶくろだって？　かもの毛だと？」
と、エドワードは、目をほそめてわたしたちの雲を見おろしながらいいました。

第5章



わたしの頭のよさをちょっと証明したあとで、ミムラ一家のこと、それから、びっくり大会で王さまからすばらしい名誉賞をさずけられたことをのべます。



竜のエドワードは、わたしたちの上にすわってしまうつもりだったのだ、と、いまでもわたしは信じています。そして、そのあとでエドワードはなみだを流して、わたしたちのためにりっぱなお葬式をして、良心の呵責をはらいきよめたのに、ちがいありません。それからそのかなしい話も、あっというまにわすれてしまって、またエドワードをおこらせただれか友だちの上に、すわってし

「わしだって、わかいころは、ムーミントロールぐらいの元気はあったな。いまだって、まだおとろえちゃいないぞ。」

と、ひとりごとをいいながら、地面をたのしそうにふんでいったのです。



さんついているところを見ると、長いあいだ、海の上をただよっていたものにちがいありません。ひびわれた木のところどころに、まだちょっと金の色がついていました。

　ムーミンパパは、両方の前足で、木のたまねぎをとりあげてながめていました。ながめているうちに、目がだんだん大きくなっていき、とうとう前足で目をかくして、ため息をつきました。

「おまえたち！」

　ムーミンパパは、もったいぶった、ちょっとつまった声できりだしました。

「おまえたちの目のまえにあるのは、海のオーケストラ号の操舵室の屋根の上にあったかざりなのだ。」

「へえ。」

と、ムーミントロールは感心していました。

　そのときパパは、じぶんの思い出におぼれるようにいいました。

「さあ、わしはあたらしい章をはじめるぞ。この再発見については、ひとりで考えてみよう。さあ、みんなはほらあなにでもいってあそんでおいで。」

　それからムーミンパパは、かたほうのうでに金のかざりを、もうかたほうに、思い出の記のノートをもって、みさきにむかって歩いていきました。そして、

と、ムーミントロールがいいました。
するとパパは、はずかしそうにいいました。
「まあね。そういうこともあったさ。だが、それはずっとずっとあとのことだよ。そのことは、本にはとりあげないつもりだがね。」
「書いてもいいと思うんだがなあ。おじさんは、あとになって、わるいくらしというのをしたんだろう。」
と、スニフがいいました。
「だまってろ。」
と、ムーミントロールがいいました。
すると、パパはいいました。
「〇〇〇さ！　おや、あそこに、なにか流れついたものがある。ちょっとひろってきてごらん。」
みんなは、走っていきました。
「なんだろうな。」
と、スナフキンがいいました。
それは大きな、重たい、たまねぎのようなかっこうをしたものでした。海草や貝が、たく

きょうはムーミンパパは、むすこやスナフキンやスニフたちといっしょに、砂浜にすわりこんでいたのです。パパがおそろしいあらしの話をしているあいだじゅう、みんなの目は、海のほうにむけられていました。海では、夏のおわりの気持ちのいいうねりが、浜べにむかっておしよせていました。

みんなは海のオーケストラ号が、パパたちを乗せてあらしの中を、ゆうれい船のようにとんでいくようすを、まざまざと見たような気がしました。

「ぼくのパパはかんの中で、どんなに気分がわるかったことだろう。」

こうスニフが、ひとりごとをいいました。

「ここはさむいな。歩こうか。」

と、ムーミンパパがいいました。

みんなは、海草をふみながら、風を背にして、みさきのほうへでかけました。

「おじさん、ニブリングのような声だせる？」

と、スナフキンがききました。

ムーミンパパはやってみました。

「だめだ。うまくいかん。鉄管の中からきこえてくる音でなければ、ああはならないんだ。」

「だけど、ちょっとにてたよ。パパはそのあとで、ニョロニョロたちとにげたんじゃない？」

しをいれ、歯もしっぽもみがいて、船べりにならんでいました。
そのとき、頭の上のほうから、かみなりみたいな声が、おそろしいことばをなげおとしてきました。
「やい、これがフレドリクソンとその悪党どもでないとはいわせないぞ。やっとこさ、つかまえたわい。」
おどろいたことに、竜のエドワードだったのです。しかも、エドワードはものすごくおこっていました。

「わしのわかいときには、こんなことがあったのさ。」
と、ムーミンパパはノートをとじながらいいました。
「もっとさきを読んでよ。それからどうなったのさ。竜は、みんなをふみつけはしなかったの。」
と、スニフがいいました。
ムーミンパパは、思わせぶりないいかたをしました。
「それはつぎのおたのしみとしよう。おもしろかったろう。だがね、本を書くときには、いちばんもりあがったところで章をきるのが、こつというものさ。」

は、まだのこっている金具はのこらずみがくようにと、わたしにいいつけました。もちろんヨクサルは、なにもしていません。

　船はまっすぐに、はじめて見る陸地にむかってすすんでいきました。高い丘の上には、なんだか灯台のようなものが見えてきました。その塔は、かすかに右左にゆれていました。おどろくべき現象です。しかし、わたしたちは、いそがしくて、そんなことにかかわっているひまがありませんでした。

　海のオーケストラ号が、丘のふもとの浜べにすべりこんでいったとき、みんなは髪の毛にはきれいにく



光をわたしのひえたおなかになげかけて、わたしの勇気をふるいたたせてくれました。

わたしは、あの歴史的な脱出のあと、自由な第一日めに見た日の出と、それから、砂の中に家をたてた日のあの朝の日の光を、よくおぼえています。わたしは、ライオンと太陽の名誉あるしるしの下で生まれ、わたしの星がさだめるコースにしたがって、太陽の軌道をたどるように運命づけられているのです。

あらしなんて、なんでもありません。そのあとの日の出を、いちだんとうつくしく見せるのが、あらしの意味かもしれません。操舵室の金の屋根かざりなんか、あたらしくすればいいんです。わたしはコーヒーをのみながら、にこにこしていました。

そこで、ページがめくられて、わたしの一生は、あたらしい章をむかえようとしていたのです。ゆくてに陸地が見えました。大海の中にぽつんと浮かんだ大きなはなれ島です。はじめて見る陸地のどうどうとしたすがた！

わたしはさかだちして、さけびました。

「フレドリクソン、またなにかおこるぞ。」

ロッドユールは、とたんに気分のわるいのがなおって、上陸する用意に、かんの中をかたづけだしました。ニブリングは、興奮のあまり、じぶんのしっぽをかんでいます。フレドリクソン

たまえ。」

　わたしたちがふたをあけてやると、ロッドユールはまっさおななさけない顔をしてあらわれて、つかれはてた声でさけびました。

「ああ、ボタンの神さま。こんなに気持ちがわるくなるなんて、どうしたんでしょう。おそろしい世の中です。なんというつらいことでしょう。ほら、この中のぼくのコレクションを見てくれ。なんということだ。」

　ニブリングもでてきて、風にむけて鼻を鳴らしていましたが、それからきゅうにいいました。

「ああ、おなかがすいた。」

「ごめんなさい。だけどごはんづくりを考えるだけで……。」

と、ロッドユールがいいました。

「安心しろ。ぼくがつくるから。」

と、わたしはいいました。

　それから、操舵室にむかうとちゅうで、きずだらけの船べりごしに海のほうを見ながら、わたしは考えました。（さあ、これでおまえのことは、みんなわかったぞ。船のことも、雲のことも。このつぎのあらしのときには、目をつぶって小さくなったりなんかしないぞ。）

　朝飯の用意ができたころには、太陽はもう高くのぼっていました。太陽はおだやかなやさしい

んの庭にかくれようとしたことなどは、わすれてしまいました。こうして安心すると、またもや好奇心がでてきて、朝飯がたべたくなりました。

ほんとうにひどいさむさでした。わたしはそっと手足をふってみて、それから、しっぽと耳をしらべてみましたが、なにもあらしにやられたところはありませんでした。

ヨクサルもそこにいました。かれはロッドユールのかんのうしろにすわって、パイプに火をつけようとしていました。

しかし海のオーケストラ号は、あわれなすがたになっていました。マストはおれ、水車もなくなって、マストのつなのきれっぱしが、なさけない音をたてていました。船べりは数か所へこんで、デッキには海草や板きれがいっぱいいちらばり、海おばけも何びきかのびていました。いちばん残念なのは、操舵室の金の屋根かざりがなくなっていたことです。

わたしたちの雲は、すこしずつしぼまって、船は海にむかっておりていきました。東の空が赤くなるころは、わたしたちはあらしのあとの波のうねりの上にゆさぶられていました。ロッドユールのかんの中では、ボタンがガラガラ鳴っています。絵本の白い雲のようなのは、またもやデッキいっぱいにひろがって、ねむってしまいました。

そのときフレドリクソンが、もったいぶった調子でいいました。

「親愛なる乗組員諸君。われわれはあらしをのりきった。おいっ子をかんからだしてやってくれ

と、フレドリクソンはさけんでいました。

けれどもわたしは、フレドリクソンの絵本の中の波を見たことはありませんから、なおもつづけて目をつぶって、ヘムレンさんの庭のぶらんこをしっかりとにぎっていることにしました。これはなかなかききめがありました。しばらくすると、ほんとにぶらんこがゆれているように感じて、あらしはきえてしまい、危険は感じなくなりました。

そこで目をあけたところが、おどろくべき光景でした。海のオーケストラ号が、大きな白い帆をさきにたて、空中をゆれながらとんでいるではありませんか。はるか下のほうでは、まだあらしがつづいて、黒い波がさかまいていました。しかし、上から見ると、そんなのは小さいおもちゃのあらしで、わたしたちには関係がないように見えました。

「ぼくたち、とんでいるんだぜ。とんでいるんだぜ。」

と、フレドリクソンはさけびました。わたしは、かれとならんでたって、帆づなについている大きな白い風船を見あげながら、ききました。

「どうやって、雲をあすこにまで、ひきあげたの。」

「じぶんでのぼっていったんだ。空とぶ船だ。」

と、フレドリクソンはいうなり、思いにしずんでいきました。

だんだん、夜があけてきました。空は灰色で、とてもさむかったのです。わたしはヘムレンさ

なにも知っちゃいないということに、気がつきました。フレドリクソンをよびましたが、かれにはきこえませんでした。わたしはひとりぼっちで、だれにたすけてもらうこともなく、劇的なクライマックスに直面していたのです。

読者のみなさん、わたしはここでは、なにも恐怖のあいてを、大げさに書く必要はなかったのですよ。というのは、おそろしいようすを大げさにあらわすのは、見物人に見せるときだけでいいと思います。そうじゃありませんか。

だから、わたしはいそいで、恐怖のあいてを小さく考えることにしました。目をつぶって、じぶんはちっぽけなものだというふりをしていれば、だれもわたしがいることに気がつかないで、とおりすぎてしまうかもしれませんものね。

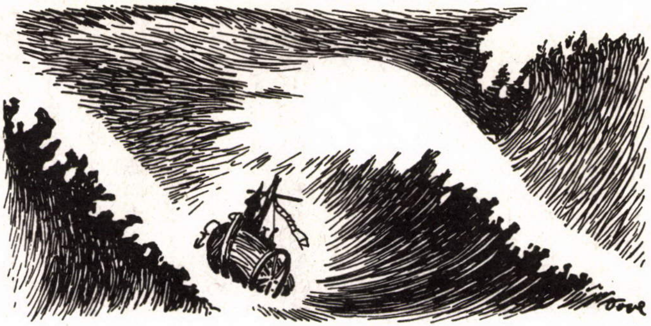
そこでわたしは、目をつぶって小さくなって、なんどもなんども、じぶんはなんでもないんだと、じぶんにいいきかせました。ぼくはちっぽけなんだ。ぼくはいまヘムレンさんの庭のぶらんこにのっていて、もうじき家にはいって、オートミールをたべるんだ、なんて……。

「おい、こりゃちっこいぜ。」

と、フレドリクソンが、あらしの中でどなりました。

わたしにはその意味が、とっさにはつかめませんでした。

「うん、ちっこいな。絵本のよりは、よっぽど小さい波だ。」



すが……。

ロッドユールのかんは、船べりにはさまってしまって、海のオーケストラ号が、波の谷間におちこんだり、またつぎの波がしらにのってゆれながらのぼってくるたびごとに、ボタンや、ガーターや、かん切りや、くぎや、ガラス玉やらが、ガラガラと音をたてました。ロッドユールが、気持ちがわるくなったといってさけびましたが、だれもたすけてやることはできませんでした。わたしたちは、手あたりしだいのものに必死でつかまって、おそろしさにぶるぶるふるえながら、くらい海を見つめていました。

太陽はかくれました。水平線も消えてしまいました。なにもかもが、それまでとはちがって、ものすごいすがたとなり、敵意をいだいているようでした。波がしらが、猛獣のようにうなりながら、わたしたちのそばをとおりすぎていきました。

とつぜんわたしは、じぶんが、海のことも、船のことも、

わけではないんです。もちろん、ヨクサルのくらい運命をうたがったりするのは、わたしの役目じゃありませんがね。

　フレドリクソンは、そのあいだにも耳をぴくぴくさせたり、鼻を風にむけたりしていましたが、それから海のオーケストラ号を、愛情をこめた心配そうな目で見ていいました。

「この船はがんじょうにできてるから、だいじょうぶだ。ロッドユールとニブリングは、かんの中にはいって、ふたをしめていなさい。これからあらしがくるからな。」

「まえに、あらしにあったことがあるの。」

と、わたしは、そっときいてみました。

「あるよ。」

と、フレドリクソンは答えました。

「絵本の中でね。『大航海』の中にでてくるよりも大きな波なんて、ありっこないと思うよ。」

　みるみるうちに、あらしがやってきました。ほんとうのあらしらしく、だしぬけにおそってきたんです。海のオーケストラ号は、はじめはふいをつかれて、てんぷくするかと思えましたが、すぐにたちなおって、あれくるう自然の猛威の中を、ぐんぐんすすんでいきました。

　でも、日よけテントは木の葉のようにふき飛ばされて、海の上をひらひらとんでいってしまいましたっけ。とてもいい日よけでしたがねえ、だれかがひろって、よろこんでくれるといいんで

ていたと思います。しきふのようなまっ白か、それとも灰のようなねずみ色か？　よく本に書いてあるけれど、ぼくのばあいは、どちらだったでしょうか。
（おもしろいぞ。）と、わたしは思いました。そこで、いそいで船尾にいってさけびました。
「ぼく、しきふのように青ざめていないか。」
「いや、いつもと同じだよ。ところで、気圧はどうだった。」
と、ヨクサルがいいました。
「六七〇だよ！」
と、わたしは答えましたが、みなさんもおわかりのように、ちょっと気をわるくしていたのです。
おどろいたことに、一生のうちには劇的クライマックスとでもいうべき重大事が、ごくつまらないひとことで、ぶちこわされてしまうことがちょいちょいあるものです。わる気があってのことではないにしても、なんと考えがたりないのか、というほかはありませんね。
わたしは思うのですが、ぶきみな状態というものは、できるだけ大げさに受けとめるべきです。一つには、まえにもいったとおり、その場の状態をもりあげるのにも役だちますが、また、恐怖のあいてを大げさにすれば、それだけ恐怖心が小さくなるからです。そのうえ、ほかの人に強い印象をあたえるのは楽しいことですからね。でも、こんな考えかたは、もちろん、ヨクサルなんぞにわかるはずはありません。ちえという能力は、だれにもおなじようにあたえられている

が、気にいったらしいのです。

しかし、このふしぎなできごとで、航海はいよいよむずかしくなりました。

おなじ日のちょうど日の入りまえ、空もようがおかしくなってきました。空は黄色でしたが、ふつうの黄色ではなく、きたない色で、まるでばけものみたいな感じでした。水平線上のひくいところには、黒い雲がもくもくとむらがって、とんでいました。

わたしたちはかたまって、前デッキの日よけの下にすわっていました。ロッドユールとニブリングとは、雲の中から、やっとかんをほりだすと、まだ雲のひろがっていない船尾のほうへ、かんをころがしていきました。

海はすすけた太陽の下で、黒ねずみ色になり、風は不安をかきたてるように、マストのつなを鳴らしました。海のおばけや人魚たちは、ふきはらわれてしまったようでした。

わたしたちは、どうにも気がしずんでしまいました。フレドリクソンがわたしにいいました。

「きみ、ちょっと気圧計を見てきてくれないか。」

わたしは雲の上をはっていって、やっとのことで、操舵室のドアをおしあけることができました。おどろいたことに、気圧計の針は六七〇にさがっていました。無水銀気圧計としては、最低の目盛りです。

わたしは、鼻づらがきゅっと緊張でかたくなるのを感じました。たぶん、顔はまっさおになっ



うに速度をはやめたかと思うと、船べりをこえて、すとんとデッキの上におり、すっぽりとロッドユールのかんをつつんでしまいました。それからねがえりをうって、船べりから船べりまでひろがって、まるまりました。わたしのしっぽにかけていいますが、つぎの瞬間にはこのふしぎな雲は、わたしたちの目のまえで、ねむってしまったのです。

「こんなことって、きみ、見たことがあるかい。」

と、わたしはフレドリクソンにききました。

「ないね。」

と、フレドリクソンは、はっきりと答えました。しかも、いかにも気にいらない、というふうにです。

　ニブリングは、はっていって雲をかじってみて、消しゴムみたいな味がするといいました。

　ヨクサルは、雲にくぼみをこしらえて、そこにもぐりこみました。すると雲は、まるでわた毛のふとんのように、ふんわりとかれをつつんでしまいました。雲はどうやら、わたしたちのこと

「あ、そう。」

と、ニブリングはおどろいていました。そして、まる一日、電報のサインが見えやしないかと、首をまげ、空を見あげてすわっていましたっけ。

三時ごろニブリングは、大きな雲を見つけました。雲は、とてもひくいところをすすんできましたが、わた毛のような白いチョーク色で、とてもへんなものでした。

「絵本の雲みたいだ。」

と、フレドリクソンがいいました。わたしはびっくりして、きいてみました。

「きみ、絵本を見たことあるの?」

「もちろんさ。『大航海』という本だったね。ぼくが船をつくるようになったのは、そのせいだよ。」

と、フレドリクソンはいいました。

雲は、風上にむかって、船の上をとおりすぎてから、きゅうにとまりました。するととつぜん、なんともふしぎなことがおこりました。雲が向きをかえて、わたしたちのあとをおいかけだしたんです。

「ごめんなさい。ところで、雲ってしんせつなの。」

と、ロッドユールが、心配そうにききました。

しかし、だれもこの問いに答えることは、できませんでした。雲は船尾から流れてきて、きゅ

配のたねです。これは、どういうわけでしょう。しかし、いままでもわたしがすべての中心にいるということは、なぐさめにはなります。

それはともかく、ロッドユールがおひるまえに、ニブリングのママに電報をうとうといいだしました。

「あいつらには、住所がないよ。それに電報局だってありはしないさ。」

と、フレドリクソンはいいました。

「そうだったなあ。なんてぼくはばかだったろう。ごめんなさい。」

ロッドユールはこういうなり、はずかしそうに、またかんの中にもぐりこんでしまったのです。

「電報局ってなによ。それ、たべられるもの？」

と、かんの中にロッドユールと同居していたニブリングがききました。

ロッドユールは答えました。

「ぼくにそんなこと、きかないでくれ。なにか大きくてへんなものだよ。そいつは小さなサインを、地球の反対がわまでも送るものなんだ……するとむこうがわで、それが字になるのさ。」

「どうやって送るの。」

と、ニブリングがききかえしました。

「空中だよ。しかも、一字もおっこちないんだぜ。」

る。ぼくはなにかをつくりたいし、ぼくのおいは、なにかをほしがっている。それなのにヨクサルは、ただ生きようとしているんだ。」
「生きるなんて、だれにだってできるじゃないか。」
と、わたしはいいました。
「ふん。」
と、フレドリクソンはいったきり、いつもとおなじようにだまりこくって、ノートにむちゅうになっていました。ノートには、くもの巣や、こうもりのような、ふしぎな機械のしくみがいっぱい書いてありました。
いずれにせよ、わたしにはヨクサルの態度は、だらしがないように思えました。つまり、生きるだけというのがです。
生きるということは、あたりまえのことです。わたしの見かたからすれば、わたしたちのまわりには、いつも重要で意義ぶかいものごとが、ごろごろしている。それを体験し、そのことについて考え、そうして、それをじぶんのものにしなければならない。あんまりやりたいことが多いので、考えるだけで、ぞくぞくと首すじの毛がおったつ思いがします。そうして、その中心にはわたし自身がいて、もちろん、わたしがいちばん重要なのです。
いまの年になってみると、もう可能性がたくさんはのこっていないということが、わたしの心

と、わたしはいいました。そのころは、わたしはもう、りくつにかなりつよくなっていたのです。
「ぼくたちが話しているのは、やっているかいないかということだぜ。なにをやっているかではないんだ。ところで、予感のほうはどう。」
と、わたしは、すこし不安になってたずねました。
「なにもないね。アーウー、どこへいこうと、ぼくの知ったこっちゃないさ。どこだってけっこうだよ。じゃ、おやすみ。」
　こういってヨクサルは、あくびをしました。
「おやすみ。」
と、わたしもいいました。
　フレドリクソンが、夜あけにかじとりの交代にやってきたとき、わたしはかれにきいてみました——。
「ヨクサルがあんなに無関心なのは、おかしいと思わないか。」
　フレドリクソンのへんじはこうでした。
「そういっちゃいけないね。それははんたいで、ヨクサルのほうが、あんがいいろいろと気をつかっているのかもしれないよ。おちつきはらって、てきとうにね。
　ぼくたちは、いちばんたいせつなことしか考えないんだなあ。きみはなにかになりたがって

りました。夕がたになると、わたしがフレドリクソンにかわって、かじをとりましたが、これはほんとにたのしみでした。

　月の光をあびたデッキが、わたしの目のまえであがったり、さがったりします。しずけさと、波と雲と、水平線のおごそかにうつくしい弓なりの線、こういったものがすべて、わたしの心を気持ちよくはりつめさせました。そして、じぶんがとても重要なものであり、また同時にとても小さいものでもあるという感じを受けるのでした。

　ある晩、ヨクサルのパイプの火が、やみの中で光るのが見えました。かれは手さぐりでうしろのデッキにやってきて、わたしのそばにすわりました。

「なにもしないでいるって、いいことだなあ。きみもわかったろう。」

　ヨクサルはこういいながら、パイプを船べりでたたいて、灰をおとしました。

「だけど、ぼくたち、なにかしているじゃないか？　ぼくはかじをとっているし、きみはパイプをすっているし。」

と、わたしはいいました。

「どこへむかって、かじをとっているのやら？」

と、ヨクサルはいいました。

「それは別問題だよ。」

第4章



わたしたちの海の旅が、大あらしのために最高潮にたっしたこと。そしてそれが、おどろくようなことでおわったことをのべます。



海のオーケストラ号は、ひとりぼっちで、大洋をまっすぐすすんでいきました。くる日もくる日も、波にゆられ、日に照らされて、うつらうつらと、青一色のながめを見ているばかりでした。

船首のまえのほうでは、海おばけのむれが、いりみだれておよいでいました。また船がとおったあとの白い波の中では、人魚たちが尾をふっていたので、わたしたちは、オートミールをなげてや

「ぼく、あたらしい歯がはえるところなんです。だから、なにかしらかじらなくちゃならなかっただけなの。」

「だけど、なんだってまた、いかりづななどをかじったんだ？」

と、フレドリクソンがききました。

「あのつなはひどく古ぼけて見えたもので、かじってもかまわないかと思ったんです。」

と、ニブリングが答えました。

「どうしてきみは、船の中にかくれていたんだ？」

と、わたしがきくと、ニブリングはしょうじきに答えました。

「わかりません。きゅうに思いついたのです。」

「そんならどこにかくれていたんだ？」

と、こんどはヨクサルがききました。

「あのすばらしい、あなたの気圧計の箱の中です。」

そのとおり、気圧計の箱の中も、ぬるぬるになっていました。わたしはいいました。

「ねえきみ、きみがいなくなったことを知ったら、きみのママはなんていう？」

と、ニブリングは答えました。

「なくでしょうよ。」

よ。いかりづながかじりきられているじゃないか。」

と、フレドリクソンはいいました。わたしたちは、顔を見あわせました。

「ぼくの歯がすごく小さいことは、きみたちの知ってるとおりさ。」

と、わたしがいうと、ヨクサルもいいました。

「ぼくはこんなふといつなを、かじりきるほど働きものじゃないぜ。」

「ぼくじゃないよ。」

と、ロッドユールもさけびましたが、かれについては、もちろん、とがめだてする必要はありませんでした。

なにしろ、かれがうそをつくのをきいたものはなかったからです。ロッドユールはコレクションの数についても、オーバーにいったことがないので、みんなから信用されていたのです。たぶん想像力がたりないのでしょうね。

そのとたんに、かるいせきばらいの音がきこえました。ふりかえってみると、とても小さなニブリングが一ぴき、日よけテントの下にすわって、目をぱちぱちしていたではありませんか。

「うん、そうか、そうか。うん、うん。」

フレドリクソンが、くりかえしくりかえしいうと、その小さいニブリングがはずかしそうにいいました。

ロッドユールが操舵室の外でどなっていました。
「おきてよ、見てよ。水ばかりで、なにもないよ。ぼくはいちばんいいペンふきを、浜にわすれてきてしまった。ぼくのかわいいペンふきは、ひとりぼっちで、あの浜においてきぼりになって……。」
わたしたちは、デッキにとびだしました。
海のオーケストラ号は、海の上をおちつきはらって、いかにも目標をもっているみたいに、水車をパチャパチャ鳴らしながら走っていました。なにかのひみつによっぱらってでもいるようなんです。
いまでもわたしには、直角につけられた歯車がどうしてこのようにまえへすすむ力をおこすのか、わかりません。流れている川ならまだわかりますが、海の上をすすむともなると、どうにもふしぎです。しかし、いずれにせよ、ものの見かたは絶対的なものではありません。ニョロニョロたちがじぶんの電気ですすむことができるのなら――人によってはこのことを、あこがれのせいだとか、おちつきがないためだとかいいますが――船が歯車二つだけでうごくとしても、ふしぎはないでしょうね。まあ、いまはそれだけにしておいて、わたしは、フレドリクソンのところへいきました。かれはかたをすぼめて、ちぎれたいかりづなを見つめていました。
「おれはおこってるんだぞ。うんとおこっているんだ。いままで、こんなにおこったことはない

「なげ銭は、一度しかやるものではないんだ。あとは、なりゆきにまかせることにしよう。ぼくはねむくなった。」

と、ヨクサルはいいました。

わたしたちは、船の上でふゆかいな夜をすごしました。ベッドの中に足をつっこむと、シーツがみつみたいなもので、べとべとしていました。ドアの取っ手も、歯ブラシも、スリッパもぬるぬるでした。フレドリクソンの航海日誌などは、あけられないほどです。

「おい、おいっ子。きょうのそうじは、なんというざまだ。」

こうフレドリクソンにいわれて、ロッドユールがもうしわけなさそうに答えました。

「ごめん、そうじなんかぜんぜんしなかったんです。」

「たばこの中も、ぬるぬるだぞ。」

ベッドでたばこをのむのがすきな、ヨクサルがいいました。

なにもかも、いやな感じでした。わたしたちは、いちばんぬるぬるしない場所を見つけて、からだをまるめました。

けれども、ひと晩じゅう、へんな音になやまされました。その音は、どうも気圧計の箱からきこえるようでした。わたしは、船どけいがいつもとはちがったあやしい音で鳴ったので、目をさましました。

けました。
「ボタンは一つでいいんだよ、おいっ子。」
と、フレドリクソンがとめましたが、ロッドユールはとくいになっていいました。
「さあどうぞ。二つあなですか。四つあなですか、ほねのですか、ビロードのですか。それとも、木かガラスか金属？　それとも貝のですか。無地のもあるし、まだらのも、水玉のもありますよ。それとも、しまか、こうしの？　どれがいいんです。まるいのか、へこんだのか、でっぱったのか、平べったいのか、八角か、それとも……。」
「ふつうのズボンの、ボタンをくれよ。」
と、ヨクサルがいいました。
「さあ、ほうりあげるぜ。表が上なら出発。さあ、どうでるかな。」
「あなが上むきでありますように。」
と、ロッドユールはいって、うすくらがりでも見えるように、鼻をボタンに近づけました。
「さあ、どうなってる？」
　こうわたしがいったとき、ロッドユールがひげをうごかし、それがボタンにさわったもので、ボタンはすべって、岩のわれめにおちました。ロッドユールはあわてていいました。
「ごめんごめん。もう一つだしましょうか。」

と、わたしが興味をもってきくと、ヨクサルはいいました。
「ぼくもよくは知らないけど、人のうちの野菜畑をふみあらしたり、ビールをのんだりするんじゃないかな。」

わたしたちはながいこと、ニョロニョロたちが水平線のかなたへすすんでいくのを見ていました。わたしは、ニョロニョロたちのふしぎな旅についていって、そのわるいくらしというものを経験してみたい気持ちを、どうにもおさえることができませんでした。けれども、口にだしてはなにもいいませんでした。

きゅうに、ヨクサルがいいだしました。
「それで、あすはどうするね？　海にでようか。」
フレドリクソンは、海のオーケストラ号を見やったあと、きめかねたようにいいました。
「あいつは川船だからなあ。水車でうごくだけなんだ。帆もないし。」
「じゃ、なげ銭できめよう。」
ヨクサルはこういって、ロッドユールをよびました。
「おい、ロッドユール、きみのボタンのコレクションをもって、ちょっとこっちへおいでよ。」
ロッドユールは鉄砲玉のように、浅瀬からとんできて、ポケットの中のボタンを、岩の上にあ

（かれがとてもたのしくてたまらなくていることが、それを見るとわかりましたっけ。）

ちょうどそのとき、小船の大群が、海の上にあらわれたのです。その船たちは、まるでちょうのようにかろやかに、船のうつしたかげの上をすべっていきました。どの船にも小さな青白い生きものが、びっしりかたをつきあわせて乗りこんでいましたが、みんな、だまってすわって、海のむこうを見つめていました。

「あれがニョロニョロさ。電気じかけでうごくんだ。」

と、フレドリクソンがいいました。

「ニョロニョロ？」

と、わたしは、興奮してつぶやきました。あのれんじゅうは、ただよっているだけで、いつまでたっても、どこへもいきつくことはないというのです。

「かみなりのときは、あいつらにさわらないほうがいいよ。あいつらは、そのとき充電するんだ。さわろうものなら、いらくさにさわったみたいに、やけどするぜ。」

と、フレドリクソンがいいました。

「あいつたちは、わるいくらしをしているんだよ。」

と、ヨクサルはいいました。

「わるいくらしって、どういうのさ。」

いました。

海は鏡のようにたいらで、おだやかで、危険などはまるきりないように見えました。

わたしはききました。

「雲をすぐ近くで見たことがあるかい。」

「うん、本ではね。」

と、フレドリクソンがいいました。

「ぼくは空のクリームケーキみたいなものだと思うな。」

と、ヨクサルはいいました。

わたしたちは岩の上にならんですわりました。海草のにおいのほかにも、なにか気持ちのいい海のにおいがしていました。

わたしはたのしくてたまらなかったので、そのたのしさがすぎていってしまわないかなどと心配する気持ちさえおこしませんでした。

「たのしくない？」

と、わたしはききました。

「たのしいさ。」

と、フレドリクソンは口の中でいって、とてもはずかしそうな顔をしました。


Tove

あのころは、世界はとても大きくて、小さなものは、いまよりもっとかわいらしく、小さかったのです。わたしはそのほうがよっぽどすきです。わたしのいう意味がわかりますか。

ちょうどそのとき、わたしにとってはたいせつな考えが、心にうかびました。

（海にひきつけられるというのは、どうやらムーミン的な性格らしいぞ。）

ということです。わたしのむすこにもそれが遺伝しているのを見て、わたしはおおいにまんぞくしているんです。

しかし、読者のみなさん、浜べというものが、海よりもっとわたしたちをひきつけるということを、わすれないでくださいね。

ふつうのムーミンにとっては、海のまん中にいたんでは、水平線がちょっとばかり遠すぎます。わたしたちは、たいてい、てきとうに変化があって、気まぐれで、思いがけなくきばつなものが、いちばんすきなのです。つまり、ちょっぴり陸で、ちょっぴり水のある海岸とか、ちょっぴりくらく、ちょっぴりあかるい夕がたとか、ちょっぴりさむくて、ちょっぴりあたたかい春とかがね。

またもや夕がたになってきました。夕やみはのろのろとひろがって、なんだか昼間がねむりにつくのにじゅうぶんな時間を、やろうとしているみたいでした。まるで、ピンク色のあわだてクリームをちぎってまいたような小さな雲が、西の空いっぱいにとびちって、海にむかって流れて

船は岩だらけの浜べをまえに、いかりをおろしました。

いまでもわたしは、そっと口の中で、

「岩だらけの浜べをまえに、いかりをおろした。」

というだけで、せなかがぴんとはるような気がします。生まれてはじめて、わたしは、赤い岩や、すきとおったくらげを見ました。くらげは、ふしぎな小さな風船玉のように息をして、心臓は花のようなかたちをしていました。

わたしたちは、貝がらをひろいに、陸にあがりました。フレドリクソンは投錨地をたしかめるために上陸したのだといいはっていましたが、わたしはかれも内心では、貝に興味をもっていたのだと思います。

がけとがけのあいだに、とても小さいかくれた砂浜がありました。石ころがみんな、まりか、たまごみたいにまるくてすべすべしていることに気がつくと、ロッドユールはむちゅうでよろこびました。かれはいかにもものをあつめる人らしく、このうえない幸福感にあふれて、なべを頭からぬぐと、むちゅうで石をひろいはじめました。

すみきったみどり色の水の底で、砂はくま手でかいたような、こまかいもようをえがいています。岩の上には、ほかほかと日があたっていました。風もないで、もう水平線はきえていました。すべてがあかるいすきとおった光につつまれていたのです。

「きみはニョロニョロみたいなりくつをいうね。」
と、フレドリクソンがいいました。
「なんだって。」
と、わたしはききました。フレドリクソンのへんじはこうでした。
「ニョロニョロってやつは、ただ、ただよいつづけているんだ。いつまでたっても気のやすまることがないんだね。」
「そこがちがうんだよ。」
と、ヨクサルはまんぞくそうにいいました。
「ぼくの心はやすまりっぱなしだ。それにぼくは、ねるのがすきだ。ニョロニョロときたら、ねることがない。ねむれないんだ。話すこともできないしさ。あいつらは、いつも水平線にたどりつこうとしているんだ。」
「それで、だれかたどりつけたものはあるの。」
と、わたしは身ぶるいしながらききました。
「それは、だれも知らないねえ。」
ヨクサルはこういって、かたをすぼめました。

4　ペンキがあまったからというだけのことで、ものをぬりかえてはならない。（わるい例――ロッドユールのかん）
5　大きいからといって、危険とはかぎらない。（よい例――竜のエドワード）
6　小さいからといって、おくびょうとはかぎらない。（よい例――わたし）
7　くらがりで人をたすけるのはやめること。（わるい例――ヘムレンおばさん）
こういった意味の深い真実をあれこれ考えているうちに、船はもうひとつ小島をめぐったようでした。そのときとつぜん、わたしの心臓はのどまでとびあがって、そこにくっついてしまいました。わたしはさけびました。
「フレドリクソン。海だぞ。」
やっとこさ、なにかがおこったのです。わたしのまんまえには、青くきらきらと光る、冒険にみちた海がひろがっていたのでした。
「こりゃあ、大きすぎる。」
こういってロッドユールは、かんの中にもぐりこみましたが、ヨクサルのほうは、うっとりしていいました。
「なんて青いんだろう。まっすぐにすすもうよ。波にゆられてねむるだけで、どこへもいきつかなくったっていいじゃないか。」

「いずれどっかへいくだろうさ……。それともどこへもいかないのかもしれないぜ……。どっちでもいいさ。このままで、とてもたのしいじゃないか。」

そうですとも、たのしいということには反対しませんが、わたしはもっと遠いものにあこがれて、なにかあたらしいことがおこるのをまちこがれていたのです。なんでもいいのです、おこりさえすれば。ただ、ヘムレンさんだけはもうごめんでしたが。

わたしは、どこかわたしのいないところで、大冒険がつぎからつぎへとおこっているような気がして、しかたがありませんでした。またとくりかえされることのない、すばらしい冒険がですよ。わたしはいらいらして、とてもあせっていたのです。わたしはへさきのさきっぽにたつと、ぼんやりとまってはいられないぞというふうに、将来を見つめながら、いままでであったじぶんの体験について考えてみました。いままでのところ、気がついたことは七つありました。

1　ムーミンの子を産むときには、星の位置がいちばんいいときをえらぶように心がけ、その子が、この世へロマンチックなすがたで登場するようにはかってやること。（よい例――わたしの能力。わるい例――買い物用の紙ぶくろ）

2　いそがしいときには、だれもヘムレンについての話をきこうとはしない。（よい例――フレドリクソン。わるい例――やまあらし）

3　なにがあみにかかるかは、だれにもわからない。（よい例――フレドリクソンの気圧計）

「ごめん。それ、ぼくのおちどかしら？　だれかしんせつな人がいて、いっそのこと、おばさんをぱくりとたべてくれればいいなとねがったのは、ぼくだった。おばさんのことをかなしまないなんて、ぼくたち、わるいんじゃないか。」

こう、ロッドユールはまじめな顔でいいましたが、だれも答えてやりませんでした。

読者のみなさん、あなたたちなら、こういうむずかしいときには、どうしますか。

わたしは、いちどはおばさんをたすけたのです。ニブリングはもともと性質はおとなしいほうで、それにくらべれば、モランのほうがずっとわるいのです。ですから、おばさんにとっては、もしかしたら、すこしばかり気ばらしになっただけかもしれませんね。鼻が小さくなったら、おばさんは、かえってきれいになったかもしれませんよ。みなさん、そうは思いませんか。

とにかく太陽は、かんかんとてっていました。わたしたちは、デッキのそうじをしました。デッキはニブリングたちの吸盤のついた足のおかげで、すっかりぬるぬるになっていたのです。

それからおいしくいれたこいコーヒーを、ミルクなしで、たくさんのみました。海のオーケストラ号は、百の百倍もある小さな平らな島々のあいだを、でたりはいったりしながらすすみました。

「きりがないなあ。これからいったい、どこへいくんだろう。」

と、わたしがいうと、パイプをつめていたヨクサルがいいました。

じゅうたんにのせられて、つれていかれるのを見ました。おばさんはなきさけびながら、船べりをこえていってしまいました。

しずけさと平和がもどってきて、海のオーケストラ号はなにごともなかったように、パチャパチャと水をおしわけながら、さきへさきへとすすんでいきました。

「ところで、きみはたすけにいかないのか。」

と、ヨクサルがききました。

わたしの騎士精神は、すぐにおばさんをたすけにいけと命令しました。でも、わたしの非良心的な自然の本能のほうは、そんなことをしなくてもいいといっていました。わたしはまにあわなかったのだとかなんとか、そんなことを口の中でつぶやきました。たしかに、ほんとうにまにあわなかったのです。

フレドリクソンは、それをうたがっているようすでしたが、さいごにいいました。

「なるほどねえ。」

「おばさんは、いっちまったなあ。」

と、ヨクサルはいいました。

「つまんない話さ。」

と、わたしはいいました。

「おこってるのはあたしのほうよ。しっしっ、いっちまえったら。」

と、ヘムレンおばさんはどなりながら、いちばん近くにいたニブリングの頭を、こうもりがさでたたきました。

ニブリングたちはいっせいにヘムレンおばさんのほうに目をむけて、おばさんの鼻をにらんでいるのはたしかでした。そうやって、長い時間見つめたあと、あのおしころしたようなうなり声が、またもやわきおこりました。それからは、あっというまのできごとでした。何千というニブリングのむれが、船べりをのりこえておしよせたのです。

わたしたちは、ヘムレンおばさんがひっくりかえってこうもりがさをむちゃくちゃにふりまわしながら、ニブリングたちのせなかの、生き



「かんの中にはいっておいで。」

と、フレドリクソンは、ロッドユールにどなりました。

海のオーケストラ号は、ニブリングの大群の中でうごけなくなって、たちどまってしまいました。

ニブリングたちは、青い大きな目でわたしたちをじいっと見つめながら、ひげをふりふり、水の中で足ぶみしていました。

「どうか、すこし道をあけてください。」

と、フレドリクソンがいいました。

けれどもニブリングたちは、船のまわりにびっしりとひしめきあって、なかの何びきかは、足の吸盤をつかって船べりをはいあがりはじめました。

先頭のが船べりから顔をだしたときです。ちょうど操舵室のうしろからでてきたヘムレンおばさんは、こうさけびました。

「これはなにごとです。そこにいるのはなんというものなの。あたしたちの勉強のじゃまをするなんて、ぜったいにゆるしませんぞ。」

フレドリクソンは、あわてていいました。

「おどかしちゃだめだ。こいつらはおこるよ。」

音にちがいないと思いました。
フレドリクソンは、日よけテントから顔をだすと、不吉な声をあげました。
「ニブリングだ。」
たぶん、ここで説明がいるでしょうね。（かしこい人には、たいていのことはわかるものですが、念のために。）
わたしたちが日よけテントの下に、はいっているあいだに、海のオーケストラ号は河口の三角州のほうへゆっくりと流されていたのですが、そこがニブリングたちのすみかだったのです。
ニブリングは一ぴきでいるのをきらい、むらがって生活する動物です。川底の下に歯でトンネルをほり、そこにとても住みごこちのよい国づくりをしているんです。
ニブリングはだいたいおとなしい動物なのですが、目についたものはなんでもかじったり、かんだりしないではいられないくせをもっています。とくに、まだ見たことのないものにたいしては、なおさらそうなんです。
そのほかにも、かれらはこまった性質をもっています。あいての鼻が大きすぎると思うと、その鼻をかみきるんです。
ですから、おわかりでしょうが、わたしたちは、ニブリングがわたしたちをどうする気なのか、それが心配だったのです。

すると、ヨクサルがいいました。

「有名になるなんて、つまらないことさ。はじめはきっとおもしろいだろう。でも、だんだんなれっこになって、しまいにはいやになるだけだろうね。メリーゴーラウンドにのるようなものじゃないか。」

「メリーゴーラウンドってなんだい。」

と、わたしはききました。

「機械だよ。断面図で見ると、歯車がこういうふうに働くんだ。」

こういってフレドリクソンは、ペンとノートをとりだしました。かれの機械にたいする熱のいれかたは、いつもわたしをおどろかせました。機械は、フレドリクソンに魔法をかけるのです。わたしはむしろ、きみのわるいものに思いましたがね。

水車ぐらいならば、まだかわいらしいし、わかりやすいけれども、ジッパーとなると、もう機械の世界に近く、わたしから見れば、警戒心をおこさせるものでした。ヨクサルはズボンにジッパーをつけた人を知っていました。一度ジッパーがひっかかって、それっきりもう開かなくなったそうです。ああおそろしい。

ちょうど、わたしが、ジッパーの話をしようとしたとき、へんな音がきこえました。まるで遠くの鉄管の中からでてくるような、息をころしたようななにぶい音でした。おそろしいものがだす

「それもそうだな。」
と、つけくわえました。
　わたしたちは、じぶんでじぶんをあわれむように、おしだまってしまいました。

　それからすこしして、やっとわたしがいいました。
「ぼくたちがもっと大きくて、有名だったらなあ。そしたら、あんなおばさんなんか、やっつけてやれるんだ。」
「どうしたら有名になれるの。」
と、ヨクサルがききました。
「うん、そりゃかんたんさ。だれもまだやったことのないことをやるとか、ふるいことでも、あたらしい方法でやるとか……。」
と、わたしがいうと、ヨクサルはききかえしました。
「たとえば、どんなことさ。」
「空とぶ船。」
と、フレドリクソンは小声でいいましたが、その小さな目は、おどろくほどきらきらと光っていました。

ことを考えだすために、ちがいありません。
　わたしたちは、へさきの日よけテントの下へもぐりこんで、おたがいに、
「こまったなあ。」
といいあいました。
「ぼくは、しっぽにかけてちかうよ。もうけっして、くらがりで、だれかをたすけたりなんてことはしないってね。」
と、わたしはいいました。
「ひどいめにあうなあ。あのばばあ、なにをしでかすかわかりゃしない。いつかきっと、ぼくのパイプを海へなげすてて、ぼくをしごとにおいたてるにちがいない。どこまでいくか、わかったもんじゃないぞ。」
といったのは、ヨクサルでした。
「モランがもどってくるといいが——。」
と、ロッドユールは、それにのぞみをかけました。
「でなけりゃ、ほかのものでもいい。ヘムレンをたべてしまってくれるものがくると、ありがたいんだ。ごめん、わるいことをいってしまった。」
　フレドリクソンは、「ふん。」と、鼻(はな)をならしましたが、しばらくたって、

「ぼくは、しつけなんかしてもらいたくないね。ぼくは発明家だ。じぶんのすきなことをやるんだ。」

と、フレドリクソンははっきりといいました。

「ごめん、ぼくのパパもママも、なみだなんか流すもんですか。ふたりは大そうじのときに、いなくなったんだもの。」

と、ロッドユールがさけびました。

ヨクサルはパイプにたばこをつめながら、きどっていいました。

「へへん、ぼくは規則なんか大きらいさ。公園の番人を思いだしていやだね。」

ヘムレンおばさんは、長いことわたしたちを見つめていましたが、それからゆっくりといいました。

「これからは、わたしがあんたたちのせわをやきますからね。」

「いいよ、そんなことしてくれなくても。」

と、わたしたちは声をそろえてさけびました。

けれどもヘムレンおばさんは、かぶりをふって、

「これは、スーパー＝ヘムレンであるわたしの義務なのです。」

と、ひみつめいたことばをのこしてでていきました。たしかに、しつけとかなんとかいやらしい

のよ。それからあとで、ごほうびに教育あそびをしましょうね。とてもためになるわよ。」
　それから、おばさんはききました。
「きょうのごはんは、なんなの。」
「コーヒー。」
と、ロッドユールがいうと、ヘムレンおばさんはいいました。
「オートミールよ。コーヒーは、年をとってふるえがきてからのむものです。」
「ぼくはオートミールで死んだ人を知ってるよ。オートミールがのどにつまって、窒息したんだって。」
と、ヨクサルがつぶやきました。
　でも、ヘムレンおばさんはいいました。
「パパやママは、あんたたちがコーヒーをのむのを見たら、なんていうかしら。きっとなみだを流すわよ。なんというしつけでしょう。それともあんたたちは、まるっきりしつけをうけてないの？　でなけりゃ、生まれつきできがわるいのかねえ。」
「ぼくは、とくべつの星の下に生まれたんだ。ぼくは小さな貝がらの中で、絹につつまれて見つけられたんだよ。」
と、わたしはいいました。

　こう、スナフキンがいうと、
「わしのを着たさ。」
と、ムーミンパパはいって、たばこのけむりを大きく天じょうにむけてはきました。
　スニフは、あくびをしてからいいました。
「こうもりをつかまえに、いかないかい。」
「いこう。」
と、スナフキンがいいました。
「じゃ、またね、パパ。」
と、ムーミントロールがいいました。
　ムーミンパパは、ひとりベランダにのこりました。そしていっとき考えこみましたが、それからまたペンをとりあげて、じぶんの青春時代の物語を書きつづけるのでした。

　あくる朝、ヘムレンおばさんは、たいへんごきげんでした。
　六時に目をさますと、すぐにトランペットのようにどなりました。
「おはよう、おはよう、おはよう。さあ、はじめましょうかね。さいしょはちょっと、くつしたのつぎっこをしましょう。ほんとをいうと、あたし、あんたたちのたんすの引き出しをのぞいた

たり、鼻が黄ばんだり、しっぽがはげたりするって。」

「そんなことはないわよ。パパは一生たばこをのんでるわ。それでもふるえもはげもこないし、鼻だって黄ばみはしません。気持ちのいいものは、なんだっておなかにもいいのよ。」

ムーミンママはこういって、パパのパイプに火をつけると、まどをあけて、海からふいてくる夕風をいれました。それからママは、口ぶえをふきながら、コーヒーをいれに台所へいきました。

「進水式にロッドユールをわすれるなんて、だめだなあ。そのあと、その人のボタンのコレクションは、なんとか整理できたの。」

と、スニフが非難めかしくいうと、ムーミンパパはいいました。

「いやはや、なんども整理してたよ。やつはいくらでもボタンの新しい整理法を考えだすんだ。色でわけてみたり、大きさでわけてみたり、形や材料でわけてみたり、それからまた、すききらいだけでわけたこともあったね。」

「すてき。」

と、スニフはゆめ見るようにいいました。

「ぼくが心配してるのは、ぼくのパパがパジャマをゼリーだらけにしたことなんだ。いったいパパは、なにをきてねたんだろうな。」

「きみたちの年とったパパたちは、わき役にすぎないじゃないか。冒険にいっしょにつれていってもらっただけでまんぞくしなくちゃ。」

ムーミントロールはそうさけんで、ベランダのテーブルの下から、スニフをけりました。

スニフは鼻さきの毛をさかだてて、どなりました。

「おまえ、けったな。」

「あんたたち、なにしてるの。なにかわるいことでもあったの。」

と、ムーミントロールのママが、台所の戸口から顔をだしていいました。

「パパがじぶんの体験談を読んできかせてくれてるの。」

と、ムーミントロールが説明しました。とくに「じぶんの」というところに力をいれて。

「おもしろい？」

「とてもおもしろいよ。」

「よかったわね。ただね、あたしたちのことですけど、パパ、子どもたちにわるい印象をあたえそうなところは、読まないようにしてくださいよ。○○○……としておいてね。たばこ、もってきましょうか。」

すると、スニフがどなりました。

「たばこはのませないでよ。ヘムレンおばさんがいってるよ。たばこをのむと、足がふるえ

グのことがかたづくまでは、またのぼろうとはしませんでした。けれども、そのことについては、あらためて話すとしましょう。

「やれやれ、やっとここまできたわい。」

こう、ムーミントロールのパパは、ふだんとかわらない声でいって、思い出の記から目をはなしました。

「ねえパパ、ぼく、パパの話がきゅうにふしぎなほうへ走るのに、だんだんなれちゃったよ。あのなべは、ずいぶん大きかったんだろうな。……本ができあがったら、ぼくたち、お金持ちになれる?」

と、ムーミントロールがいいました。

「百万長者だよ。」

と、ムーミンパパは熱っぽくいいました。

「そんなら山わけにしよう。ぼくのパパのロッドユールも主人公のひとりだものね。」

と、スニフがいうと、スナフキンもいいました。

「ぼくは、ずうっとヨクサルが主人公だと思っていたな。考えてみてくれ。いまはじめてぼくは、なんていいパパをもっていたか、わかったんだ。ぼくはパパにそっくりなんだぜ。」

「そこにいる人、おだまり。だいたいたばこをすうには、あんたはまだまだわかすぎるよ。ミルクをのんでいればいいんです。そのほうがからだのためなんだ。そうすれば、足がふるえたり、鼻さきが黄ばんだり、しっぽがはげたりすることもないさ。あんたたち、あたしをたすけたのはあんたたちのためにも、ほんとうにしあわせだったよ。さあ、これからは船の中もきちんとなるからね。」

「気圧計を見なくちゃならん。」

　フレドリクソンは早口にいって、操舵室の中にさっとはいって、ドアにかぎをかけてしまいました。

　ところで気圧計は、びっくりぎょうてんして、四十度もさがってしまい、ニブリン



ヘムレンさんはぼうしをかぶりなおすと、おうようにいいました。
「だけどあんたは、およぐことはじょうずね。」
「あなたがたは、知りあいなんですか。」
と、フレドリクソンが、おずおずとききました。
「とんでもない！」
と、ヘムレンさんはいいました。
「あたしは、ヘムル一族のおばですよ。デッキいちめんにゼリーをまきちらしたのはだれなの。それ、そこの耳の大きいの、あたしにぞうきんをおくれ。ふいてあげるから。」
フレドリクソン（耳の大きいの、というのは、かれのことだったのです）が、あわててヨクサルのパジャマをもってくると、ヘムレンおばさんは、それでデッキのぞうきんがけをはじめながらいいました。
「あたしゃ、おこっているんだよ。そういうときには、そうじをするにかぎるの。」
わたしたちは、うしろにだまってたっていました。
「わるい予感がするって、ぼく、きみたちにいったろ。」
と、ヨクサルがつぶやきました。
するとヘムレンおばさんは、みっともない鼻を、わたしたちのほうへむけていいました。

その瞬間が、わたしの苦労の多かった青春時代の中でも、いちばんさんたんたるものであったことに、まちがいありません。なぜって、わたしの目のまえのびしょぬれのデッキの上に、ぺったりとすわっていたのは、ほかでもないヘムレンおばさんだったからです。

　わたしは、ヘムレンさんをたすけてしまったのでした。

　わたしはあわてて、思わずしっぽを四十五度の角度にたててしまいましたが、じぶんが自由なムーミンであることを思いだして、気がるにいいました。

「オッス、思いがけないじゃないか、まったく。こんなことがおこるとはなあ。」

「なにがおこるんです?」

と、ヘムレンさんはいって、こうもりがさで、肉シチューをじゃくりました。

　わたしは、はきだすようにいいました。

「ぼくが、おばさんをたすけるまわりあわせになったとはなあ。おばさんは、ぼくにたすけられたというわけなんだよ。ところでおばさん、ぼくのおわかれの手紙をうけとった?」

　ヘムレンさんは、ばかていねいにいいました。

「あたしは、あんたのおばさんじゃございません。手紙なんかうけとりませんよ。あんた、切手をはらなかったのじゃない?　それともまちがったあて名を書いたかな?　ポストにいれるのをわすれたんじゃない?　でなけりゃ、あんたは字がまるっきり書けないのじゃないかしら。」

の狩りの歌はもうきえて、熱っぽい息づかいがだんだん近づいてきました……。

「なべにとびこめ。」

と、わたしはその不幸なえじきにむかって、さけびました。

あいてがひととびでなべの中にとびこんできたので、なべは取っ手のところまでしずみました。なにものかが、くらやみの中でわたしのしっぽをつかもうとしたので、わたしはしっぽをさっとひきました。

「ふふん、かがやかしい手がらだ。ひとりでやってのけたんだぞ。」

わたしは、なかまが息をつめてまってくれる海のオーケストラ号めがけて、大いばりでひきあげました。

たすけたのはおもいもの、とてもおもいものでした。

わたしは、力いっぱいおよぎました。

しっぽをすばやく回転させたり、おなかをリズミカルにくねらせたりして、ムーミン風のように水の上をすすんでいきました。船にひきあげられて、デッキにころげこんでから、わたしはなべをひっくりかえして、わたしがたすけたものをひっぱりだしました。そのあいだ、モランはひとりぼっちで、おなかをすかせ、はらをたてて、ほえていました。（モランはおよげないのです。）

フレドリクソンは、わたしがだれをたすけたのか見ようとして、ランプをつけました。



「まにあわないよ。」

しかし、わたしは決心しました。わたしは船べりにのっかって、

「冒険家の墓には、花をかざる必要はない。しかし、ないているヘムレンふたりを彫ったみかげ石の記念碑を、たててくれたまえ。」

というなり、くらい水の中にとびこみました。うかびあがると、ロッドユールのなべの底にボイーンとぶつかりましたが、おちつきはらって中身の肉シチューをなげだして、いなずまのように陸をめがけておよぎました。鼻さきでなべをまえにおしながら、わたしはどなりました。

「元気をだせ、ムーミンがきたぞ。モランが手あたりしだいにすきなものをたべるなんて、ゆるせるものか。」

石が、山の斜面でガラガラ鳴りました。モラン

と、フレドリクソンがいいました。

モランはけわしい山の上で、えものをおいかけていました。

モランのなき声は、わたしがいままできいた声のうちで、いちばんさびしいものでした。遠くなったかと思うと、また近くなり、そしてきえました。……モランがだまると、なおさらきみわるくなりました。のぼってきた月の光で、地面の上をとんでいくモランの灰色のかげが見えたように、想像してしまうからです。

デッキの上はさむくなりました。

「ごらんよ。」

と、ヨクサルがいいました。

なにものかが、フルスピードで岸のほうへ走りおりてきて、水ぎわをいったりきたり、うろつきはじめました。

「モランのえものだ。かわいそうに、あいつは生きたままたべられちゃうぞ。」

と、フレドリクソンがしずんだ声でいいました。

「ぼくの目のまえで、そんなことをさせてたまるもんか。ぼくはあいつをたすけてやる。」

わたしはどなりましたが、フレドリクソンはいいました。

「だまって……またきこえた……。」
と、ヨクサルがいいました。
わたしは、耳をぴんとたててみましたが、よわい陸風が海のオーケストラ号のマストのつなをうならせるのがきこえるだけでした。
「そんなの、そら耳さ、さあ中へはいっておいでよ。ランプをつけよう。」
と、わたしがいったとき、
「ゼリーが見つかったよ。」
といいながら、ロッドユールが深いはちをもって、かんからとびだしてきました。
そのとき、夜のしずけさをやぶって、さびしそうなさけび声がきこえました。それはなげくような、おどかすような、せすじをぞうっとさせる声でした。ロッドユールは「きゃっ。」とさけんで、深いはちをデッキの上におとしました。
「あれはモランだ。夜の狩りの歌をうたっているんだ。」
と、フレドリクソンがいいました。
「あいつ、およげる?」
と、わたしがきくと、
「知らないよ。」

「ぼくはこの入り江が気にくわん。わるい予感がする。」
と、ヨクサルがいうと、フレドリクソンは、
「予感だって！　おいっ子、いかりをおろしな。」
と、なんともいえない声をだしました。
「はい、いますぐに。」
と、ロッドユールはさけんで、船の上から大きななべをなげました。
「いまのは、ぼくたちの夕飯だったんじゃない。」
と、わたしがききますと、もうしわけなさそうにロッドユールがいいました。
「しまった。ごめんごめん。いそいでいると、まちがえやすいものだね。みなさんには、かわりにゼリーをつくりますよ。――見つかりさえしたらね。」
　このできごとは、いかにもロッドユールらしいことでした。
　ヨクサルは船べりにたって、目を光らせて陸を見つめていました。夕やみはまもなく山の尾根をつつむところでした。尾根は、水平線にむかって、うちよせるあら波のようにかさなっていました。
「どうだい。きみの予感は……。」
と、わたしがききますと、

りませんし、ロッドユールが考えることは、かんから遠くないまわりのことだけにかぎられていましたから。

わたしたちは、そのかんを前デッキにおいて、ゆっくりと日光で、かわかしはじめました。でも、ロッドユール自身をきれいにすることはできないで、うすいピンク色がいつまでものこりましたっけ。

船は、てっぺんにわたしのつくった金色のかざりをつけて、ゆっくりと水の音をさせながらすすんでいきました。船の上には、もちろん金色のペンキがつんでありました。こんなたいせつなものを用意していないとしたら、あきれますよね。

わたしはたいてい船室の中にいて、岸べをいろんなめずらしいものがうろついているのを見たり、気圧計をちょっとたたいてみたり、操舵室をゆきつもどりつして考えごとをしたりしました。

ことに、こんな船に冒険家のひとりとして乗り組んでいるわたしのすがたを、もしヘムレンさんが見たら、さぞびっくりするだろうなと想像するのは、たのしいことでした。はっきりいって、「いいきみだ。」というところです。

ある夕がた、わたしたちは、深いさびしい入り江にはいりました。

第3章



わたしのさいしょの英雄的行為と、それからそのあと、ニブリングとのショッキングなおそろしい出会いと、わたしの考えをすこしのべます。



したしみやすいみどりの森は、きえていきました。すべてのものは、きいたこともないほど大きくなり、見たこともない動物たちが、きりたった岸にそって、うなったり鼻をならしたりしてうろついていました。海のオーケストラ号のかじとりをしていたのが、わたしとフレドリクソンのような責任感のつよい男だったことは、さいわいでした。なぜって、ヨクサルはなにごともまじめにや

コーヒーかんをつかみました。かんはまだペンキでべとべとしていて、かなりの重さを感じました。わたしたちがかんを船の上にひきあげるとき、
「デッキに気をつけろ。」
と、フレドリクソンはどなりました。それから、ロッドユールにむかって、いいました。
「どうしたい、おいっ子。」
「ああ、気ちがいになりそうだ。考えてもごらんよ。波が荷物のどまん中へおしよせて、なにもかもめちゃくちゃさ。ぼく、いちばん上等のまどのかんぬきをなくした。たぶんパイプとおしも。ぼくの神経はすっかりめちゃくちゃだ。ぼくの持ちものもめちゃくちゃだ。いやになっちまうな。」
しかし、そのうちにロッドユールはすっかりきげんをなおして、あたらしいやりかたで、またコレクションを整理しはじめました。海のオーケストラ号は、しずかに水しぶきをあげながら、水かきをまわして、すべるように川をすすんでいきました。わたしはフレドリクソンのそばにすわって、かれにいいました。
「もうけっして、竜のエドワードにあう用事がないようにねがいたいね。あいつは、ぼくたちのことをひどくおこっていると思わないかい。」
「たぶんね。」
と、フレドリクソンは答えました。

「おや、あれはなんのかんだろうな。」
と、わたしがいいますと、ヨクサルがへんじしました。
「あれを見ていると、なにかを思いだすよ。そうだ、中にロッドユールがいてもふしぎはないな。」
わたしはフレドリクソンのほうへむきなおっていいました。
「きみは、おいのことをわすれていたね。」
「そうだ、そうだ。こいつはどうかしてたぞ。」
と、フレドリクソンが答えました。
ロッドユールの赤いびしょぬれの顔が、かんかからつきでているのが見えました。かれは、手と歯でもって、もがいています。あんまりもがいたので、じぶんのスカーフで、じぶんの首をしめそうになっていました。
ヨクサルとわたしは、船べりからのりだして、



わたしたちのしっぽが、船べりをこすかこさないうちに、白いあわがシューシュー音をたてて、おしよせてきて、船の外はいちめんに水になってしまいました。海のオーケストラ号は、じっとたったまま、おそろしさにミシミシ鳴り、うんうんうなりました。けれども、つぎの瞬間、さすがの船もこけからはなれてうきあがり、森の木のあいだをすすみだしました。水かきがうごきだし、プロペラもなめらかに回転をはじめました。——わたしたちの歯車が働くようになったのです。しかもどうどうとね。フレドリクソンは、しっかりかじをにぎり、木のみきのあいだをぬって、わたしたちを安全にみちびきました。

　くらべるものもないほど、すばらしい進水式になったのです。花や葉っぱがデッキの上に雨のようにふりかかって、船はお祭りみたいにかざられました。海のオーケストラ号は勝ちほこったように、さいごに一とびはねて川にはいりました。それから船は、水しぶきをあげながら川の船みちをまっすぐにすすみました。

「地面を見てごらんよ。」

と、フレドリクソンがいいました。（かれはあの地面の上を走ってみたかったのです。そうすれば、ちょうつがいの組み立てをためすことができますからね。）わたしは川の上をずっと見わたしましたが、すこしはなれたところを、ゆらゆらういている赤いかんのほかには、なにも見えませんでした。



フレドリクソンは、ひとこと、
「それ走れ！」
と、小声でいいました。そこで、わたしたちは走りだしました。一生のうちに、あんなにはやく走ったことはありません。走りながら、ずっとわたしは、竜のエドワードがどんなふうに、あのでっかいせなかをとがった岩のあいだにしずめるか想像してみました。それから、やつのひどいいかり。そしてまちがいなしにあいつがおこす大洪水。みんなでかくて、あぶないことばかりです。くわばら、くわばら……。

とつぜん、うしろであがったほえ声！　それから、おそろしいドカンという音！　川の波が森に突進してきました……。
「乗船！」
と、フレドリクソンがさけびました。わたしたちは、川の波にかかとまでおいつかれながら、造船所にあわててとびこんで、船にとびのりました。とたんに、デッキでねむっていたヨクサルにつまずきました。

そこでかれは、ありったけの声をはりあげました。

「おうい、エドワードくん、上にいるんだね。下にいるのはフレドリクソンだよ。きょうはどこで水あびするんだい。」

すると、どこか上のほうで、かみなりがへんじしました。

「海だよ。いつものようにな。しらみくん。」

「川であびろよ、底は砂だよ。きれいでやわらかいよ。」

と、フレドリクソンはどなりました。

「うそだ。だますんだろ。ねずみの子だって知っているよ。モラン川には石がごろごろしてるってことぐらいはな。」

と、竜のエドワードはいいました。

「ちがう、川底は砂だよ。」

と、フレドリクソンがどなりかえしました。竜はいっとき、ぶつぶついっていましたが、さいごにいいました。

「ようし、おまえのモラン川で、水あびしてやろう。どけ、どけ。なんべんも葬式をだすようなことはいやだからね。もしおまえが、おれにうそをついたら、おまえの命はないぞ。しらみのたまごめ、おれの足がどんなに敏感だか知ってるだろ。せなかはいうまでもないさ。」

「おとといは、豆スープだったな。するときょうは水あびの土曜日だ。よし、いそげ。」（北ヨーロッパの習慣で、木曜にはかならず豆のスープをのみます。）

と、フレドリクソンはいいました。

「こわい？　その竜って？」

川岸におりていきながら、わたしは小さい声できいてみました。

「こわいとも。でも、あいつは害はしないよ。ただときにまちがってふみつぶすことはあるが、そうすると、そのあと一週間はないて、葬式代もはらうんだとさ。」

これが、フレドリクソンのへんじでした。

「こまったときには、ねこの手だってかりるさ。」

わたしは小声でいいましたが、元気はでませんでした。愛する読者のみなさん、ひとつうかがいますが、こわくないときに元気をだすのは、むずかしいことですか。

とつぜん、フレドリクソンはたちどまって、いいました。

「いた、いた。」

「どこに。あの人は、あの塔の中にでも住んでるの。」

と、わたしがききますと、フレドリクソンが、説明してくれました。

「ありゃ、あいつの足だよ。だまっておいで。いま、ぼくがどなってみるからな。」

「力をおとしているんではないよ。ぼくは考えているんだ。船がどっかりすわりこんでいて、川まではもっていけない。そんなら、川を船のところまでもってこなくちゃね。どうやってもってくるか。あたらしい川すじをつくるんだ。どういうふうに？　ダムをつくる。どういうふうに？　石をつむ……。」
と、わたしもてつだうつもりでつづけました。
「どういうふうに？」
「そうだ。」
とつぜんフレドリクソンは、わたしがとびあがったほどの大声でどなりました。
「竜のエドワードだ。あいつが川にすわってくれればいいんだ。」
「その人のしっぽは、これぐらい大きいの。」
と、わたしは両手を大きくひろげてききました。
「もっと、大きいさ。」
と、フレドリクソンは、みじかく答えたかと思うと、わたしにたずねました。
「きみ、こよみをもっているかい。」
「いや。」
と、わたしはへんじをしながら、だんだん興奮してきました。

ロッドユールのいいぶんはこうでした。
「あの赤ペンキをブリキにぬったもんで、かわかないんです。ごめんなさい。たべものにも、ベッドにも、ひげにも、ペンキがくっついて……ぼく、気がちがいそうだ。」
「気ちがいになんかなってくれるなよ。さあ、荷づくりだ。」
と、フレドリクソンはいいました。
「おお、そんな大旅行なの。それじゃ、ようく考えなくちゃね。……あたらしい生活だもの。」
こうロッドユールはいいのこして、ペンキのにおいをまきちらしながら、走っていきました。
わたしにいわせれば、進水式は、頭にえがいていたものとは、まったくべつのものになったのです。

ところで、海のオーケストラ号は、そのまま、どっかりとすわりこんでいました。ゴムの輪は地面にふかくめりこみ、一センチたりともうごきませんでした。わたしたちは、造船所ぜんたい（それはあき地のことです）をほりさげましたが、なんのたしにもなりませんでした。フレドリクソンは、頭を前足のあいだにうずめて、ぺったりすわりこんでしまいました。
「ねえ、きみ、そんなに力をおとさないで。」
と、わたしはいいました。フレドリクソンのへんじはこうでした。

の見かたであって、これはスナフキンに遺伝していました。そこでスナフキンも、それからずっと、おなじなまけ星のあとをおっているのです。

スナフキンのこのふしぎなパパは、ほんとうはじぶんでしなくてはならないことでも、けっしてしようとはしませんでした。（わたしがもしこの思い出の記で、かれのことにふれなかったら、かれは後世にのこらなかったのですよ。）そんなことは、まあいいとして……ヨクサルは、またあくびをしていいました。

「いつ出発だい。ふっへっ。」

「いっしょにいくかい。」

と、わたしはききました。

「もちろんさ。」

と、ヨクサルは答えました。

するとロッドユールがいいました。

「みなさんがゆるしてくれるなら、ぼくもおなじことを考えているんです。……ぼくはもうコーヒーかんの中には住めなくなったもの。」

「ふうん、そうかい。」

と、わたしはいいました。

車にのせられ、日の光に赤く光っていました。（やわらかい砂浜の上では、ゴム輪のたすけをかりるはずでした。）

フレドリクソンは、金すじいりの船長のぼうしを手にいれました。かれは船の下までもぐっていって、いかにも心配そうでした。わたしはかれのつぶやくのをききました。

「船はどっかりすわりこんでいる。どうもそうとしか思えない。こんなことしていたら、月がでてしまうぞ。」

フレドリクソンが、海のオーケストラ号のまわりをはいずりながら、いつもとちがってやけにおしゃべりだったのは、ひどくおちつきをなくしているしょうこでした。

ヨクサルはあくびをしながらいいました。

「やれやれ、それじゃまた、まつことになるんだな。ふっへっ。きみたちったら、なんてこったい。朝から晩まで、もようがえとひっこしにてんてこまいか。こんなざまでは、あぶないな。働いて、ほねおって、それがなにになるのさ。考えると、気おちがするだけだよ。ぼくの親類に、ひげがたれさがるほど三角法を勉強したやつがいるが、ならいおわるやいなや、モランがきてたべてしまった。うん、それからあと、やつはモランのおなかの中にいるよ。なんというりこうものだろう。」

ヨクサルのいったことは、ものごとはつきつめて考えないほうがいいという、かれ一流のもの

がでてくるんだ。ペンはどこだね。」
「ここにあるよ。ヨクサルのことを、もっと書いてね。なにも書きおとさないで。」
こういったのは、スナフキンでした。
ムーミンパパはうなずいて、ノートを草の上にひろげて、さきを書きました。

そのころ、わたしははじめて、大工しごとをする気になりました。このとくべつな才能は、もって生まれてきたものにちがいありません。わたしのこの才能は、いわば前足にもっていたのです。

この天才的才能で、わたしがさいしょにこしらえた試作品は、たいへんつつましいものでした。わたしは造船所で、手ごろの木のきれっぱしをひろってくると、ナイフを見つけて、みごとなかざり玉をほりました。それが、のちに船の操舵室の屋根のかざりになったのです。このかざり玉は、たまねぎの形で、表面にはいちめんにかざり用にしあげた、さかなのうろこをはりつけました。

フレドリクソンは、残念なことに、こんなにたいせつな船の部分品のことは、あまりいいませんでした。あの人は、進水式以外のことには、考えがおよばなかったのです。

海のオーケストラ号の出発準備は完了しました。すばらしいながめでした。船体はゴムの四輪

「ときには、でたらめだってやるよ。それに、ロッドユールには、あたりまえに話させているじゃないの。」
と、むすこはやりかえしました。
「やれやれ、それがもちあじというものさ。おまけに、事実について話をするのと、その事実がすきかどうかというのとでは、たいへんなちがいなんだよ。それからまた、考えたり書いたりするのと、ただおしゃべりをするのとでは、大ちがい。しかも、いまここでは、みんな感じだけをたよりにしゃべっているのだから、なおさらちがうさ……と、わしは思うね。」
こういって、パパはだまりこみ、気をわるくしてノートをパタリととじると、こうききました。
「おまえたちは、わしがふだんつかわれていない不自然なことばでも、つかったというのかい。」
「そんなことありません。いままでのところは、それでいいですよ。パパのこころづもりも、だいたいわかったしさ。パパ、もっとさきまで書いてあるの。」
と、ムーミントロールはいいました。
パパのへんじはこうでした。
「まださ。だけど、これからおもしろくなるんだよ。まもなく、竜のエドワードと、モラン

と、スナフキンがいいました。
「パパたちはいまどうしているか、ぜんぜんわからないのだよ。」
と、ムーミンパパは、あいまいな身ぶりをしながら、説明しました。
「パパたちは、きたと思ったら、いってしまったんだよ……でもとにかく、わしはきみたちのパパのことを書いてやったよ。これであの人たちも、のちの世にのこるというわけさ。」
スニフは、鼻をならしました。
スナフキンは考えながら、またいいました。
「ヨクサルは公園の番人がすきじゃなかったんだね。そこのところを考えないと……。」
みんなは草の上に足をなげだし、ひなたで目をつぶりました。気持ちがよくなって、ねむけがさしてきました。
ムーミントロールがいいました。
「パパ、そのころはみんな、そんなへんなしゃべりかたをしたの？　おどろいたなあ。でもぼくが、心の中でどんなによろこんでいるかってことも、考えてよ。」
パパは、すこしおこっていいました。
「それはちっともへんなしゃべりかたじゃないんだよ。いやしくも、物を書くほどの人が、でたらめをいうと思うかい。」

だ。もちろん、あちこちにいくらか誇張したところはあるがね……。」
と、ムーミンパパはいいました。
「ぼく、ふしぎに思うんだ。パパのコレクションは、どこへいってしまったの。へんだなあ。」
といったのは、スニフでした。
「どのコレクションさ。」
と、ムーミンパパがいいました。
「ぼくのパパのボタンのコレクションだよ。ロッドユールは、ぼくのパパだったはずじゃなかった？」
「そうだとも。」
と、ムーミンパパはいいました。
「ね。だからぼくは、パパの高価なコレクションがどこにいったか、ふしぎに思ったのさ。あれは、ぼくが相続するものですからね。」
と、スニフが、きっぱりといいました。
「ふっへっ。これは、ぼくのパパのくせだったなあ。ところでおじさん。ヨクサルのことは、なぜこれっぽっちしか書かないの。ヨクサルはいまどこにいるの。」

「安心しろ。まあよかろう。」
ロッドユールは、ほっと安心して、残ったペンキでじぶんのうちをぬることにして、いそいでいってしまいました。
夕がた、フレドリクソンは、小川にしかけたあみをひきあげました。あみにかかった、らしん盤の箱を見たときの、わたしたちのおどろきといったら……。その箱には、気圧計がはいっていたのですよ。わたしは、このすばらしいふしぎな発見に、興奮してしまいました。

パパは、ノートをほうりだしました。そしてなんとかいってもらいたくて、きき手を見わたしながら、たずねました。
「えっ、どうかね。」
「とてもいい本になると思うな。」
と、ムーミントロールがまじめくさっていいました。かれは、ライラックの木かげに、あおむけになって、花ばちを見ていたのです。あたたかくて、風はまるでありませんでした。
「だけど、ぜんぶおじさんの頭でつくった、つくりごとじゃないの。」
と、スニフがききました。
「そうじゃないさ。そのときほんとうにおこった事実だよ。すみからすみまで、事実なん



かれは、波がたにかかれている、きっすい線を見て、「ふん。」といいました。それから、船の名まえをながめて、「ふんふん。」といいました。そこで、ロッドユールがいったのです。

「字がまちがっているの？　なんとかいってよ。さもないとぼくまたなきだすよ。ごめんなさい。海のオーケストラって、なんてむずかしいことばだろう。」

「うーみーのーオーケースートーラー。」

と、フレドリクソンは読みました。かれはちょっと思案していましたが、いいました。

と、フレドリクソンはとつぜんどなりました。かれは、紙とペンをとりだすと、プロペラと水かきをまわすために、その歯車をどこにとりつけたらよいか、わたしたちにしめしてくれました。

（みなさんも、かれの説明がわかると、いいんですが。）

そのとき、ロッドユールがさけびました。

「おお、それほんとう。ぼくの歯車を、おじさんの発明に使ってもらえるなんて。」

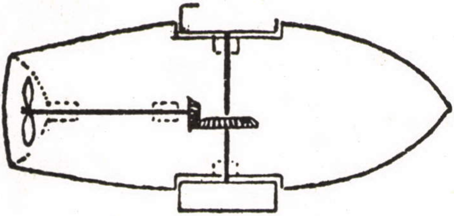
わたしたちは、とてもゆかいな気分で、食事をおえました。

フレドリクソンのおいは、このできごとで元気をとりもどして、いちばん大きな前かけをかけると、一分間でもおしむように、海のオーケストラ号を赤くぬりはじめました。かれはせいいっぱいでぬりました。ですから、船が赤くなったばかりでなく、地面も、はしばみの葉も、ほとんど赤くなってしまい、ロッドユール自身も赤くなりました。わたしは、このときのロッドユールほど赤いものを、見たことがありませんね。

それができあがったころ、フレドリクソンが見にやってきました。ロッドユールはいいました。

「きれいじゃない？　うんと気をつけてぬったんだよ。ここのところなんか、ぼく、地面にねころんでぬったんだ。」

フレドリクソンは、まっかになったおいをながめて、そのことをみとめたようでした。しかし



「そんなら、ぼくのコレクションのなにかにちがいない……はきだしてよ。はきだしなさいよ。」

フレドリクソンは、黒いぎざぎざのものを二つ、かんのふたにはきだしました。

「ごめんなさい、わるかったなあ。これはぼくの歯車だ。おじさん、のみこまなくてよかったねえ。」

と、おいはさけびました。

けれども、フレドリクソンは、へんじもしないで、長いこと、ひたいにしわをよせて、ぼんやり空を見つめていました。すると、ロッドユールはなきだしてしまいました。

「おいっ子をゆるしておやりよ。こんなにわるがっているんだもの。」

と、ヨクサルがいいました。

「ゆるせって？　さかさまだよ。」



しょうぎ盤の上においてありました。

「ぼくは、けさ、とてもおいしいプディングをつくったんですよ。でも、もうなくなっちゃいました。これは、インスタント＝オムレツというやつです。」

と、ロッドユールが説明しました。

わたしたちは、オムレツをかんのふたにとりわけました。たべはじめると、ロッドユールは、心配そうにわたしたちを見つめていました。フレドリクソンは、長いこと、だれの目にも見えるほど、ほねをおってなにかをかんでいましたが、みょうな顔をして、とうとういいました。

「おいっ子！　なにかかたいものがあるな。」

「かたいものですって。」

と、ロッドユールは、さけびました。

とたんにヨクサルは目をさまして、まるで、ねこのようにからだをのばして、「ううん。」と、あくびをしました。
「ごめんね、でもきみは、フレドリクソンの船の中で、いったいなにをするつもり？　立入禁止と書いてあるのを、見なかったのかい。」
と、ロッドユールは、おどすようにいいました。
「見たよ、だからこそはいったのさ。」
と、ヨクサルは、やさしい声でへんじしました。
これで、ヨクサルが、なぜ、そこにねていたのか、はっきりわかりました。かれを、ねぼけねこのようなだらしなさから、目をさまさせる方法は、ただひとつしかなかったのです。それは、なにかをしてはいけないという禁止のふだのようなものを、はっておくことなのです。かぎのかかっているドアとか、そそりたっている城壁とかね。
また、ヨクサルが、公園の番人がひげをふりふり、なにかいいだそうとするのにであいでもしようものなら、なにがはじまるかわかったものではありません。そんなことでもなければ、かれは、ねむるか、たべるか、うつらうつらしているかでした。いまわたしが書いている時点では、ヨクサルの頭は、たべることでいっぱいだったのです。
わたしたちは、ロッドユールのかんにもどりました。そこには、ひえたオムレツが、きたない

わたしは、この「家」をながめて、考えてみました。この「家」は、わたしのこのみからいえば、あまりにも実用的で、おもむきがありません。まどわくなども、もっと空想的にできそうなものです。船長ブリッジには、細手の手すりがほしいし、手すりには、のこぎりぼりの海のモチーフなどがあいましょう。屋根には金色にぬった玉のかざりをつけなくちゃ……と、こんなことを思いました。

わたしは、操舵室のドアをあけました。ところが、ゆかのまん中に、だれかが顔にぼうしをのせたまま、ころがってねむっているではありませんか。

「これ、きみの友だち？」

と、わたしはおどろいてたずねました。フレドリクソンは、のぞきこんでみていいました。

「ヨクサルだ。」

わたしは、ヨクサルをよく見ました。かれの目はうす茶色で、とても、ねむそうでしたが、やさしくて、したしみやすい印象をうけました。ヨクサルの古くさいぼうしには、しおれた花がつけてありました。かれは、もう長いこと、からだをあらっていないようでした。たぶん、あらおうともしなかったのでしょう。

このとき、ロッドユールが走ってきて、さけびました。

「食事ができましたよ。」

ひげをふるわせながら、とんでいきました。

　わたしは、船を見ながらいいました。

「きみは、なんでもできるんだね。」

　するとフレドリクソンが、しゃべりだしました。かれがこんなにたくさん、またこんなにいちどきにしゃべったことは、船の建造のことだけでした。かれは紙とペンをとりだして、水かきがどうまわるかかいてみせました。わたしはあんまりよくはわかりませんでしたが、かれをがっかりさせないように、気をつかいました。

　しかし、プロペラがうごくらしいことだけは、だいたいわかったような気がしました。

　わたしは、努力したのですが、問題点にふかくはいっていくことは、できませんでした。――そう、わたしの才能もついていけない方面があるんですよ。その一つは、機械の勉強です。

　船のまん中に、とんがり屋根の小さな家が、たかだかとたっているのが、おおいにわたしの興味をひきました。

「きみは、あそこの中に住んでいるの。」

と、わたしはききました。この小さな家は、ムーミントロールの夏の家にそっくりでした。

「あれは操舵室さ。」

と、フレドリクソンは、たしかに、いやいやそうに答えたのでした。

しかしかれは、じぶんの船のことは、だれにも話したことがなかったのです。ロッドユールにさえもです。きゅうにわたしは、ゆううつになりました。そしてひくい声で、きいてみました。

「この船は、なんという名まえなの。」

「海のオーケストラ号さ。ぼくの死んだにいさんの詩集の名まえだよ。名まえの色は紺にしような。」

と、フレドリクソンは答えました。

「ぼくにぬらせてもらえる？　ぼくにさ。それ、ほんと？　おじさん、しっぽにかけてちかえる？　ごめんね！　でも、ぜんたいをぼくがぬってもいいの？　おじさん、赤がすき？」

と、ロッドユールはささやくと、フレドリクソンは、うなずいていいました。

「きっすい線は赤にしな。」

「ぼくは、赤ペンキの大かんをもっていますよ。それから紺の小かんも……わあい、うれしいなあ、うちへ帰って、みんなの朝飯をつくろう。それからかんの中をかたづけて……。」

そういって、フレドリクソンのおいは興奮に



フレドリクソンのにいさん

て、ベニヤ板の箱をしばりました。

それから、わたしたちはまた、さきへ歩いていきました。フレドリクソンの目の中には、たのしい計画がいっぱいつまっているのが、わたしにはよくわかりました。かれはさきへたって歩いていましたが、はしばみのしげみのまえでふりかえると、まじめな顔でわたしたちを見つめました。

「おじさんのふいうちって、この中なの。」

と、ロッドユールはむきになってききました。フレドリクソンは、うなずきました。

わたしたちが、大まじめで、はしばみのしげみの中をはっていくと、あき地へでました。あき地のまん中には、船が一そうおいてありました。大きな船がですよ。

それはフレドリクソンの体格のように、幅ひろく、どっしりして、いかにも安全そうに見えました。船については、わたしはなにひとつ知識がありませんけれど、なんともいえない気づよいものを感じました。いわば、船のたましいともいったものが、わたしの冒険心をふるいたたせ、自由のにおいをかぎとらせたのです。

わたしは、じぶん自身のばあいとひきくらべて、フレドリクソンがこの船をまずどのようにゆめに見、どう計画して、どう設計図をかいたか、それから、船をつくるためにまい朝あき地にでてきたこと、思いがけないほど長く時間がかかったことなどを、心の中で思いうかべてみました。

「かけるかって？」

ロッドユールは大声をあげました。

「ぼくは一度、いとこたちぜんぶのために、テーブルの着席カードをかいたことがあるんだぜ。一まいずつちがったカードを。お祝い用の上等な絵が必要なの？　それともタイトルかな？　ごめん、でも、なにがいるのさ。おじさんのきょうのふいうちと、なにか関係があるの。」

「それはひみつだよ。」

と、フレドリクソンはいいました。

そこでロッドユールは、興奮のあまり、両方のあと足でとびあがったので、ベニヤ板の箱にかけたひもがはずれて、中のたからものが、こけの上にころげでました。たからものとは、銅のぜんまい、ガーターのゴム、裁縫用のルーレット、イアリング、ダブルさしこみ、かんから、かえるのひぼし、チーズ切り、パイプ、かずかずのボタン、ソーダ水のびんのパテントをとったふたなどのがらくたでした。

「よしよし。」

となだめながら、フレドリクソンは、みんなひろってやりました。

「ぼく、まえには、とてもいいひもをもっていたんだけど、なくしちゃったね。ごめん。」

と、ロッドユールはいいました。そこでフレドリクソンは、ポケットからなわを一本とりだし

り口ぶえをふいたり、いろいろなおかしな身ぶりをしてみせて、さけびました。

「おはよう、なんてうれしいんだろう。ぼくをびっくりさせてやるっていってたけど、それは、きょうのことだったのかしら。だれをつれてきたの。光栄だな。かんの中がかたづいてなくてわるいね。」

「かまわんでくれ。ムーミンだよ。」

と、フレドリクソンがいいました。

「こんにちは。ようこそ。」

こう、ロッドユールはあいさつをして、大きな声でいいました。

「ぼくも、いっしょにいくよ……ちょっとまってね。もっていかなければならないものがあるんです……。」

こういって、ロッドユールはかんの中に見えなくなりました。わたしたちは、かれがかんの中で大さわぎをして、なにかさがしまわっている音をききました。しばらくたつと、かれはベニヤ板の箱をわきの下にかかえて、でてきました。わたしたちは三人そろって、森の中を歩いていきました。

フレドリクソンがだしぬけにいいました。

「おいっ子や、おまえ、絵がかけるかい。」

いうことなのです。かれはおいから手づくりのあみを誕生日のプレゼントにもらったが、海でつかえないのが残念だ、というわけなんです。
そのうちに、わたしは、そのおいがロッドユールという名まえで、その両親は、大そうじのときいなくなったということを知るようになりました。

（ロッドユールは、がらくた集めをする、小さな動物です。もともと、ロッドユールということばの意味は、人がひっくりかえしたりおとしたりしたものを、大した目的もなしにせっせと集める動物のことなのです。）

ロッドユールは、青いコーヒーかんに住んで、ボタンをあつめていました。これぐらいのことは、しゃべるのに、たいして長い時間はかかりません。そうでしょう？ ところがフレドリクソンは、一度にはそこまで、話してくれなかったのです。

さてフレドリクソンは、かたほうの耳をわたしにむけてちょこっとうごかすと、さきにたって森の中を歩きだしました。わたしたちは、ロッドユールのコーヒーかんのまえにつきました。フレドリクソンは、ふえをとりだして二ふきふきました。と、すぐにふたがあいて、ロッドユールがとびだしてきました。ふえはいとすぎでつくったもので、中に、まめつぶが一つはいっていました。

ロッドユールは、よろこびをまるだしにして、わたしたちのまえに走りよってくると、いきな

第2章

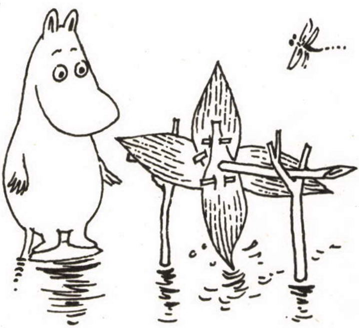


思い出の記の中に、ロッドユールとヨクサルを登場させ、竜のエドワードを紹介し、海のオーケストラ号とそのユニークな進水式のようすをのべます。



わたしがその朝、目をさますと、フレドリクソンは小川にあみをかけていました。
「おはよう。ここにさかながいるの。」
とききますと、フレドリクソンは、こういいました。
「いないがね、誕生日のプレゼントだから。」
これは、フレドリクソン流のいいかたでした。
かれのこのいいかたはかんたんすぎますが、こう

＊むかしふうのタイルストーブとは、家の下から屋上までつきぬける、えんとつにつながる、ペーチカふうの大きなストーブのことです。家の中央にれんがができずいてあり、へやはみんなこの一つの大ストーブであたためられるのです。へやにでている部分の外がわは、きれいなタイルばりになっていて、へやごとに、火かげんや換気を調節する、しんちゅうのとびらのついたたき口がとりつけられています。



ロールにおしえてやりましたっけ。
（それはこうするのです。まず、小さなまた木を二本つくって、これをすこしあいだをおいて小川の砂床にさしこみます。それから、ながいかたい葉を四まいつみとり、葉のまんなかに棒を通して星形のプロペラをこしらえます。このプロペラを小えだで補強するのですが、そのやりかたは絵で見てください。補強がおわったら、プロペラのじく棒を、気をつけてまた木の上にわたす。それで水車は水の力をうけてまわりだすのです。）

森がくらくなってから、わたしはフレドリクソンといっしょにわたしの緑の原にかえってきて、夜をあかしました。わたしたちはベランダにねたつもりなのです。でも、フレドリクソンは、そんなことは知るはずがありません。しかし、わたしにとっては、まつぼっくりのもようまで、すっかり頭の中ではできあがっていましたし、二階につうじる階段が、どうとりつけられるかも、ちゃんとわかっていたのです。もう家が、わたしの思いどおりの色にぬられてできあがったつもりでしたから、わたしはまんぞくでした。それ以上のことは、なにも考える必要がなかったのです。

この日のできごとで、なにが意味があるかといえば、わたしがはじめての友だちをえたということです。

これからわたしのまじめな生きかたがはじまるのです。



ばをつかったりしないことでした。
すこしわきへそれましたが、とにかくお話をつづけましょう。
どっちみち、この日はよいことでおわりました。気持ちのおちつかない人にわたしはすすめますが、できのいい水車が小川でコトコトまわるのを、じっと見つめていてごらんなさいな。
この水車をつくる技術は、のちになって、わたしはむすこのムーミント

「ぼくは冒険家になるつもりなんです。」
といって、話をむすびました。（ここでは、家のことや、やまあらしのことは、力をいれて話しませんでした。話をするときには、いつも話をだいじなことに、しぼらなければならないからです。）
フレドリクソンは、熱心にきいてくれ、急所にくると、耳をぴくぴくさせました。わたしが話しおわってから、かれは、ながいこと考えていましたが、やっといいました。
「すてきだ。とてもすてきだ。」
わたしは、きいてもらったことがうれしくて、思わずいいました。
「ね、そうでしょう。」
「ヘムルって、いやなやつらだね。」
と、フレドリクソンはいってから、サンドイッチの包みをポケットからだしてひろげ、
「ハムだよ。」
といって、わたしに半分くれました。
それから、わたしたちは、しばらくならんですわって、太陽がしずんでいくのを見ていました。
フレドリクソンとの長い友だちづきあいで、わたしがいつも感心したのは、かれが、人の気持ちをしずめてなっとくさせるのに、なにもとくべつ意味のあることをいったり、むずかしいこと

と、わたしはききました。
「フレドリクソンだ。きみは？」
と、水車の持ち主がへんじをしました。
「ムーミンです。避難民です。とくべつの星の下に生まれたものです。」
と、わたしはいいました。
「では、どの星だね。」
と、フレドリクソンは、はっきりと興味をしめしてきいてくれたので、わたしはうれしくなりました。わたしにたいして、教養のある質問をしてくれたのは、かれがはじめてだったのです。
とにかく、わたしは小川からはいだして、フレドリクソンのとなりにすわりました。たった一度だって、話のこしをおられることなしに、わたしはじぶんがこの世に生まれてきた意味や、生まれるときのいろいろなきざしなどを話しつづけました。ヘムレンさんがわたしを見つけたときは、わたしは葉であんだ、きれいなかわいいバスケットにはいっていたことや、ヘムレンさんの家のひどかったことや、わたしのかなしい子ども時代のことを話しました。それからまた、わたしが氷の上で冒険をしたことや、ホームからの劇的な脱出をやったことや、荒れ地をさまよっておそろしかったことなど、みんな話しました。
そうして、さいごに、

つぎに、わたしが一生のあいだ、あのやまあらしのようなおとなりさんを、もたなきゃならないものかどうか、これも考えてみてください。たぶんあのおばさんは、にたものどうしでくっついてくらしている、やまあらし一族のひとりなのですよね。

まったくのところ、わたしは三つの大きな不幸をのがれることができたわけです。それには、ふかく感謝しています。

さて、あとになってから、わたしはこの家をたてようとしたことを、わたしのさいしょの大きな経験としてかぞえました。これは、わたしの成長にとっても、大きな意味があったことだと思っています。

それはともかくとして、わたしは自由と自尊心をむねにひめて、小川をわたっていきましたが、そのときわたしの考えごとが、かろやかな小さな音でやぶられました。小川のまんなかに、棒とかたい葉でこしらえた水車が一つ、まわっていたのです。わたしはふしぎに思って、たちどまりました。つぎの瞬間、だれかの声がきこえました。

「それは、実験なんだよ。回転数のさ。」

わたしが、赤い太陽にむかって、目をほそめると、赤い大きな耳が、こけものしげみからつきでているのが見えました。

「どなたですか。」

ですよ。うたがいもなく、とても強烈な想像力ですよね。このことが、将来、わたしの一生と、わたしのまわりのものすべてに、えいきょうをおよぼすことになるんです。

やまあらしはなんともいいませんでした。長いことわたしを見ていましたが、さいわいにもわたしにはわけのわからないことをぶつぶついっただけで、さらあらいのつづきをするために、かえっていきましたっけ。

わたしは、小川の水の中にはいって、なんにも考えないで、つめたい水の中を歩きはじめました。川はわたしにはかんけいなく、かってにゆっくりと流れていました。川の水はあるところではすんで、川底の小石がよく見え、またあるところではふかくよどんで、すごい色をしていました。太陽はだいぶかたむいて、まっかな色になり、まつのみきのあいだからわたしをてらしました。わたしは、まぶしさに、目をつぶって、さきへさきへと水の中を歩いていきました。

そのうちに、カチッと音がして、わたしにまたあたらしい考えがうかびました。もしもわたしが、あの花のさいているきれいな小さい原っぱに、ほんとうにうちをたてたとしたら、原っぱぜんたいがそこなわれるかもしれません。家は原っぱのとなりにたてるべきです。しかし、原っぱのそばには家をたてる場所がありません。それはあなたがたも、わかってくださるでしょうね。

そこでみなさん、わたしが家もちになったものかどうか、考えてみてください。それにまた、家もちが同時に冒険家にもなれるものでしょうかね。むりだといわざるをえませんね。

にきてくれませんか。」
やまあらしは、信用できないというような顔つきで、わたしを見つめましたが、ため息をついて、まず手ぬぐいで前足をふいてからいいました。
「それじゃ、お湯はまたわかすとしましょう。あんた、そのうちはどこなの。遠いとこ？」
わたしはさきにたって案内しました。しかし、わたしは歩きながら、足にいやな感じがし、それがおなかのほうへはいあがってくるような気持ちになりました。
小川のほとりまでくると、
「それで？」
と、やまあらしがいいました。
「おくさん。」
と、わたしは気のどくそうにへんじをしてから、砂の上にかいた家の図面をゆびさしました。
「家はこんなふうにたてたいと思ってるのですよ……。ベランダの手すりは、まつぼっくりのようにしてね。おくさん、ぼくにのこぎりをかしてくれませんか……ぼく、どうにもこまっているんです。」
愛する読者のみなさん。あなたがたは、わかってくださいますね。わたしは、家をたてることにむちゅうになってしまって、家がもうほんとうにできあがったものと、思いこんでしまったの



ひきずりながら、わたしはくらくなった森をぬけていきました。
「またきたのね。でも、ヘムレンのことはいいっこなしよ。」
と、おさらをあらっていたやまあらしがいいました。
　わたしは、大げさな身ぶりをしながら答えました。
「おくさん、ヘムレンはぼくにとってもうなんでもないんです。ぼくは家を一軒たてるんですよ。二階だてのとてもいい家を——。それでぼくはいまとてもうれしいんですが、つかれてそのうえすごくおなかがすいています。いつも五時には夕飯をたべる習慣なものですからね。それから、ぼくは玉をぬるのにすこしばかり金色のペンキがいるんですが……。」
「ああそう、金色のペンキね。」
といいましたが、やまあらしはふきげんでした。それから、ちょっとあいだをおいて、おくさんはいいました——。
「あたらしいヨーグルトはまだできてないし、古いのはたべてしまったし……あんたは、あいにくさらあらいのさいちゅうにきたのね。」
　そこで、わたしは答えました。
「しかたがありませんよ。ヨーグルトなんか、冒険家にとっては、だいじなものではありません。それじゃおくさんおねがいですから、さらあらいをおしまいにして、ぼくのあたらしいうちを見

りには、まつぼっくりのもようをきれいにほることにしました。とんがり屋根は、たまねぎ形のうつくしい玉でかざり、ゆくゆくは金色にぬりあげるつもりでした。わたしはむかしふうの*タイルストーブのとびらを、どうつくろうかと長いあいだ考えました。それというのも、この家ぜんたいの気分に、ムーミンがタイルストーブのおくでくらしていたころのおもかげを、のこしたかったからです。思案のあげく、しんちゅうのとびらはあきらめて、そのかわりに、広間に大きなタイルストーブをおくことにきめました。

そのほか、わたしは、家ぜんたいに、正しいタイルストーブの特徴をもたせました。神秘的なはやさでできたうつくしい家のプランには、わたしは、じぶんながら、ほれぼれするほど感心しました。これは、わたしが、親からうけついだ才能のためにちがいありませんが、わたし自身の能力や判断のよさや反省の正しさにもよるものです。しかし、じぶんのしごとをじまんするつもりはありませんから、わたしはかんたんに、結果をのべるだけにしておきます。

きゅうにわたしは、さむくなったのに気がつきました。しだの下のくらいかげが、森ぜんたいにひろがり、夕やみがせまってきたのでした。

わたしはとてもつかれて、おなかもすいてきました。あたりを見わたしましたが、やまあらしのヨーグルトばちのことしか、思いつきませんでした。それに、やまあらしなら、ムーミンハウスの屋根の玉をぬる金色のペンキをもっているかもしれません……つかれてこわばっている足を

（この場所は、だれのものでもなくて、みんなのものだ、と。するとぼくの場所でもあるんだな。ところでなにをしようか。）

考えは、いつものように、すぐにうかびました。カチッというような音がして、とたんに思いついたのです。

ここにひとりのムーミンがいる。場所があるというのなら、家を一軒たてることは、いわずと知れたことです。

なんといううれしい思いつきでしょう。じぶんでたてる家、しかもわたしだけの家。わたしはそこからちょっといったところに、小川の流れと緑のあき地があるのを見つけました。いかにもムーミンむきの場所に思えました。小川がうねりまがっているあちこちには、砂地もありました。

わたしは、棒をひろって、砂の上に家の図面を書きはじめました。ためらうことはなんにもありません。ムーミンの家はどんな形のものか、わたしはちゃんと知っていたのです。それは、背が高くて、はばはせまく、バルコニーや、階段や塔がついているのです。

わたしは、二階に小さなへやを三間と、なんにでもつかえる納戸を（そういうへやをあなたは知っているでしょう）とりましたが、一階は、大きな、品のよい広間一間にしました。そのほかに、ガラスばりのベランダをつくって、そこにゆりいすをおいてすわり、そばに、大きなジュースのコップとサンドイッチをならべて、小川の流れをながめるつもりでした。ベランダの手す

「ごかってに。」
と、やまあらしはつぶやいて、ヨーグルトばちをみがきつづけました。
わたしは、心配になってきました。
「おくさん、ここがヘムレンさんのものでないということは、ほんとうにたしかなんですね。」
「なんですって。そりゃまた。」
と、やまあらしはききかえしました。
まあ、このしあわせものったら、ヘムレンさんにあったことがなかったのです。
そこでわたしは説明しました。
「ヘムレンさんは、とても大きな足をもっているんです。すこしもユーモアがなくて、鼻はぺちゃんこだし、かみはもじゃもじゃにはえています。あの人はおもしろいことなんか、なにひとつしません。ただ、しなけりゃならないことをやっているだけなんです。そうして、こうしなけりゃ、ああしなけりゃと、そんなことばかりしゃべって……。」
「それはまあまあ。」
と、やまあらしはいいながら、しだの中へもぐっていきました。
ほんとうのところ、わたしはすこしはらをたてて考えました。（ヘムレンについて、もっとしゃべりたかったのです。）

そこでわたしは、森の中をすすみました。こけは、あたたかく、やわらかでしたが、しだの下には、くらいかげがあって、見たこともないはい虫や、とび虫のむれが、うようよしていました。もちろんかれらは、まじめな話のあいてとしては、小さすぎました。さいごにわたしは、年とったやまあらしが、ひとりですわって、くるみのからをみがいているのにあいました。とあいさつすると、

「おはよう。ぼくはとくべつな星の下に生まれた、ひとりぼっちの避難民です。」

「ああ、そうなの。」

と、やまあらしは、つまらなそうにいってから、なおつづけました。

「あたしは、しごとのさいちゅうなのよ。これはヨーグルトばちにするの。」

「そうですか。」

といいましたが、とたんにわたしは、おなかがすいているのに気がつきました。それからわたしは、またききました。

「このうつくしい場所は、だれのものなのですか。」

「だれのものでもないの。みんなのものよ。」

こういってやまあらしは、かたをすぼめました。

「じゃあ、ぼくのものでもあるわけですか。」

ごくたまにしかありませんもの。いっとき、わたしは横になってから、有名人になるよりも、冒険家になったほうがいいのではないかと、まよいました。そして、さいごには、有名な冒険家になろうと決心したのです。

くたびれると、わたしは地面の上にまるまって、つめたくなった足をおなかの下にいれました。わたしは、ねむりにつくまえに考えました。（あしたこそ！）と。

目がさめたとき、わたしは、ま上にあざやかなみどりの世界があるのを見ました。わたしがびっくりしたのもむりがないのです。それまで木というものを見たことがなかったのですから。木々は目がまわるほど高く、やりのようにまっすぐに、緑の天じょうをささえていました。しげった葉は、かるくゆれて、日の光にかがやき、鳥たちはよろこびのさけびをあげながら、あちこちで、空から一直線にまいおりてきました。

わたしは、ちょっとのあいだ、気をおちつけるために、さかだちしました。それからさけびました。

「おはよう。このうつくしい場所は、だれのものですか。ほんとうに、ここにはヘムレンはいませんか。」

「あたしたち、ひまがないのよ。あそんでいるんだもの。」

鳥たちは、そうさけびながら、葉のしげみに頭からとびこんでいきました。

太陽がのぼると、くもの巣や、ぬれた葉が光りだしました。きえていくきりのあいだに、わたしは道を見つけました。荒れ地の上をまがりくねっている道は、広い世界へつうずる道で、またわたしの一生につうずる道です。わたしの一生は、ずばぬけて有名になり、ほかのどんなものにも、くらべものにならないものなんです。

わたしは、まずマッシュかぼちゃをたいらげると、かんをぽいとすてました。これで持ちものはなにもなくなりました。しなければならないことは、ひとつもありません。それに、なにもかもすべてあたらしかったので、いままでどおりにすることも、なにもありません。わたしはまったくいい気分でした。

このとくべつな気分は、その日の夕がたまでつづきました。わたしは、わたし自身のことを考え、わたしがかちえた自由を考えて、とてもうれしかったので、夕がたになっても、すこしも不安にはならなかったのです。口からでまかせな歌をうたいながら(残念なことには、どんな歌であったか、いまはわすれてしまいましたが)、わたしは夜じゅう歩きまわりました。

風は、わたしが一度もかいだことのないような、よいにおいをはこんできて、わたしの鼻を、なにかよいことがありそうな期待でわくわくさせました。それが、森においしげっている、こけや、しだや、大木のにおいだとは、ちっとも知りませんでした。

たぶん、わたしはヘムルのために、捨て子ホームなんかたてることはないでしょう。捨て子は

いっしょにいてくれたらいいなと思いました。けれども、あともどりをするということは、ぜったいにいやです。あんなごうまんな、わかれの手紙を書きのこしてきたんだから。

それでも、とうとう夜があけました。そして太陽がのぼってくると、すばらしいことがおこったのです。きりが、ヘムレンさんの日曜日のぼうしのベールみたいなばら色になったかと思うと、たちまち世界じゅうがばら色にかわって、なごやかな感じになりました。わたしはそこにたちつくして、夜がきえさっていくのを見ていました。夜のかげがさいごのかけらまではらいおとされた第一日めの朝のすがすがしさに、思うままひたっていたのです。ほんとうにわたしの朝、わたしだけの朝でした。

愛する読者のみなさん。わたしがいまいましいしるしをしっぽからちぎりとって、遠くのヒースの中へなげすてたときのわたしのよろこびとほこらしさを想像してください。それからわたしは、このあたらしい自由をいわって、ムーミンダンスをおどったのですよ――。小さな、きれいな耳をたて、鼻を上にむけて、つめたいかがやかしい春の朝を。

もうけっして、からだをあらわせられることはないのです。もうけっして、とけいが五時だからというだけのことで、食事をする必要はなく、もうけっして、王さまにたいするいがいは、だれにむかってもしっぽのおじぎをすることはなく、もうけっして、ビール色の四角なへやにねる必要もないのです。



く書かなければならん。

ひと晩じゅうわたしは、見知らぬおそろしいけしきの中をさまよい歩きました。あとになって、わたしが残念に思うのは、そのときは、たちどまろうとも、わきを見ようともしなかったことです。くらやみの中から、なにがきゅうにとびだしてくるか、わかったものじゃありませんからね……。

わたしは、捨て子ホームの朝のマーチ「この世のスーパー＝ヘムレン」の歌をうたおうとしました。けれども声がへんにふるえて、なおさらこわくなりました。きりのふかい晩で、ヘムレンさんのつくるオートミールのようなこいきりが荒れ地の上をはいまわり、しげみや岩を、へんな形の怪物にかえました。——その怪物が、わたしのほうへしのびよってきて、うでをのばしてわたしをつかもうとするんです。……なんの因果でこんなことになったのでしょう。こう考えて、わたしはぞっとしました。

そういうときには、いつもは気にくわないヘムレンさんでさえも、

「体操さ。からだのためだ。ひと足おりて、ふた足のぼる。一つおりて、二つのぼる。こうすると、筋肉にいいのだよ。」

「ただ、おちっこなしだよ。思い出の記のほうは、どうなってる。」

「上々だよ。」

といいながらパパは、ふるえる足をまどわくの上にひきもどしました。

「ちょうど、わしがにげだした場面なんだ。ヘムレンがないた……ひどく感動的なところさ。」

「いつ読んできかせてくれる？」

「もうじきだ。川船のところまで書いたらね。じぶんの書いた本を、声をだして読むってことは、どんなにゆかいだろうなあ。」

「そうね。じゃ、おやすみ。」

こうムーミントロールはいって、あくびをしました。

「おやすみ、おやすみ。」

と、パパもいって、思い出の記を書くペンのふたをとりました。

さて、どこまで書いたのだっけ——そうだ、わしはにげだしたんだ。そして朝になって——まてよ。それは、もうちょっとあとにしよう。わしはにげた夜のことを、もうすこしくわし

た。わたしはまだまだ子どものムーミンでしたから、荒れ地の上をかなしい思いでさまよったり、谷間のさびしさにため息をついたり、夜はおそろしい鳴き声におびえて、心ぼそさをつのらせるばかりでした。

　ムーミンパパが、その思い出の記をここまで書いたとき、じぶんのふしあわせな少年時代が、あんまりあわれなので、筆をはこびながらも、あらためてショックを受けたほどでした。そこでパパは、思い出の記を書いていたペンをおいて、まどべにいきました。ムーミン谷は、まことにしずかでした。夜の北風がおだやかに庭をふきぬけ、ムーミントロールのなわばしごが、風にゆられては、家のかべについたりはなれたりしていました。パパは考えました。

「いまだって、にげようと思えば、にげられないことはないな。でもこの年では、話にもならないわい。」

　パパはひとりでくすくすわらって、まどから足を外へだして、なわばしごにからだをのっけました。

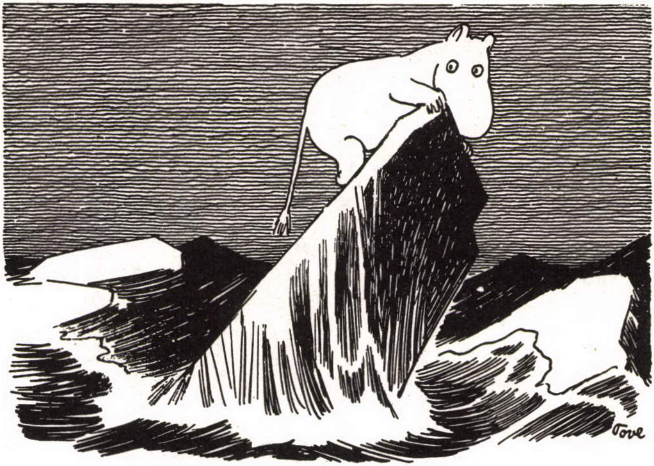
「おや、パパ、なにをしているの。」

と、となりのまどから、ムーミントロールが、声をかけました。

夕がたわたしは、敷布を長くさいてつなぎあわせ、ひもをつくると、それをまどわくにゆわえつけました。おとなしい捨て子たちは、それを見ていたのですが、なにもいいません。わたしは、それがしゃくにさわってたまりませんでした。夕飯のあとで、わたしは、考えに考えたうえで、おわかれの手紙を書きました。それはかんたんではありましたが、意味深長な、つぎのようなものでした。

へムレンさま、
大きな使命が、わたしをまっているような気がします。それに、ムーミンの命はみじかいのです。ですからわたしは、ここをでていきます。さようなら。かなしまないでください。
わたしは栄冠をかざって、もどってきます！　なお、マッシュかぼちゃ一かんもらっていきますよ。
さようなら。
ふうがわりのムーミンより

さいはなげられました。運命の星がみちびくままに、わたしはじぶんをなげだしたのです。わたしの前途にすばらしいことがあるかもしれないなどとは、ほんのちょっぴりも考えませんでし



　うっとりと波にゆられていたわたしは、ゆめごこちをたちきって、力のありったけあばれました。その結果、わたしは氷の上によじのぼることができ、それから浜のほうへむかって、はっていったのです。わたしはじぶんでじぶんにいいきかせました。

「さあ、いよいよ一つの事件を経験したぞ。これがぼくの一生での、さいしょのできごとだ。もうなんていったって、ヘムレンのうちになんかいられるものか。ぼくはぼくの運命を、ぼくの足できりひらいてみせるぞ。」

　わたしは一日じゅう、さむさにふるえていましたが、だれひとりとして、なぜふるえるのかって、きいてくれるものもありませんでした。そのことが、かえってわたしの決心をかためてくれました。

雲はたえまなく空を流れていき、なにごともなかったように、あたりはひっそりとおだやかだったのです。

きっと、わたしをおびやかしたかげの一つが、わたしをたべるつもりだったのかもしれません。こんなことだって、ありそうでした。かげが、わたしのかたほうの耳をうちへもって帰って、子どもに、こんなふうにいったかもしれませんね。

「さあ、さめないうちに、はやくおあがり。これがほんもののムーミンのさ。そんじょそこらにあるものではないよ。」

またこんなことも、考えられますね。わたしは、水のしたたる海草を耳のうしろにくっつけたまま、浜に流れつきます。するとヘムレンさんがなきかなしんで、知っているかぎりの人たちにむかって、こういうのです。

「あの子はほんとうに、ずばぬけたムーミンだったの。わたしが、それを見ぬくのがおそかったために、手おくれになってしまって、残念でたまらないわ。」

わたしの考えが、とうとう、お葬式のことにまでいってしまったとき、こわごわとわたしのしっぽをつかんだものがありました。しっぽをもっているものなら、だれだって知っていますが、この特別のかざりものは、とても内気で、危険や、失礼なことにであうと、その瞬間に、反射的に働くものなんですよ。

いくつさせることなんか、けっしてしませんよ。足……そんな下までわざわざ見る人はいやしませんさ。

ものにつかれたように、わたしはわたしのすがたにみとれました。それからもっとよく見たいと思って、氷の上にうつぶせになりました。

すると、わたしのかげはきえてしまい、ふかくふかくつづくみどり色のやみがのこっただけでした。氷の下にはひっそりと生きている見知らぬ世界があって、その中には、はっきりしないかげが、もやもやしながら、うごいていました。そのかげは、おどかすようでもあり、また心をひきつけるようでもあります。わたしは、めまいを感じながら考えました。

「ぼくはおちるんだ。あの見も知らぬかげのあいだへおちていく……。」

また、こう考えるのは、おそろしいことでした。

「ふかく、ふかく……かぎりなくただ下へ下へ……。」

わたしは、とてもこわくなって、ふるえあがりました。わたしはおきあがって、氷がもつかどうかためすために、ふみつけてみましたが、だいじょうぶでした。そこで、もうすこしさきへすすんでいって、ここでも氷がもつかどうかしらべましたところ、そこはもうだめだったのです。

あっというまもなく、わたしは耳までつめたい緑の海へはまってしまいました。わたしのたよりない足は、底知れない危険なくらやみを下にして、ばたばたやっていました。そのあいだも、

ました。なにか変化するにおいでした。

こうしてにおいをかいだり、空気をすいこんだりしているうちに、わたしは足にいたみを感じました。(足がいたむのは、おとなになるしょうこなのです。)しかしこれが、わたしにとってつごうのよいことだとは、思いもしませんでした。

それからすこしたった、ある風のふく朝のことでした。わたしは感じました……そうです、じぶんで感じただけなんです。わたしは、まっすぐに浜べへおりていきました。これは、ヘムレンさんの気にいらないことで、わたしはとめられていたのです。

海には、わたしにとってほんとうに意味深いできごとが、まっていました。わたしは、はじめてじぶんの全身像を見たのです。なめらかに光る氷は、ヘムレンさんのかざり鏡よりはずっと大きかったので、春の空の雲が、わたしのかわいくぴんとたった耳のそばを、流れすぎていくのが見えました。そしてしまいには、鼻から足のさきまできちんとつながっている、きれいな全身をながめることができたのです。

ただ一つだけ、すこしばかりわたしをがっかりさせたのは足でした。足はどうにもたよりない子どもっぽい形をしていたので、わたしはとまどってしまいました。けれども、たぶんそのうちに、かっこうがよくなるだろうと考えました。

わたしがたよりにしたのは、うたがいもなく、頭なのです。わたしがなにかするなら、人をた

心するわけではありません。）

ほんとうに、ゆううつな時代でした。

けれども、すこしずつようすがかわってきました。わたしは、じぶんでじぶんの世界をつくりだすことを考えはじめたのです。わたしは、つめたいまわりのものには目もくれずに、もっとじぶん自身のことを考えるようになって、それをすばらしいしごとだと思うようになりました。わたしは質問するのをやめて、そのかわりに、じぶんがどう感じ、どう考えるかをしゃべるのが、おもしろくなりました。けれども、まあどうでしょう。わたし自身のほかには、わたしのことに興味をもつものはだれもいなかったのです。

ところが、そのうちに、わたしの成長にとって大きな意味をもつ、あの春がやってきたのです。はじめのうちは、それがわたしにとって、どんな意味があるのか、わかりませんでした。いつものように、口ぶえや、ハミングや、がやがやする音がきこえているだけでした。冬のねむりからさめて、せかせかとたちまわるものたちのざわめきだったのです。そのうちに、きちんとつくられたヘムレンさんの野菜畑が、活動をはじめたのに気がつきました。地面をつきやぶってでてきた芽は、みんな、がまんがならなかったというふうに、しわだらけのまんまでした。

でも、新しい風は、夜になると歌をうたっていました。いままでとはちがったにおいもしてき

か。」

と、ヘムレンさんがいいました。

残念ながら、ヘムレンおばさんのいうのがただしかったようです。

このようにして、わたしの子ども時代のはじめは、いつも心の中にうたがいをいだきながら、すぎていきました。わたしは、ふしぎに思うことを、じぶんでじぶんにきくほかに、なんにもすることがなかったのです。そして、どこで？　いつ？　だれが？　なにを？　という問いを、くりかえしていました。

ヘムレンさんと、おとなしい捨て子たちは、わたしをできるだけさけていました。「なぜ？」ということばは、目に見えて、かれらのきげんをわるくしました。それで、わたしは、ひとりぼっちで、ヘムレン家のまわりの、木もはえないあれはてた海べを、歩きまわるのでした。くもの巣のことや星のことを考えたり、水たまりで、尾をまきあげていそがしそうにおよぎまわっているへびのことを考えてみたり、ちがった方向からふいてきて、いつもちがったにおいをはこんでくる風のことを考えながら、歩きまわっていたのです。（あとになって知ったのですが、才能あるムーミンというものは、わかりきった、めずらしくもないことがらでも、いつも一度はふしぎに思うのです。でも、ふつうのムーミンがたいしたものだと感心するものでも、ぜんぶがぜんぶ感

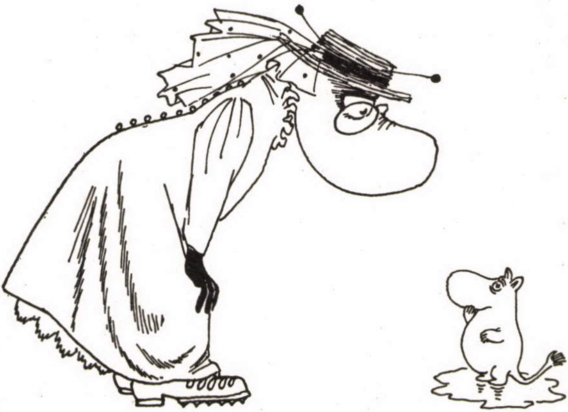
「お気のどくだけど、ちがいます。おまえはほんもののムーミンだよ。」

と、ヘムレンさんはつまらなそうに、いいました。

「わたしは、おまえとは、どうもしょうがあわないらしいね。頭がいたくなるよ。このスーパーヘムルの世界で、おまえは、なにになるつもりなの。」

「ぼくは有名になるんです。それから、いろいろしたいことがあるけど、ヘムルの捨て子ホームもたてたいな。このホームでは子どもたちは、みんなベッドの中でシロップパンをたべてもいいし、ベッドの下でへびをかってても、スカンクをかってもいいんです。」

「そんなことに、なるわけがないじゃない



わたしはゆううつでした。わたしは、もういちどたずねました。
「どこまでいってもきりがないの？　いつかはさいしょのパパとママがあったにちがいないと思うけど。」
「ずっと、ずっとむかしのことさ。そんなことに、かかずらう必要はありません。なぜこんなことに、きりがいるんだい。」
（ぼんやりとでしたが、あるすじのとおった一つの考えが、わたしの頭にうかびました。わたしのパパやママの系統は、きっと、かなりとくべつなものにちがいない、ということでした。王冠がわたしのうぶ着にししゅうしてあっても、ふしぎではなかったのです。ところが、ちぇっ、新聞紙とはなんたることでしょう。）
ある晩、わたしは、しっぽの角度を七十度にまちがえて、おじぎをしたゆめを見ました。わたしがこのゆかいなゆめをヘムレンさんに話して、おこるかどうか、ようすを見ていると、おばさんはいいました。
「ゆめなんか、つまらないものよ。」
そこでわたしは反対しました
「どうしてそういえるの。もしかすると、ぼくがゆめで見たムーミンがほんもので、ここにたっているムーミンは、ただおばさんが、ゆめで見ているやつじゃないの。」

「ちゃんとうまくいってるじゃないか。これではいけないとでもいうのかい。」

ヘムレンさんはこんなふうで、けっして、まんぞくな説明はしてくれませんでした。わたしの知りたがっていることを、ヘムレンさんは、ほったらかしにしようとしているのだなと、だんだん、はっきり感じるようになりました。

どこで？　いつ？　だれが？　なにを？　……そんなことは、ヘムルたちにとっては、なんの意味もないのですね。

わたしは、ヘムレンさんにただしました。

「なぜ、ぼくはぼくであって、ぜんぜんべつのだれでもないの。」

「あたしたちふたりにとって、運がわるかっただけのことさ。からだをあらったかい。」

これが、こんなにもたいせつな質問にたいする、ヘムレンさんの答えでした。

わたしは、つづけざまにききました。

「しかし、おばさんはなぜヘムルで、ムーミンじゃないの。」

「あたしのパパとママが、ヘムルだったのさ……くわばら、くわばら。」

「じゃ、そのパパとママは？」

「ヘムルさ。そのさきのパパやママたちも、みんなみんな、ずっとさきまでヘムルさ。さあからだをおあらい。あらわないと、おこるよ。」

おお、こんなこと、ほんとうに、なみだなしに話せましょうか。
わたしはよく、小さなかざり鏡の前にたって、じぶんのうれいをたたえた青い目のおくを見つめながら、わたしの生命のひみつを、なんとかして見ぬこうとしました。けれども、前足で鼻をおさえて、ため息をつくだけでした。
ひとりぼっち、つらい世の中。あじけない運命。そのほか、いろんなかなしいことばが、わたしの気分を、いくらからくにしてくれました。
わたしは、ほんとうに、ひとりぼっちのムーミンっ子でした。しかし、ムーミンの子にも、とくべつの才能があることだってありますよね。だれもわたしの才能を、わかっちゃくれませんでしたが、じぶんでもじぶんの才能がわからなかったのです。
もちろん、わたしは、わたしと、ほかのムーミンっ子たちとのちがいには、気がつきました。ちがいというのは、おもに、ものごとに興味をもち、それをふしぎに思う能力があるかどうかということでした。
たとえば、わたしなら、ものごとについてヘムレンさんに、
「なぜこうなっているのですか。なぜこの反対ではいけないのですか。」
とたずねることが、しょっちゅうでした。
するとヘムレンさんは、いいました。

ように、いんきくさい顔をして、こざっぱりとしたぎょうぎのよい子どもたちでした。というのは、ヘムレンさんは、みんなをだきあげてかわいがるよりも、あらってやるほうによけい手をかけたからです。（そのヘムレンさんは、ものごとをきちんとやるタイプの人でしたが、やさしい気だてにはかけていました。）

愛する読者のみなさん、ムーミンホームというものを、ひとつ想像してみてください。きちんとならんだへやが、みんなまっ四角で、ビール色一色にぬってあったんですよ。あなたがたは、おそらくわたしのいうことを信じないでしょうね。ムーミンホームには、気持ちよくおしゃべりのできる場所とか、個室とか、あるいは階段やバルコニーや塔なんかが、たくさんあるはずだと、あなたがたはいうでしょうが、それがここにはなかったのです。それどころか、もっとひどかったのですよ。夜、起きあがって、たべたり、しゃべったり、歩きまわったりすることは、とめられていました。（おしっこするのが、やっとこさでした。）

わたしは、かわいい子へびをつかまえて、ベッドの下でかっていたかったのですが、それはゆるされませんでした。

きまった時間に食事をし、きまった時間にからだをあらわなければならなかったのですよ。

おじぎをするときには、しっぽを四十五度の角度で、上にぴんとたてていなければいけなかったんです。

でしょうに。

さて、そのころ捨て子ホームを経営していたヘムレンさんは、星うらないがすきで、これをありふれたことにまでつかっていましたから、わたしがこの世に生まれてきたときには、いったいどんな星が支配していたかを、しらべました。星のおつげでは、ずばぬけた才能をもったムーミンが生まれた、とでましたので、ヘムレンさんはこのわたしのためにくろうすることになりはしないかと、気が気でなかったそうです。(天才というものは、ふつうはおもしろみのない人間ととられやすいのですが、わたし自身は、天才がちっともじゃまになりませんでした。)

星の位置というのは、たいせつなものですね。わたしがもし、もう二、三時間はやく生まれていたとすれば、よたもののばくち打ちになっていたんですって。それから、わたしより二十分あとに生まれたものは、みんな、ヘムル自由楽団にはいりたい気持ちにかきたてられたんですってさ。(パパたち、ママたちが、子どもをこの世におくりだすときに、じゅうぶんに気をつけるというわけにはいかないかもしれませんが、どうか念をいれて、よく計算するようにすすめますよ。)

わたしは買い物ぶくろからとりだされると、おさだまりのやりかたで、三べん、くしゃみをしました。べつに意味があってしたわけではありませんが……。

ヘムレンさんは、わたしのしっぽに、しるしをつけました。しるしにおされた数字は不吉な十三でした。わたしよりもまえに、もう十二人の捨て子がひろわれていたからです。みんなおなじ

第1章



いまでは想像もつかないような、わたしの子ども時代と、わたしの一生のうちのさいしょのできごとと、家出をしたあのおそろしい夜のことと、フレドリクソンとの歴史的な出会いについてのべます。



ずっと前のことです。いんきな風のふくある八月の夕がた、ムーミン捨て子ホームの階段の上に、ごくありふれた買い物用の紙ぶくろが一つ見つかりました。この紙ぶくろの中にいたのが、ほかでもない、このわたしでした。むぞうさに、新聞紙につつまれていたのです。小さなバスケットにでもいれて、こけでもしいた上においてくれてあったのなら、もっとずっとロマンチックだった

て、こんなことをいうだろうと思いますよ。「まあ、ムーミンってそんな子？」とか、「それが生きるということだ。」（わたしがまじめな考えかたをしているのに、われながらまったくおどろきます。）

　さいごに、わたしの一生を、一つの作品にまとめあげるために、時間をさいてくださったみなさんに、心からお礼をもうしあげたいのです。それにフレドリクソンや、ニョロニョロや、わたしの妻すなわち、ムーミントロールのたったひとりのママにも、お礼をいいたいと思います。

　八月、ムーミン谷にて　　著者

　あなたが、ほんとうに、わたしの思い出の記を読んでくださるのなら、はじめからくりかえし読みかえすことを、おすすめします。

あることでしょう。でも、それは、ただほんとうに、経験した土地のようすをはっきりえがくためや、そのときの気持ちのもりあがりをいいあらわすためなのです。そのほかは、まるっきり真実なのですよ。

　まだ生きている人たちのおもわくを考えて、わたしは、ところどころ、わざと名まえをとりかえたところがあります。たとえば、フィリフヨンカをヘムレンにしたり、また、ガフサをやまあらしにかえたことなどです。けれどもかしこい読者のみなさんには、ほんとうはどうだったのか、ちゃんとおわかりになるはずです。

　そのうえ、みなさんは、ヨクサルが、ふしぎにも、スナフキンのパパであることを発見し、スニフがロッドユールの子どもであることも、じきにお気づきになるでしょう。

　ねえ、むじゃきな子どもさんたち。あなたがたは、あなたがたのパパはみんな、りっぱで、きびしい人ばかりだと思っているでしょうが、わたしたち三人のパパたちの、経験を書きつづった、この話を読んでごらんなさいな。そしたら（どのパパも、にたりよったりのものだなあ！）と考えるようになりますよ。すくなくも、パパたちのわかいときにはね。

　わたしは、じぶんの世代と、つぎの世代の人たちにむかって、冒険だらけだったけれど、すばらしかったわたしたちの青春時代のお話を、どうしても書かなければならないと思うのです。そしてわたしは、これを読んだたくさんの人たちは、このお話について考えたあげく、鼻をもたげ

しておきましょう。
「世の中で、なにかよいこと、あるいは、ほんとうによいと思われることをしとげた人は、みんなだれでも、じぶんの一生について、書きつづらなければならないのです。それはその人たちが、真理を愛し、かつ、善良であるばあいのことですが。しかしながら、こういううつくしい計画は、年が四十さいになるまえに、はじめてはならないでしょうね。」

わたしがこの思い出の記を書きつづるについては、とかく、よいことばかりを、それにもまして、わたしがよいと思ったことばかりを書くことになりそうです。ですから、わたしは、なるべく、しょうじきに、真実を語ることを心がけようと思います。あまりかなしいことでさえなければね。（わたしの年はわすれました。）

そうです。わたしは家族のものにもときふせられたので、全力をそそいでこれを書くつもりです。なぜか。それはムーミン谷じゅうで読んでもらえるほど、人をひきつける力があるものと、わたしには思えるからなんですよ。

この、わたしのかざりっ気のない思い出の記が、ムーミン族のみんなに、とりわけわたしのむすこによろこばれ、また、よい教訓になるようにいのります。

わたしは、もとはものおぼえがよかったのですが、このごろは、めっきりわるくなりました。とはいっても、この自叙伝では、すこしは大げさにいったり、ごたまぜになったりするところも

序章



　わたし――ムーミンパパ――は、こんやは、まどぎわにこしかけて、まっくらな庭の黒ビロードに、ほたるが、神秘的なもようをしじゅうしていくのを、じっとながめています。みじかかったけれども、幸福だったわたしの一生……その絵巻物を、わたしはいま、えがこうとしているのです。

　この家族の父であり、またこの家の持ち主であるわたしの一生は、あらしつづきでした。わたしはわたしの青春時代を、かなしい気持ちで、ふりかえっています。それをいま書きつづるところなのです。この思い出の記を書くペンは、わたしの前足の中で、まだまよってふるえています。

　けれども、わたしはつぎのことばで、わたし自身を勇気づけようとするのです。このすばらしい金言は、わたしが、ある大人物の自叙伝の中で、見つけだしたものです。ここにそのことばをしる

昼ごはんのあととか、夕ごはんのあととかにさ。」
　こう、ムーミンママがいいますと、
「そうそうはやくいくものじゃないよ。」
と、パパはいって、毛布（もうふ）から顔をだしました。
「本は、とくに、きちょうめんに書くものだということを、おまえは知らないんだね。わしはな、一つの章（しょう）ができあがるまでは、ほんの一節（せつ）だって朗読（ろうどく）したりはしないからな。しかし、おまえだけには、ないしょで読んできかせるよ。ほかのものにきかせるのは、そのあとだ。」
「はいはい、あなたのおすきなようにね。」
　ママはこういって、ノートをさがしに、ものおきへあがっていきました。
「パパはどう？」
と、ムーミントロールがききました。
「もうだいじょうぶよ。それから、おまえたち、ほんとうにしずかにしていてね。パパがきょうから、思い出の記を書きはじめるんですから。」



ますからね……ときに、夕ごはんをいまあがりますか。野菜スープとジュースですが……。」
こう、ママがいいますと、
「それは、ごちそうさま。」
と、パパはいったものの、ふきげんそうにねがえりをうって、かべのほうをむくと、ゴホンゴホンとからぜきをしました。
ムーミンママは、しばらくすわってパパを見ていましたが、
「ねえ、あなた、このあいだ、ものおきをそうじしていたら、大きなノートを一さつ見かけたのよ。あなたのわかいころのことを書いて、本にしたらどう？　考えてごらんなさいよ。」
といいました。パパはそれにはなにもいいませんでしたが、せきはとまりました。ママは、なおもつづけました。
「それには、いまがちょうどいいわよ。どうせ、かぜで外にでられないのですもの。——人の一生について書くことを、思い出の記というのじゃなかった？　それとも、なにかべつな名まえがあったかしら。」
「いや、思い出の記だよ。」
と、パパはいいました。
「そして、あなたが、書けたぶんだけずつ、あたしたちに、読んできかせてくださったらどう？

てきて、パパに気分はどうかとたずねました。
「どうもね、いままでとおなじだよ。ところで、これはたいせつなことなんだが、おまえもわしの海泡石の電車に関心をもってもらいたいもんだね。」
こう、パパがいいますと、ママは、いぶかしそうにききました。
「あの広間のかざりものですか。いったい、あれがどうかしたのですか。」
パパは、ベッドにおきあがっていいました。
「おまえ、なにもわかっちゃいないんだね。あれはわしの青春時代に、大きな役わりを演じたものなんだぜ。」
「ええ、きっと福引きであたったとか、なんかそんなものだったんでしょ。」
パパは頭をふって、鼻をかむと、ため息をついていいました。
「わしはつくづく考えてしまったよ。わしがけさ、かぜで死んだとしてごらん。そしたら、おまえたちのうち、だれひとりとしてあの電車の話を知ってるものがないわけだ。それとおなじようなことが、ほかのたいせつなことにもたくさんあるにちがいない。わしの青春時代の話は、おまえたちにも話してはあるが、もちろんみんなわすれてしまっただろうな。」
それに、ママは同意しました。
「きっと、あちこちすこしはわすれたかもしれませんわ。記憶というものは、だんだんとうすれ

パパは、あきらめて北がわの屋根裏べやのベッドに横たわりました。パパはいままで病気というものをしたことがなかったので、もう死ぬんじゃないかと、とても心配になりました。のどのいたみがいちばんひどかったとき、パパはママにたのんで、ムーミントロールとスニフとスナフキンをよんでこさせ、ベッドのまわりに、みんなをならばせました。そしてパパは三人にむかって、いいきかせたのです。

「おまえたち、ほんものの冒険家として、生きるのだよ。それをけっしてわすれてはならないよ。」

それからパパは、スニフに、広間のたんすの上にのっている、海泡石の電車をもってくるようにいいつけました。けれども、パパの声があんまりかれていたので、だれもパパのいったことが、わかりませんでした。

みんなはパパをかわいそうに思って、ふとんをかけてやって、なぐさめました。それから、キャラメルやアスピリンやおもしろそうな本などをもってきてあげてから、日のあたっている外にでかけました。

パパはそのまま、横になっていましたが、ねむりつくまでのあいだ、ぷんぷんおこっていました。夕がたちかく目がさめたときには、のどのほうはすこしはよくなっていましたが、パパはまだおこっていました。

パパがベッドの横においてあったベルをならすと、ムーミンママは、すぐさま、階段をあがっ

プロローグ

ムーミントロールが、まだうんと小さかったころのことです。

あるときパパは、夏のいちばん暑いさかりだというのに、外にでかけて、かぜをひいてきました。しかしパパは、たまねぎとお砂糖いりのあたたかいミルクをのむのがきらいですし、ベッドに横になるのもきらいです。

パパは庭のぶらんこにこしかけて、鼻ばかりかんでは、たばこがひどくまずいと、こぼしました。そうして、ムーミンママが、小さなかごにいれてもってきたハンカチを、しばふじゅういっぱいにちらかしました。

鼻かぜがいっそうひどくなると、パパはベランダへひっこしてきて、ゆりいすにこしをかけて、鼻の上まで毛布をかけました。そこへ、ママはじょうずにつくったラムいりトディ（ラム酒をもとにつくったあたたかいカクテル）をもってきました。でも、もう手おくれでした。ラムいりトディは、たまねぎミルクとおなじに、パパの口にはあわなかったのです。


Tove

●ヨクサル

海のオーケストラ号の乗組員。ものごとはつきつめて考えない性質で、これはむすこのスナフキンにも遺伝している。パイプもすき。



●ヘムレンおばさん

ムーミン捨て子ホームの経営者。新聞紙にくるまれたムーミンパパをひろって育てる。ニブリングも教育する。



●ニブリング

いつも海の中を群れをなしていて、人の鼻をかじるのが大すき。ヘムレンおばさんを海のオーケストラ号からさらっていく。



おもな登場人物

●ムーミンパパ

捨て子だったムーミンパパは、たくましく成長して冒険家となり、海にのりだしていく。

●フレドリクソン

すばらしい発明家で、海のオーケストラ号をつくり、ムーミンパパと冒険の旅にでる。



●ロッドユール

コーヒーかんの中に住んでいて、ボタンやがらくたを集めるのが趣味。スニフの父親。



もくじ

MUMINPAPPANS MEMOARER

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

ムーミンパパの思い出

トーベ=ヤンソン／作・絵
小野寺百合子／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

ムーミンパパの
思い出

トーベ＝ヤンソン/作・絵
小野寺百合子/訳